

千葉東南部ニュータウン27

—千葉市春日作遺跡—

平成15年3月

都市基盤整備公団

財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン27

—かすがさく千葉市春日作遺跡—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第458集として、都市基盤整備公団の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市春日作遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、本事業地内の遺跡としては数少ない旧石器時代終末期の細石刃石器が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

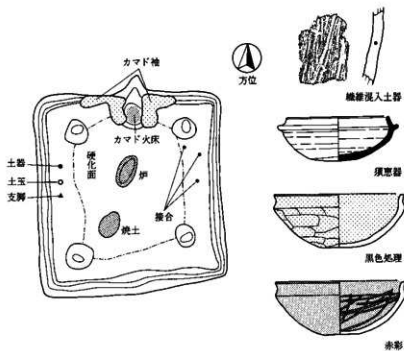
終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡 例

- 1 本書は、都市基盤整備公団千葉地域支社による千葉東南部地区におけるニュータウン建設計画(土地区画整理事業)に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録している。遺跡の地番については、平成13年度に町名・地番変更が行われたため変更された新地番を記すが、旧地番も付すことにした。
春日作遺跡 遺跡コード201-123 千葉市緑区おゆみ野南4丁目4番地他(旧千葉市緑区富岡町272他)
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、都市基盤整備公団千葉地域支社の委託を受け、千葉県教育庁文化財課の指導のもと財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の詳しい経緯については第1章第1節に記した。
- 5 本書の編集は、中央調査事務所長 谷 旬の助言のもとに蜂屋孝之が行い、第2章を高立 桂、それ以外の各章を蜂屋孝之が執筆した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化財課、都市基盤整備公団千葉地域支社、千葉市教育委員会から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した航空写真は、京業測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用している。
- 8 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。
- 9 本書中に掲載した遺構・遺物の縮尺については、挿図中のスケールに付した。基本的には遺構は、堅穴住居跡と古墳が1/80、カマドが1/40、陥穴や土坑が1/60である。
遺物は、旧石器時代遺物が1/1または2/3、縄文土器拓本1/3、縄文時代石器が2/3または1/3、実測した須恵器・土師器の各種土器が1/4などである。
本書の挿図中に使用した遺構・遺物の用例は、以下のとおりである。



旧石器時代属性表

打面	数字：打面上に携る割離面数 打撃方向が判断できない処理面であっても、数に含める。そのうちネガティブバルブをもつ割離面数を()内に示す。
P:	片状打面
L:	縁状打面
C:	自然面打面
背面構造	I：主要割離面と同一方向の割離面が存在する場合 II：主要割離面と逆方向の割離面が存在する場合 III：主要割離面と直交または斜行する割離面が存在する場合 I-IIIの場合、剥片割離後の調整痕は除く。
IV:	割離方向が不明な処理面
末端形状	F：直線状 Feather end H：嘴状 Hinge fracture S：階段状 Step fracture O：造反りまたは石核表面に達する Outrigger
折れ	記号は折れによって残存している部位を示す。 H：頭部 Head VM：上下方向の中線部 Vertical Middle B：底部 Bottom R：背側からみて右側 Right HM：左右方向の中線部 Horizontal Middle L：背側からみて左側 Left

本文目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡の環境	2
第3節 調査の方法	5
第4節 検出された遺構・遺物の概要	6
第2章 旧石器時代	
第1節 基本層序	10
第2節 A地点	11
第3節 B地点	26
第4節 C地点	30
第5節 単独出土・遺構内出土・表面採集石器	30
第3章 縄文・弥生時代	
第1節 縄文時代	33
第2節 弥生時代	38
第4章 古墳時代以降	
第1節 竪穴住居跡	39
第2節 小竪穴跡	54
第3節 古墳	58
第4節 有天井土壌	58
第5節 その他の土坑	60
第6節 溝	62
第7節 遺構外出土遺物	63
報告書抄録	

挿図目次

第1図 千葉東南部地区事業範囲位置図	2	第12図 A地点出土遺物(3)	18
第2図 千葉東南部地区遺跡分布図	3	第13図 A地点出土遺物(4)	19
第3図 グリッド分割図	5	第14図 A地点出土遺物(5)	20
第4図 確認・本調査グリッド配置図	7	第15図 B地点遺物及び母岩別分布図	27
第5図 遺構配置図(1)	8	第16図 B地点出土遺物	28
第6図 遺構配置図(2)	9	第17図 C地点出土遺物	30
第7図 基本土層図	10	第18図 単独出土・遺構内出土・表面採集石器	32
第8図 A地点遺物分布図	13・14	第19図 陥穴	33
第9図 A地点母岩別分布図	15	第20図 縄文土器(1)	35
第10図 A地点出土遺物(1)	16	第21図 縄文土器(2)	36
第11図 A地点出土遺物(2)	17		

第22図	縄文時代土製品	37
第23図	縄文時代石器	38
第24図	弥生土器	38
第25図	011号跡及び出土遺物	41
第26図	012号跡及び出土遺物	42
第27図	013・014・017・018号跡	44
第28図	013・014・017号跡出土遺物	45
第29図	017号跡出土遺物	46
第30図	017・018号跡出土遺物	47
第31図	015・016号跡及び出土遺物	48
第32図	021号跡及び出土遺物	50

第33図	021号跡出土遺物	51
第34図	025・026・027号跡及び出土遺物	52
第35図	025号跡及び出土遺物	53
第36図	025号跡出土遺物	54
第37図	030号跡及び出土遺物	55
第38図	036号跡及び出土遺物	56
第39図	小竪穴跡	57
第40図	028号跡及び出土遺物	59
第41図	有天井土壇	60
第42図	その他の土坑	61
第43図	溝及び遺構外出土遺物	

表 目 次

第1表	A地点出土石器属性表	22~24
第2表	A地点出土石器組成表	25
第3表	B地点出土石器属性表	29
第4表	B地点出土石器組成表	29
第5表	C地点出土石器属性表	30
第6表	単独出土・遺構内出土・ 表面採集石器属性表	31
第7表	型式別出土数	34

第8表	耳飾・土錘計測値表	37
第9表	縄文時代石器計測値表	37
第10表	竪穴住居跡一覽表	39
第11表	土器觀察表	65~70
第12表	土玉計測値表	70
第13表	玉類計測値表	70
第14表	紡錘車計測値表	70

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真
図版2	遺構遠景・調査風景
図版3	A地点遺物出土状況・B地点遺物出土状況・基本土層
図版4	A地点出土石器(1)
図版5	A地点出土石器(2)
図版6	A地点出土石器(3)
図版7	B地点出土石器・C地点出土石器
図版8	単独出土・遺構内出土・表面採集石器
図版9	遺構外出土縄文土器
図版10	遺構外出土縄文土器・石器・土製品
図版11	011号跡・012号跡・013号跡・014号跡・015

	号跡・016号跡・017号跡・018号跡・019号跡
図版12	015号跡・016号跡・021号跡・024号跡・025号跡・026号跡・027号跡・029号跡
図版13	020号跡・022号跡・030号跡・032号跡・036号跡・038号跡
図版14	遺構出土土器(011・012・013・014・015・017)
図版15	遺構出土土器(017)
図版16	遺構出土土器(018・021・025)
図版17	遺構出土土器(025・030・036)
図版18	遺構出土土器(001・002・022・028)・遺構外出土土器・土玉ほか

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯

住宅・都市整備公団(現 都市基盤整備公団)によって約606ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業が計画された。このため、千葉県教育委員会は、昭和46年度に事業地内の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施した。その結果、対象区域内に所在する多数の遺跡が確認された。これらの遺跡の取扱いについては、住宅・都市整備公団と千葉県教育庁文化課との協議の結果、事業地内の遺跡について公園、緑地としてできる限り現状保存に努める一方で、現状保存が困難な部分についてはやむを得ず事前の発掘調査を行って、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが住宅・都市整備公団から委託を受け、発掘調査を実施してきた。

現在では土地区画整理事業にかかる発掘調査がほぼ収束を迎え、報告書の刊行に伴う作業が続けられている。本書に収録した春日作遺跡は、都市基盤整備公団から事業地南西部にあたる事業の境界部分について、該当区域67,000㎡の部分の埋蔵文化財に関する新たな照会が行われたことを受けて、県文化課による試掘が実施され、新発見の遺跡として確認された。都市基盤整備公団と県文化課との協議の結果、遺跡の名称を春日作遺跡とし、3,700㎡を対象として平成9年度に調査が実施されることとなった。

発掘調査は、平成9年10月1日から平成9年10月13日まで上層の確認調査を実施し、遺構・遺物を検出したため、対象面積全域の本調査を実施した。下層確認調査は、平成9年11月10日から平成9年11月21日まで実施し、3地点で遺物が確認されたため、継続して本調査を行い平成9年11月28日にすべての調査を終了した。発掘調査及び整理作業の実施期間・担当職員・内容は以下のとおりである。

発掘調査

期間：平成9年10月1日から平成9年11月28日

組織：中央調査事務所長 藤崎芳樹

担当職員：主任技師 四柳 隆、技師 小笠原水隆、吉野健一

内容：3,700㎡のうち上層確認調査370㎡及び下層確認調査208㎡

上層本調査3,700㎡及び下層本調査396㎡

整理作業

平成12年度

期間：平成13年2月1日から平成13年3月30日

組織：中央調査事務所長 三浦和信

担当職員：主任研究員 相京邦彦

内容：水洗・注記・分類・選別、復元

平成14年度

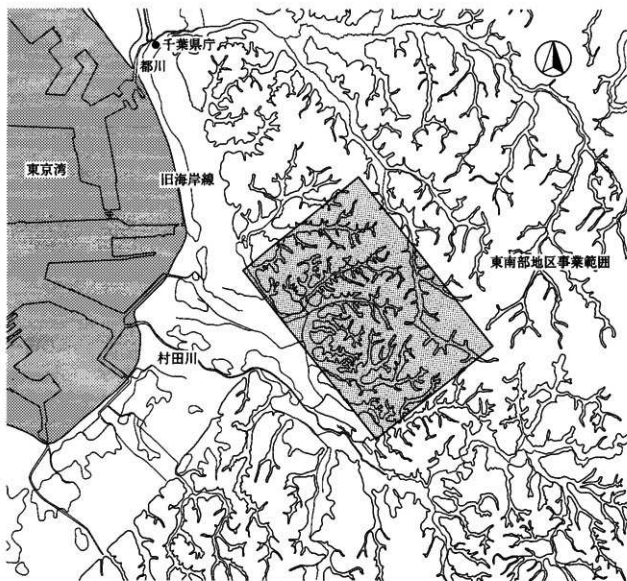
重点遺跡整理促進事業

期間：平成14年6月1日から平成14年8月31日

組織：整理課長 石田廣美

担当職員：整理課 主席研究員 太田文雄、整理技術員 木島桂子

内容：実測、トレースの一部



第1図 千葉東南部地区事業範囲位置図 (1/80,000)

期間：平成15年2月1日から平成15年3月14日

組織：中央調査事務所長 谷 旬

担当職員：上席研究員 蜂屋孝之

内容：トレースの一部、図面作成、図版作成、原稿執筆、報告書刊行

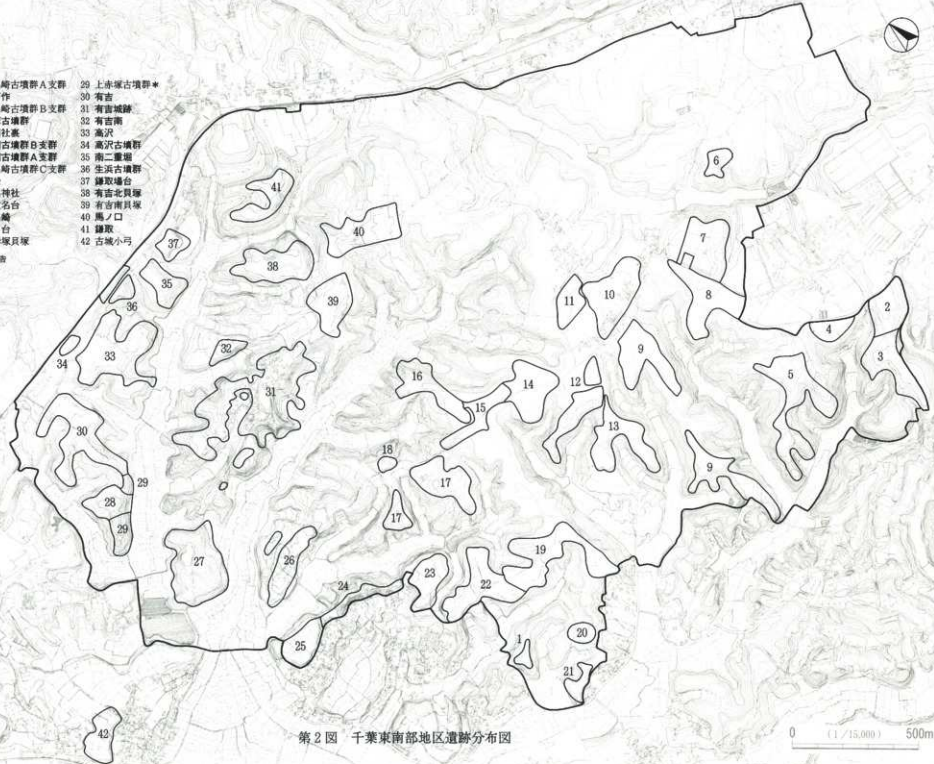
第2節 遺跡の環境

1 地理的環境(第1図)

千葉東南部地区は、千葉市の東南部に位置し現在は緑区の中心地となっている。南は村田川を境として市原市と接し、JR外房線や千葉東金道路、千葉外房有料道路などが通っている。ほぼ土地区画整理事業を終えつつある現在は見る影もないが、昭和50年代半ばまでは鬱蒼とした森林に囲まれた房総丘陵の景観を呈していた。千葉東南部地区に点在する遺跡は、房総半島の北部一帯を占める広大な下総台地上にあって最上部の立川ローム層を穿って遺構が構築されている場合が一般的である。下総台地は、西は江戸川から東は銚子までの北部一帯を占めており、標高は南部で150mにも達するが北部では80m以下がほとんど

- | | | |
|------------|---------------|------------|
| 1 春日作 | 15 椎名崎古墳群 A支群 | 29 上赤塚古墳群* |
| 2 大淵野南貝塚 | 16 木戸作 | 30 有吉 |
| 3 パクナ穴* | 17 椎名崎古墳群 B支群 | 31 有吉城跡 |
| 4 大淵野北 | 18 狐塚古墳群 | 32 有吉南 |
| 5 太田法師 | 19 神明社裏 | 33 高沢 |
| 6 白鳥台 | 20 宮岡古墳群 B支群 | 34 高沢古墳群 |
| 7 六邊持社南 | 21 宮岡古墳群 A支群 | 35 南二重遺 |
| 8 六通金山 | 22 椎名崎古墳群 C支群 | 36 生浜古墳群 |
| 9 ムコアラク* | 23 今吉 | 37 藤取塚台 |
| 10 六通貝塚 | 24 椎名神社 | 38 有吉北貝塚 |
| 11 六通 | 25 伯父名台 | 39 有吉南貝塚 |
| 12 小金沢古墳群* | 26 椎名崎 | 40 馬ノ口 |
| 13 御塚台* | 27 城ノ台 | 41 藤取ノ口 |
| 14 小金沢貝塚 | 28 上赤塚貝塚 | 42 古城小弓 |

ゴシツは既報告、*印は一部の既報告



第2図 千葉東南部地区遺跡分布図

0 (1/15,000) 500m

で東南部地区が含まれる東京湾岸の西部地域はほとんどが50m以下である。下総台地の地形的な性質は、隆起海岸平野で、下末吉期の海進により、台地の平坦面が形成され、その後の海面低下の中で台地化したものであるという。陸化の過程で地域によっては隆起の速度が異なったり、海面低下も一様ではなかったため詳細に見れば数段の段丘に分かれている。このうち下位段丘は鹿島川、村田川、都川の流域に見られる河岸段丘を主としている。この段丘は河川左岸、南斜面によく見られ、反対に右岸には少ない傾向がある。低地は、都川、村田川などの河川に沿う谷底平野と東京湾岸の平野からなる。谷底平野は、縄文海進期には溺れ谷となったものでその多くは現在でも田んぼとして利用されている。

千葉東南部地区の南側を流れる村田川は、長生郡長柄町の山之郷に端を發し、北流して下り河口近くになると西流して、主に南からの支流を集める。地区内に入り込む支谷は、村田川から直接分岐するものは少なく、村田川の海岸平野の出口付近から赤塚支谷、泉谷支谷、金沢支谷の3つの支谷が地区内に直接入り込んでいる。支谷は樹枝状に分岐し、最も谷密度の高い地域となっており、台地は支谷の末端で小さく分断され、谷と台地とが複雑に交錯する高低差の多い地形を呈している。

春日作遺跡が立地する台地は、金沢支谷がさらに分岐した小金沢支谷と大金沢支谷に挟まれたやせ尾根状の小台地群の1つである。支谷の標高は約15mで台地の頂上は標高35mを測り、比高差は20mある。台地は三角形形状を呈し、3方向はみな急な斜面である。平坦面は中央部のわずかな面積に限られ、集落を営むには自ずとその規模に制約があることは言うまでもない。

2 周辺の遺跡（第2図）

千葉東南部地区内の遺跡の多くは、旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物を複合的に伴っており、特定の時期に限られた単純遺跡はきわめて少ない。なかでも、縄文時代の大型貝塚や古墳時代中・後期の集落跡や古墳群、奈良・平安時代の集落跡などが密集している。

旧石器時代の遺跡は、千葉東南部地区内で調査が実施されたほとんどの遺跡から検出されている。規模が比較的大きなものとしては赤塚支谷の有吉城跡、大金沢支谷の太田法師遺跡、椎名支谷の椎名崎古墳群B支群、小金沢支谷の神明社裏遺跡などがあげられる。神明社裏遺跡からは、石器集中地点が36か所検出され、ナイフ形石器・搔器・石核・尖頭器・剥片などが多量に出土している。また、小金沢支谷の最奥部に位置する六通神社南遺跡では、縄文時代草創期の槍先形石器群が検出されている。

縄文時代には、中期から晩期の大型貝塚の他にも各時期にわたって各種の遺構や遺物が数多く検出されている。早期条痕文期には、炉穴が多数の遺跡から検出されている。22遺跡から総計382基が検出され、有吉遺跡の30基、有吉城跡の27基、小金沢古墳群の79基、御塚台遺跡の57基などがまとめて検出されている。前期には、赤塚支谷の最奥部の南二重堀遺跡、鎌取遺跡、有吉城跡で竅穴住居跡が若干検出されている。中期には、ほとんどの遺跡に遺物の散布がみられ、特に赤塚支谷に上赤塚貝塚、鎌取場台貝塚、有吉北貝塚、有吉南貝塚など大規模な貝塚が集中してみられ、多数の竅穴住居跡や土坑群を伴う大集落が形成されている。後期には、泉谷支谷の木戸作貝塚、小金沢支谷の小金沢貝塚、大金沢支谷の六通貝塚等、引き続き大規模貝塚が形成されている。晩期には、遺跡数が激減するものの、六通貝塚などで良好な遺物包含層等が検出されているほか、高沢遺跡などでも晩期終末の荒海式土器がまとめて出土している。

弥生時代は本事業地内の遺跡が極端に少なくなり、村田川北岸の草刈遺跡の大規模な中・後期の弥生集落に比してあまりにも貧弱な様相を示している。事業地北西端の赤塚支谷に面する有吉遺跡で須和田期の

堅穴住居跡が1棟、中央の泉谷支谷に面する椎名神社遺跡で宮ノ台期の堅穴住居跡1棟、南東端の大金沢支谷最奥部に位置するバクチ穴遺跡で後期の堅穴住居跡が1棟検出されているにすぎず、遺構はもちろんのこと遺物に関しても極めて少なく、台地上での活動はひとり弥生時代のみが低迷する。

古墳時代に入ると弥生時代の様相を払拭して新たな集落跡が展開する。前期から中期の遺跡は、事業地北西側に集中していることが特徴的である。なかでも、赤塚支谷に南二重堀遺跡47棟、城ノ台遺跡21棟、鎌取場台遺跡8棟、鎌取遺跡27棟、泉谷津支谷の馬ノ口遺跡19棟、伯父名台遺跡5棟など約130棟の堅穴住居跡が検出されている。後期になると赤塚支谷の有吉遺跡130棟、高沢遺跡207棟、有吉城遺跡38棟、有吉北貝塚97棟、城ノ台遺跡99棟の堅穴住居跡が検出されるなど大規模遺跡が展開するようになる。当事業地内で検出された堅穴住居跡数約670棟の約85%をこの地域が占めている。泉谷・椎名支谷では椎名崎遺跡46棟、木戸作遺跡27棟、伯父名台遺跡42棟の堅穴住居跡が検出されている。また、小金沢支谷では、御塚台遺跡31棟の堅穴住居跡が検出されるなど、集落の大規模化とそれに付随した小規模集落の展開も見逃すことができない。古墳は、事業地内において約290基が検出されている。前・中期の古墳では、泉谷支谷の馬ノ口遺跡で方墳3基と椎名支谷の椎名崎古墳群C支群で円墳1基などが検出されている。後期になると赤塚支谷の右岸に上赤塚古墳群及び有吉遺跡の円墳18基、生浜古墳群円墳12基などが、有吉遺跡と高沢遺跡の大集落と重複せずに明らかな墓域として大規模古墳群が営まれる。椎名支谷と刈田子支谷の最奥部には、椎名崎古墳群A支群の前方後円墳2基、円墳9基、椎名崎古墳群B支群前方後円墳1基、円墳2基、椎名崎古墳群C支群の円墳26基など当事業地内では最も大規模な古墳群が造営されるようになる。

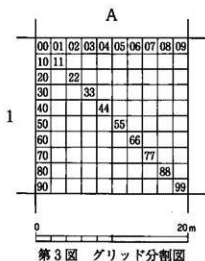
奈良時代の集落遺跡としては、有吉遺跡の39棟、有吉北貝塚の4棟、椎名崎遺跡の18棟、ムコアラク遺跡の19棟などがあるが、古墳時代後期の様相に比べ集落はやや小規模化する。また平安時代においても有吉遺跡の98棟、有吉南遺跡4棟、有吉北貝塚11棟、椎名崎遺跡32棟、椎名崎古墳群C支群の23棟、ムコアラク遺跡の16棟などの堅穴住居跡が検出されている。

第3節 調査の方法

調査区の設定 公共座標に合わせて調査対象範囲全域を覆う20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点をおき、西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3…の名称をつけた。それをさらに第3図に示したように2m×2mの小グリッドに100等分し、北西隅を起点に00～99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせて例えばA1-00のような呼称とした。

上層確認調査 縄文時代以降の上層の確認調査は、調査区全域に全対象面積の10%にあたる面積のトレンチないしはグリッドを設定して、重機による表土除去を行ったのち、人力で遺構・遺物の分布を確認した。

下層確認調査 旧石器時代の下層（ローム層）の確認調査は、調査区全域に2m×2mのグリッドを全対象面積の4%設定し、立川ローム最下部まで人力で掘削を行って、石器等の遺物の有無を確認した。



上層本調査 本調査の開始にあたっては遺構・遺物に影響を及ぼさない程度に表土を重機によって掘削した。検出された竪穴住居跡については4分割する土層観察用のベルトを設定して調査を行った。遺物の取上げは、必要に応じて個別に番号を付し、地点とレベルを記録した。土坑等についても基本的には同様の調査方法である。遺構外出土遺物については、出土地点とレベルを記録した後番号を付して取り上げた。

下層本調査 確認調査の結果に基づき石器が出土した地点の周囲を出土遺物に影響を及ぼさない範囲で重機によって掘削したのち、人力で掘削し、出土遺物の地点とレベル、遺物出土層位などを記録した。

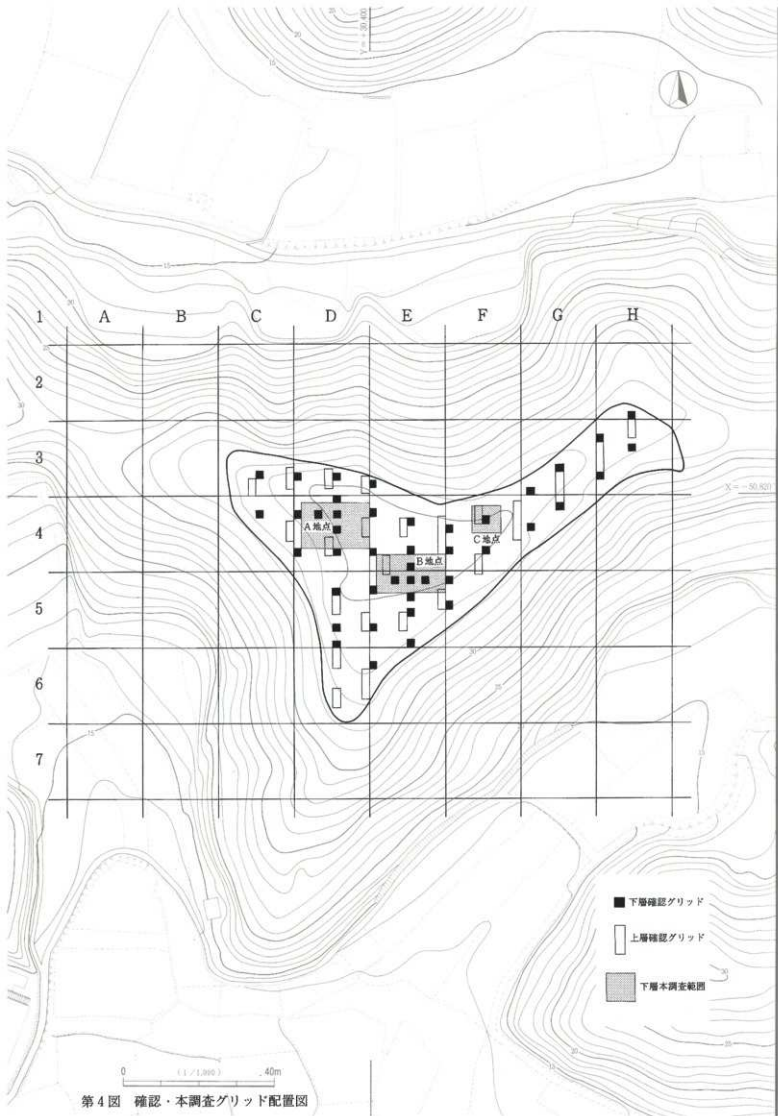
遺構番号 遺構の内容にかかわらず通し番号を使用している。調査時の遺構番号のまま報告する。

第4節 検出された遺構・遺物の概要(第4～6図)

旧石器時代では3か所で遺物が検出された。A地点ではⅡ層下部から産層上部にかけて細石刃石器のブロックが検出された。東南部事業地内で細石刃石器群のブロックが検出された例は少なく、僅かに椎名崎古墳群B支群で確認されたにとどまり、正式な報告としては本遺跡例がはじめてであろう。B地点では産層下部からⅣ層にかけて焼け礫を主体とするブロックが検出されている。縄文時代の遺構は少なく、陥穴が2基検出されたにとどまる。包含層から縄文土器や石器、土製品などが少量出土している。弥生時代の遺構は検出されなかったが、後期の土器片が1点出土している。古墳時代以降では、6世紀代の円墳が1基検出された。また、6世紀後半から8世紀末までの竪穴住居跡14棟が検出された。このほか小竪穴3基、有天井土壇2基、土坑3基、道路跡と考えられる溝が8条検出されている。

参考文献

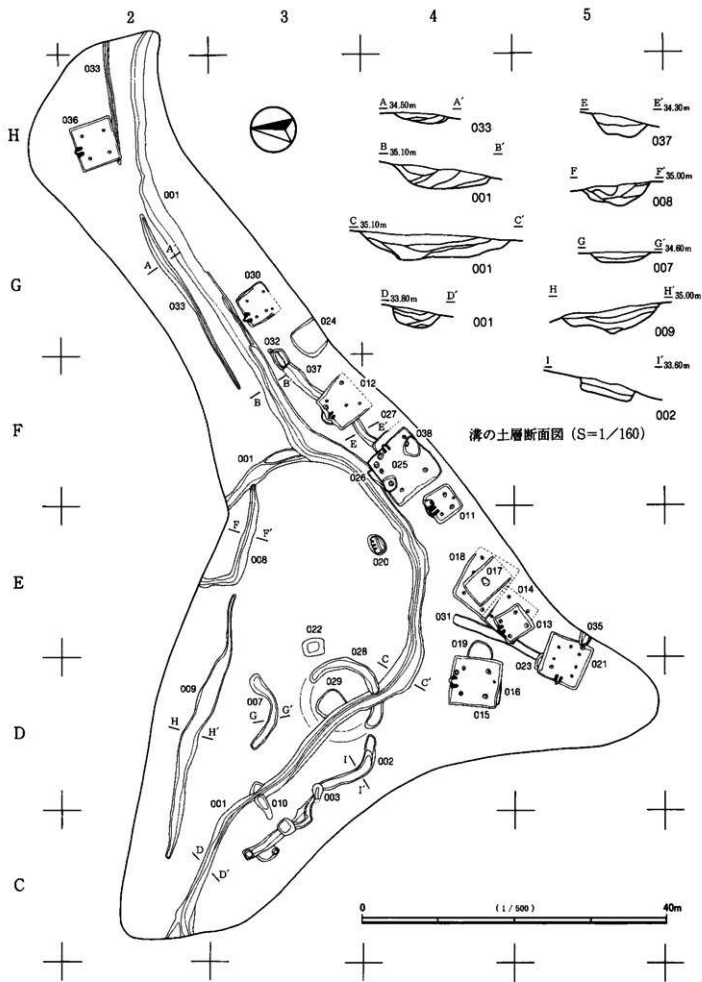
- (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン1 -椎名崎古墳群(第1次)-』1975
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン2 -木戸作遺跡(第1次)-』1975
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン3 -有吉遺跡(第1次)-』1975
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン4 -浜浜古墳群-』1977
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン5 -有吉遺跡(第2次)-』1978
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン6 -椎名崎遺跡-』1979
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン7 -木戸作遺跡(第2次)-』1979
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン8 -ムコアラク遺跡・小金沢古墳群-』1979
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン9 -六通遺跡・御塚台遺跡-』1980
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン10 -小金沢貝塚-』1982
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン11 -六通金山遺跡-』1981
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン12 -南二重塚遺跡-』1983
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン13 -上赤塚1号墳・狐塚古墳群-』1982
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン14 -バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡-』1983
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン15 -馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡-』1984
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン16 -大藤野北遺跡-』1985
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン17 -高沢遺跡-』1990 (財)
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン18 -鎌取遺跡-』1993
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン19 -千葉市有吉北貝塚1-』1998
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン20 -千葉市有吉北貝塚2-』1998
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン21 -千葉市有吉遺跡(第4次)・高沢古墳群-』1999
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン22 -鎌取場台遺跡-』1999
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン23 -千葉市太田法師遺跡2-』2001
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン24 -千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群-』2002
 (財)千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン25 -千葉市有吉城I-』2002
 (財)千葉県文化財センター『千葉市浜野川遺跡群』1988
 『角川日本地名大辞典12 千葉県』1984
 『土地分類基本調査 千葉』1979 千葉県



第4図 確認・本調査グリッド配置図



第5圖 遺構配置圖(1)



第6図 遺構配置図(2)

第2章 旧石器時代

第1節 基本層序

本遺跡における立川ローム層の堆積状況は、下総台地で広く観察される基本層序と共通する。千葉市から市原市にかけての東京湾岸地域では不明瞭なことが多い第2黒色帯下部中の間層（IX b層）が狭い台地ながら確認されており、当地域の中では、比較的良好な堆積状況といえる。発掘調査によって台地中央で細石刃石器群のブロックが検出されたが、痩せ尾根で土地利用しにくい地形だったことも幸いしたが、古墳時代以降の堅穴住居跡群が台地南東斜面に偏っていたため細石刃石器群のブロックを攪乱しなかった事や、台地中央に円墳があって、後世の人々にとって土地の改変がしにくい状況であった事などの条件が重なったことによるのであろう。以下、表土から立川ローム層の基本層序について記す。

I層：表土である。厚さは10cm～20cmである。

II層：遺物を包含する暗茶褐色の層。厚さは10cm～20cmで台地中央部のみで確認され、部分的にはI層と混在している地点があった。

III層：黄褐色の軟質ローム層で、厚さは30cm～40cmである。地点によって厚さが大きく異なり、本遺跡では斜面が急なため、ほぼ台地中央部に限られた。

IV層：赤みを帯びた黄褐色の硬質ローム層である。武蔵野台地のIV層上部に相当する層は、軟質化してIII層に取り込まれており、本層は武蔵野台地IV層下部に対応すると考えられる。赤色スコリアを含み、厚さは10cm前後である。

V層：にぶい黄褐色の硬質ローム層で、下総台地における立川ローム層第1黒色帯に相当する。厚さは10cm～20cmである。

VI層：明黄褐色の硬質ローム層で、黒色粒と火山ガラスによって構成されるA T（始良丹沢火山灰）ブロックがままとまっている。厚さは10cm～15cmである。

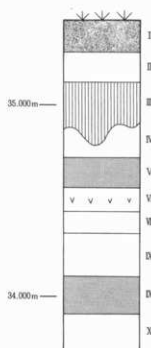
VII層：黄褐色の硬質ローム層で、第2黒色帯上半部に相当する。A Tが細かく拡散しており、あまり暗い色調ではない。厚さは10cm～20cmである。

IX a層：赤みを帯びた褐色硬質ローム層で、第2黒色帯下半部の上層である。厚さは10cm～20cmである。

IX b層：赤みがかった黄褐色の硬質ローム層で、第2黒色帯下半部中の間層である。安定した土層ではなく、近隣の遺跡でも分層しにくい場合が多く、春日作遺跡では分層できなかった。

IX c層：暗褐色の硬質ローム層で、第2黒色帯下半部の下層にあたる。立川ローム層の中では最も暗く、薄墨を流したようにみえる。赤色・暗緑色のスコリアがIX a層よりも多く、大型のものが顕著である。厚さは20cm～30cmである。

X層：黄褐色の硬質ローム層で、IX層に比べて軟質になる。スコリアは激減するが、部分的に赤橙色で小型のスコリアを含む。厚さは20cm～30cmである。



第7図 基本土層図

第2節 A地点

1 概要(第8図)

A地点では、暗茶褐色土層下部(Ⅱ層下部)からソフトローム層上部(Ⅲ層上部)にかけての層準で、細石刃石器群のブロックが1か所検出された。ブロックの位置は、調査区西部のD3-24~26・33~36グリッドを中心とする東西11m、南北13mの範囲で、立地は、東西方向に走るやせ尾根頂部の狭い平坦面にある。なお、当該範囲には縄文時代の遺物も分布しており、これを層位的に分離することは困難である。

石器組成は、細石刃35点、削器1点、二次加工剥片5点、楔形石器1点、剥片86点、碎片18点、石核5点、敲石1点、礫18点の合計170点である。石器石材は、黒曜石38点、安山岩10点、流紋岩1点、頁岩4点、珪質頁岩84点、チャート7点、凝灰岩3点、砂岩1点、瑪瑙4点、礫石材は、流紋岩2点、頁岩2点、チャート11点、砂岩3点である。

本石器群は、細石刃核は出土していないものの、石器組成と石材構成、細石刃の形態から判断して、野岳一休場型細石刃核を指標とする西南型の細石刃石器群と考えられる。細石刃は、奥南嶺間産と考えられる珪質頁岩(86%)と信州産と考えられる黒曜石(14%)で構成され、比較的大型であることから、細石刃石器群の後半期に帰属する可能性がある。ブロックの構成内容は、細石刃と一般的な剥片生産を小規模に行っていた形跡がある。

2 母岩別資料(第9図)

A地点出土の石器については、黒曜石8母岩、安山岩5母岩、流紋岩1母岩、頁岩1母岩、珪質頁岩18母岩、チャート6母岩、凝灰岩3母岩、砂岩1母岩、瑪瑙3母岩に分類した。以下、略述する。

黒曜石 黒曜石1~4・6は、淡黒色半透明で $\phi 1\text{mm}$ ほどの夾雑物を少量含む良質な黒曜石である。色調や縞の入り方、夾雑物の多少などによって細分したが、総じて信州産が多いと考えられる。肉眼観察ではあるが、麦草峠産と和田峠周辺産の両グループを含むようである。細石刃と小型の剥片数点で構成される母岩が多く、小規模な細石刃生産を行ったと考えられる。

黒曜石5は、長さ3cmほどの不定型の剥片3点で構成され、そのうち2点が表裏で接合する。表面は角礫面が広く残っており、原石は小型のようである。ブロック内で原石を分割したと考えられる。

黒曜石7・8は、それぞれ小型の剥片各1点の単独母岩である。前者は信州産と考えられるが、後者は黒色不透明で白色の夾雑物を含むもので、産地はわからない。搬入品であろう。

安山岩 5母岩とも褐色に風化した比較的確質緻密な石質で、色調、質感ともに房総半島における旧石器時代石器群に通有の安山岩である。安山岩1は、大型の剥片を素材とする削器1点の単独資料である。自然面は広く残るが、原石の大きさは推定できない。安山岩2~5は、大きくても拳程度までの、比較的小振りの円礫を用いたと考えられる。いずれも大・中型厚手の剥片として持ち込まれており、安山岩2は石核に利用され、安山岩4・5は剥片のまま廃棄されている。安山岩3は、小型の剥片4点で構成され、小規模な剥片生産が行われたと考えられるが、石核は残されていない。

流紋岩 流紋岩1は、灰白色に風化した軟質な石質である。石器は、扁平な円礫を素材とする敲石1点である。

頁岩 頁岩1は、自然面を広く残す中型の剥片4点で構成される。相互に接合することから、ブロック内で剥片剥離作業初期の工程を行ったと考えられる。緑がかった黄灰色で、比較的確質緻密な良質の頁岩

である。

珪質頁岩 18母岩(1・14・16・17・18・20)のうち、珪質頁岩18以外は自然面と節理面が橙褐色から黄褐色、内部が淡灰緑色から暗灰緑色の地に暗紫色の斑の入るもので、県南嶺間産と考えられる。色調の違いや珪化度合いを含めた質感の違いによって細分した。

珪質頁岩1～6は、細石刃を含む母岩である。いずれも淡灰色の明るい色調で、珪化度が高く、チャートに近い石質である。珪質頁岩6は細石刃1点の単独母岩であるが、それ以外は細石刃が3～8点含まれており、各母岩とも小規模ではあるがブロック内で細石刃の生産を行っていたと考えられる。なお、珪質頁岩1・4は細石刃以外に剥片類も含まれているが、これはブロック外(おそらく遺跡外)で細石刃核の素材を製作した際に生じた剥片類(搬入品)と、ブロック内で細石刃生産に伴って石核調整を行った際に生じた剥片類の両者が含まれている可能性がある。

珪質頁岩7・8は、剥片類がまとまっている母岩である。それぞれ接合資料をもつこと、小型の剥片、破片を含むことから、ブロック内で剥片生産を行った母岩と考えられる。両母岩とも自然面を広く残す剥片が見られないことから、剥片剥離作業の前半までの工程はブロック外で行い、使用中の石核を本ブロックに持ち込んで、後半の作業を行ったようである。なお、珪質頁岩7は石核を伴っており、本ブロックで母岩の消費が終了しているが、珪質頁岩8は石核が見られないことから、作業が継続された可能性がある。珪質頁岩9・10・12・16は、自然面(概ね円礫面)を広く残す大型の剥片を中心に構成される母岩であるが、いずれも資料数は少ない。珪質頁岩9・10は、接合資料を含むことからブロック内に原石を持ち込み、分割作業を行った可能性があるが、珪質頁岩12・16は単独母岩に近い状況にあり、搬入品と考えられる。なお、珪質頁岩10に細石刃1点が含まれるが、関連資料がないため、その由来は不明である。

珪質頁岩11は、細石刃と剥片類、石核で構成される。資料は少量であるが、細石刃及び小型の剥片を生産した可能性がある。

珪質頁岩13は、小型の剥片類4点で構成される。剥片剥離作業が行われた可能性が高いが、詳細は不明である。珪質頁岩14は石核と破片1点、珪質頁岩17・20は剥片1点ずつである。いずれも搬入品であろう。珪質頁岩18は破片2点で、詳細は不明である。

チャート 青灰色を中心とするもので、各母岩とも、原石は房総半島内で採取可能な小円礫と推定され、両極打撃の痕跡をもつ資料が含まれる。なお、本石材については縄文時代の石器群が混在しているかも知れない。

凝灰岩 黄褐色から黄灰色で比較的硬質緻密な凝灰岩である。各母岩とも単独資料である。

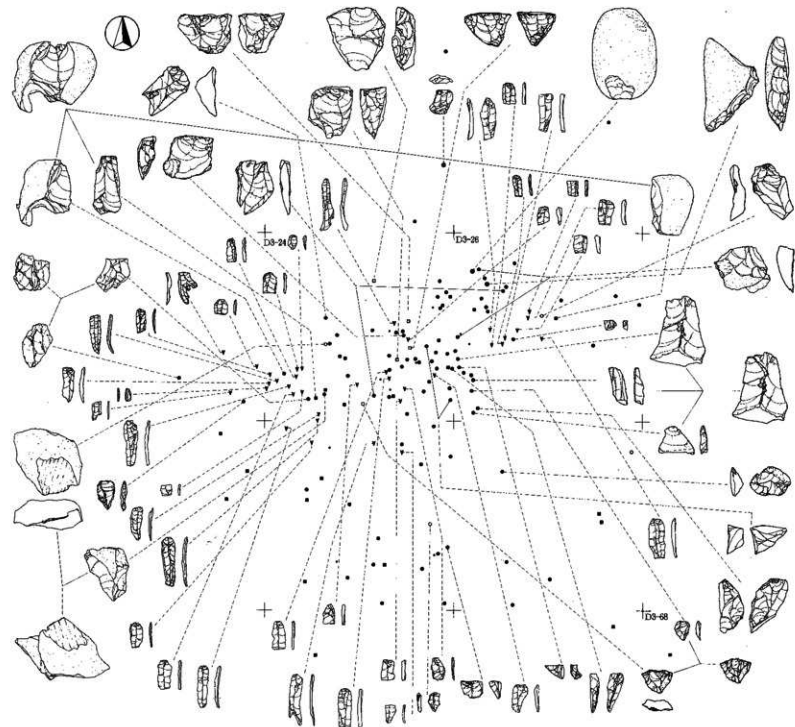
砂岩 房総半島で一般的に見られる砂岩の小片である。

瑪瑙 3母岩ともに、淡黄褐色半透明のもので、それぞれ小型の剥片、破片の単独資料である。

3 出土遺物(第10～14図)

細石刃(第10図1～35)

細石刃は全部で35点出土した。石材は、黒曜石5点、珪質頁岩30点で、黒曜石は信州産、珪質頁岩は房総半島南部の嶺間産の可能性が高いものである。細石刃の帰属する母岩は、黒曜石1が5点(24・25・29～31)、珪質頁岩1が5点(2・6・13・14・33)、珪質頁岩2が8点(1・3・7・9・11・15・34・35)、珪質頁岩3が7点(5・8・10・12・16・19・23)、珪質頁岩4が3点(17・18・27)、珪質頁岩5が4点

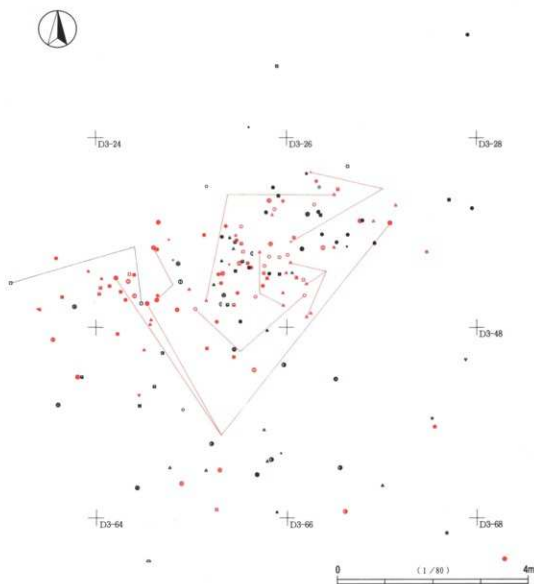


- 燧石刀
- 刮器
- 二次加工残片
- 楔形石器
- 剥片
- 钟片
- 石核
- 敲石
- 鏃

0 (1/30) 4m

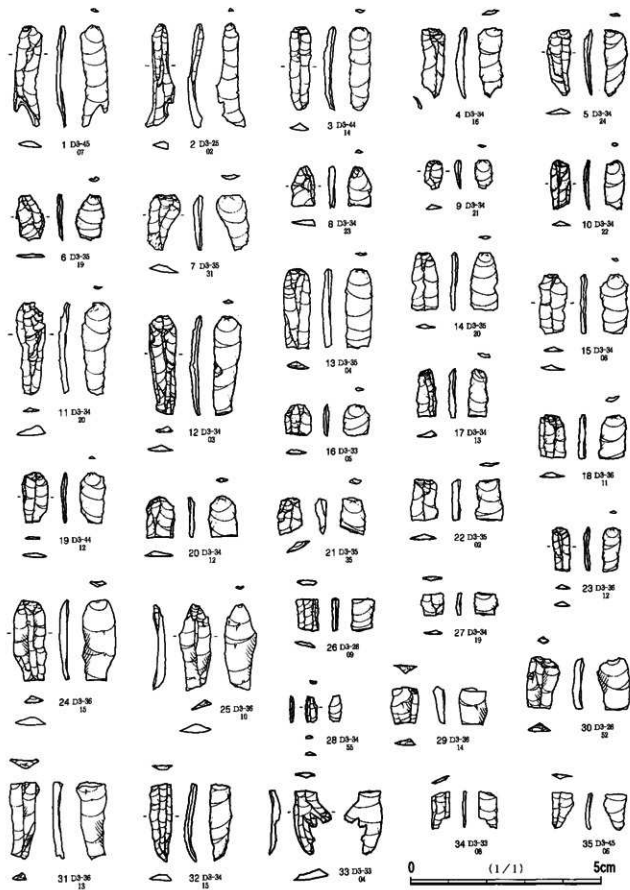


第8图 A地点遺物分布图

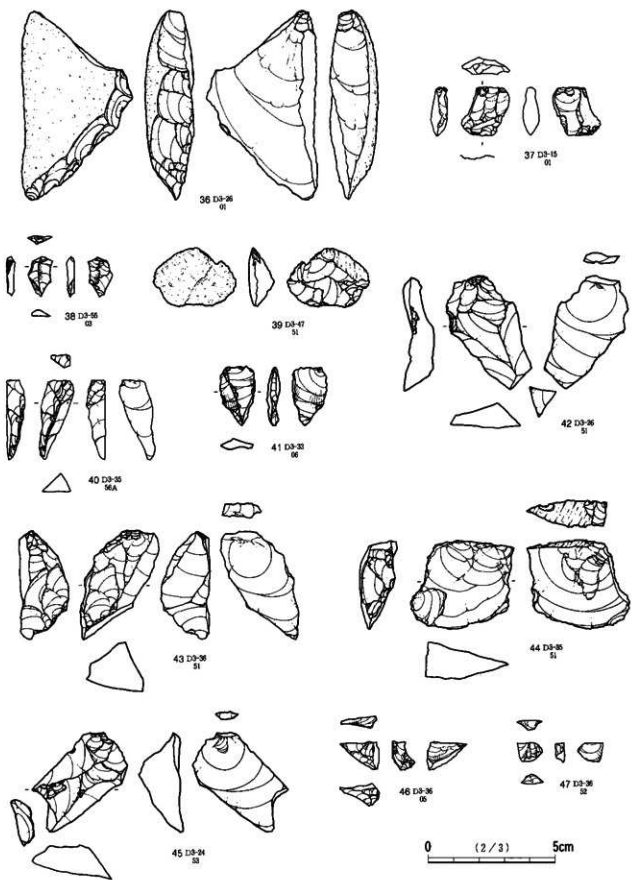


- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|
| ● 地質頁岩 1 | ● 地質頁岩 12 | ● 砂 岩 2 | ● 黒曜石 5 | ○ チャート 20 | ● 流紋岩 3 |
| ● 地質頁岩 2 | ● 地質頁岩 13 | ● 砂 岩 3 | ● 黒曜石 6 | ● チャート 21 | ○ 安山岩 1 |
| ● 地質頁岩 3 | ● 地質頁岩 14 | ● 砂 岩 4 | ● 黒曜石 7 | ○ チャート 22 | ○ 安山岩 2 |
| ○ 地質頁岩 4 | ● 砂 岩 5 | ● 凝 灰 岩 2 | ● 黒曜石 8 | ● チャート 24 | ● 安山岩 3 |
| ● 地質頁岩 5 | ● 地質頁岩 16 | ● 凝 灰 岩 3 | ● チャート 3 | ● チャート 7 | ● 安山岩 4 |
| ● 地質頁岩 6 | ● 地質頁岩 17 | ● 凝 灰 岩 4 | ● チャート 7 | ● チャート 27 | ● 安山岩 5 |
| ○ 地質頁岩 7 | ● 地質頁岩 18 | ● 黒曜石 1 | ● チャート 11 | ○ 馬 瑞 1 | |
| ● 地質頁岩 8 | ● 地質頁岩 20 | ● 黒曜石 2 | ● 黒曜石 14 | ● 馬 瑞 2 | |
| ● 地質頁岩 9 | ● 地質頁岩 1 | ● 黒曜石 3 | ● 黒曜石 18 | ● 馬 瑞 3 | |
| ● 地質頁岩 10 | ● 地質頁岩 6 | ● 黒曜石 4 | ● 黒曜石 19 | ● 流紋岩 1 | |
| ○ 地質頁岩 11 | ● 地質頁岩 7 | | | ● 流紋岩 2 | |

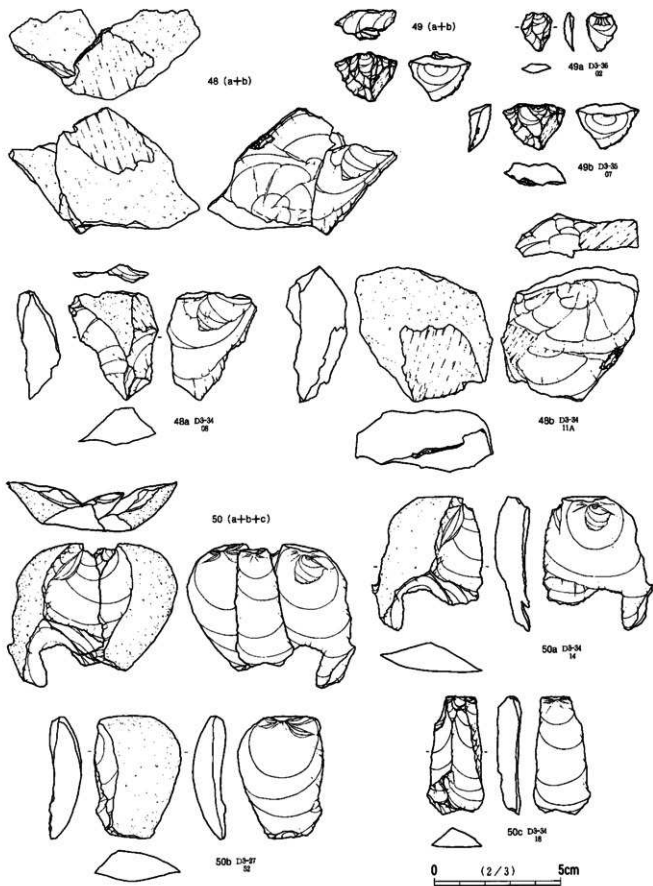
第9図 A地点母岩別分布図



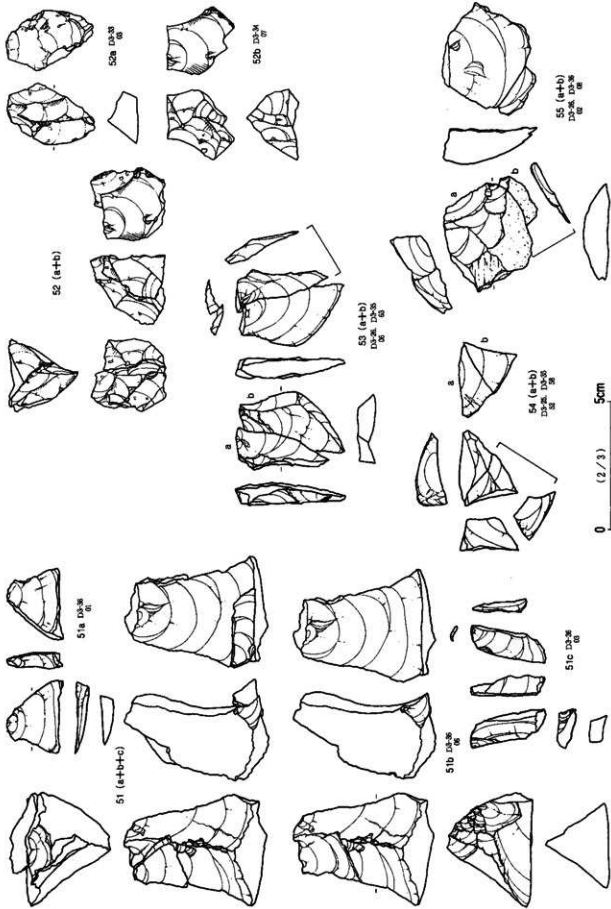
第10图 A地点出土遺物(1)



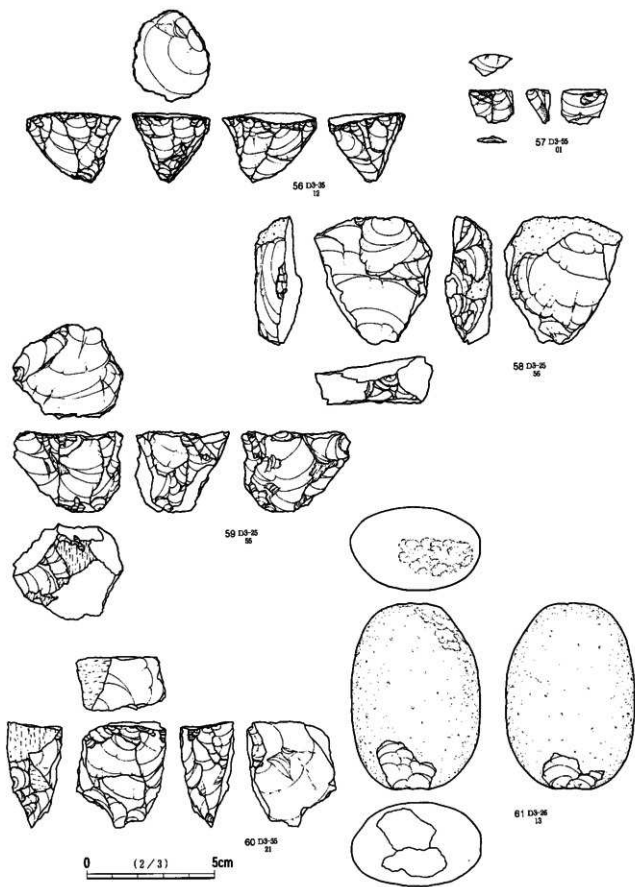
第11图 A地点出土遺物(2)



第12图 A地点出土遺物(3)



第13圖 A地点出土遺物(4)



第14图 A地点出土遗物(5)

(4・21・22・28)、珪質頁岩6・10・11が各1点(32・26・20)で、1母岩に数点ずつの細石刃を含むものが6母岩ある。

細石刃の遺存部位は、完形品8点(1～3・5・7～10)、頭部および上半部16点(4・6・11～16・18～25)、中間部7点(17・26～31)、末端部4点(32～35)である。

細石刃の大きさについて、最大幅を2mmごとに集計すると、50%強の資料が6.1mm～8.0mmの範囲に入る。最大幅6.1mm～8.0mmが最頻値となるのは、四街道市大割遺跡などとともに、本県において黒曜石を主体とはしない野岳一休場型細石刃核から剥離された細石刃としては大型の部類である。なお、千葉市北河原坂第2遺跡、佐倉市星谷津遺跡、大林遺跡、印西市石頭第2遺跡、白井市復山谷遺跡などは、最頻値が4.1mm～6.0mmとなるが、この値が標準的な大きさである。

削器(第11図36)

36は、安山岩による大型厚手の不定型な剥片を用いた削器である。表面右側縁に裏面から急角度で粗い調整加工を行っている。なお、素材剥片は剥離時に打点で二つに割れている。

楔形石器(第11図37)

37は、青灰色のチャートによる楔形石器である。上端には節理面が小さく残り、下端は細かく潰れている。実測図右面の左右に残る自然面の状況から見て、素材剥片は小円礫から剥離された可能性が高い。

二次加工剥片(第11図38・39・42)

38は、無色透明の地に青みがかった黒色の帯が入る黒曜石を用いた二次加工剥片である。小型不定型の剥片を素材とし、表面左側縁の一部に裏面から細かな調整加工を行っている。裏面(素材の主要剥離面)は平滑で打痕が発達せず、打面もはじけていることから両極打撃によって剥離した素材かも知れない。39は、青灰色のチャートによる二次加工剥片である。裏面下部部に細かな調整加工が連続する。表面は自然面に覆われており、素材は直径3cm～5cm程度の円礫から得られたことがわかる。素材の主要剥離面はスムーズな剥離面ではなく、折れ面のようなものである。42は、暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩による二次加工剥片である。縦長剥片の左側縁に細かな剥離面が見られる。

剥片(第11図40・41・43～47、第14図57)

40・43は、暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いた縦長剥片である。44は淡灰色の嶺岡産珪質頁岩による不定型の剥片で、2をはじめとする細石刃5点と同一母岩である。45は、淡褐色の頁岩を用いた不定型の剥片である。41・46・47・57は黒曜石の剥片である。47は、細石刃核の作業面が折れたもの、48は細石刃の中間部の可能性がある。

石核(第14図56・58～60)

56は、灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いた石核である。粗く分割した礫片を素材としており、分割面を側面の一部に残す。大きな1枚の剥離面(ネガティブな面)で打面を作り、周囲を廻るように小型の縦長剥片を剥離しており、最終的には漏斗形になっている。打面上に細かな調整は見られないが、作業面上端には頭部調整が顕著である。作業面に残る縦長の剥離痕は、本地域における細石刃一般に比べて大型不整形であるが、細石刃と考えるべきかも知れない。58は、黒灰色の安山岩を用いた石核である。不定型厚手の剥片を素材とし、素材の主要剥離面(実測図左側)とその右側縁で小型不定型の剥片を剥離している。側縁の剥離痕は細かく連続しており、搔器の刃部のように見える。59は、暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いた石核である。上端にある平坦面を打面として、周囲を廻るように不整形の縦長剥片を剥離している。60

第1表 A地点出土石器属性表

押号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剝離角	背面構成	先端 形状	調整角	使用痕 被焼成	刃形	欠損	
	D3-06-62	剥片	凝灰岩	4	12.17	11.69	2.43	0.34	-	-	Ⅲ	-	-	-	M	
	D3-07-01	剥片	黒曜石	1	10.24	9.30	1.24	0.10	2	68	I	H	-	-	-	
37	D3-15-01	楕形石器	チャート	14	19.20	18.79	6.94	2.25	-	-	-	-	-	-	-	
	D3-15-52	剥片	黒曜石	6	9.98	19.61	6.87	0.84	1	106	Ⅲ	H	-	-	-	
45	D3-24-53	剥片	頁岩	1	39.32	38.06	15.38	12.53	1	118	I+Ⅱ+Ⅲ	H	-	-	-	
2	D3-25-02	礫石刀	珪質頁岩	1	27.54	7.60	3.77	0.34	1	70	I	O	-	-	-	
	D3-25-03	礫片	黒曜石	1	6.77	7.29	1.55	0.05	2	114	I+Ⅱ	H	-	-	-	
	D3-25-04	剥片	珪質頁岩	7	12.49	14.94	5.08	0.82	-	-	I	H	-	-	B	
	D3-25-05	剥片	珪質頁岩	13	16.09	10.62	8.70	0.52	1	118	I+Ⅱ	S	-	-	-	
	D3-25-06	剥片	黒曜石	2	13.88	12.02	4.89	0.49	2	92	I+Ⅱ	H	-	-	-	
	D3-25-51	剥片	珪質頁岩	9	52.10	50.43	24.67	55.06	C	116	I+V	S	-	-	-	
54a	D3-25-52	剥片	珪質頁岩	8	12.59	27.76	11.80	2.74	-	-	I+Ⅴ	F	-	-	M	
	D3-25-53	剥片	黒曜石	1	12.04	17.23	2.83	0.41	-	-	Ⅲ	S	-	-	B	
59	D3-25-85	石核	珪質頁岩	7	31.62	42.30	39.10	46.78	-	62~70	-	-	-	-	-	
58	D3-25-86	石核	安山岩	2	50.06	46.30	17.66	43.99	-	68~86	-	-	-	-	-	
36	D3-26-01	剥片	安山岩	1	74.06	44.97	18.80	59.20	C	-	I+V	-	58~70	-	R	
55a	D3-26-02	剥片	珪質頁岩	16	34.01	42.35	13.46	18.10	-	-	Ⅲ+V	-	-	-	M	
	D3-26-03	剥片	珪質頁岩	9	49.69	39.65	17.21	30.79	1	130	I+Ⅴ	S	-	-	-	
	D3-26-04	剥片	黒曜石	5	28.21	22.84	11.91	6.10	1	118	I+Ⅱ	S	-	-	-	
	D3-26-05	剥片	珪質頁岩	17	41.45	17.63	11.52	5.21	3	124	I+Ⅲ	F	-	-	-	
53a	D3-26-06	剥片	珪質頁岩	8	36.75	17.75	6.93	3.20	1	98	I+Ⅲ	F	-	N	L	
	D3-26-07	剥片	黒曜石	2	15.88	13.66	5.00	0.70	2	104	I	S	-	-	-	
	D3-26-08	剥片	安山岩	4	38.74	38.55	9.27	11.73	1	116	I+V	H	-	-	L	
26	D3-26-09	礫石刀	珪質頁岩	10	8.31	5.88	1.24	0.07	-	-	I	I	-	-	M	
	D3-26-12	剥片	黒曜石	1	14.52	16.36	2.74	0.49	1	116	I+Ⅲ	S	-	-	-	
61	D3-26-13	礫石	虎紋岩	1	73.13	50.42	32.34	155.92	-	-	-	-	-	-	-	
	D3-26-51	二次加工剥片	黒曜石	9	45.42	32.10	11.37	11.41	1	122	I+Ⅱ+Ⅲ	O	56~68	-	-	
30	D3-26-52	礫石刀	黒曜石	1	13.52	8.20	3.16	0.25	-	82	-	-	-	-	-	
	D3-26-53	剥片	珪質頁岩	7	18.82	16.79	4.72	1.07	4	92	Ⅲ	S	-	-	M	
	D3-27-02	剥片	黒曜石	2	15.35	9.19	3.67	0.36	-	-	Ⅲ	S	-	-	M	
	D3-27-03	剥片	黒曜石	1	16.22	11.97	4.02	0.47	1	94	I+Ⅴ	S	-	-	-	
	D3-27-51	剥片	珪質頁岩	8	42.24	36.29	13.21	18.50	3(1)	88	I+Ⅲ+Ⅳ	F	-	-	-	
50b	D3-27-52	剥片	頁岩	1	48.00	33.47	12.44	19.81	1	130	Ⅲ+V	H	-	-	-	
52a	D3-33-03	剥片	黒曜石	5	35.22	23.51	12.90	7.07	-	-	I+Ⅱ+Ⅲ	O	-	-	-	
33	D3-33-04	礫石刀	珪質頁岩	1	16.74	9.93	2.85	0.20	-	-	I+Ⅲ	H	-	-	B	
16	D3-33-05	礫石刀	珪質頁岩	3	7.88	7.19	1.16	0.06	1	92	I	H	-	-	H	
41	D3-33-06	剥片	黒曜石	7	20.94	20.11	4.62	1.05	L	-	I+Ⅱ	S	-	N	-	
34	D3-33-08	礫石刀	珪質頁岩	2	9.72	4.79	0.80	0.04	-	-	I	F	-	-	B	
	D3-34-02	剥片	珪質頁岩	10	43.20	37.33	13.91	15.74	C	90	Ⅲ+V	S	-	-	-	
12	D3-34-03	礫石刀	珪質頁岩	3	25.60	6.91	2.93	0.33	1	92	I	-	-	-	H	
15	D3-34-06	礫石刀	珪質頁岩	2	15.31	7.42	1.66	0.17	1	96	I	-	-	-	H	
52b	D3-34-07	剥片	黒曜石	5	26.49	28.28	17.47	7.66	P	-	Ⅲ+V	H	-	-	-	
48a	D3-34-08	剥片	珪質頁岩	10	42.14	35.70	14.26	14.46	2	126	Ⅱ+Ⅲ+Ⅴ	H	-	-	-	
	D3-34-09	剥片	チャート	22	7.74	12.09	4.25	0.25	P	-	I+Ⅲ	H	-	-	-	
	D3-34-10	剥片	安山岩	2	13.62	23.82	4.77	1.31	-	6(3)	104	Ⅲ	S	-	-	-
48b	D3-34-11A	二次加工剥片	珪質頁岩	10	48.44	57.71	24.14	55.93	2	116	Ⅳ+Ⅴ	-	76~82	-	-	
	D3-34-11B	剥片	黒曜石	1	17.37	28.54	5.91	1.69	1	116	I+Ⅲ+Ⅴ	H	-	-	-	
20	D3-34-12	礫石刀	珪質頁岩	11	10.88	7.41	1.43	0.12	2	98	I	-	-	-	H	
17	D3-34-13	礫石刀	珪質頁岩	4	12.20	5.08	1.87	0.11	-	-	I	-	-	-	M	
50a	D3-34-14	剥片	頁岩	1	53.97	44.17	13.99	20.12	1	128	I+Ⅲ+Ⅴ	H	-	-	-	
	D3-34-15	礫石刀	珪質頁岩	6	20.19	5.84	3.26	0.21	-	-	I	F	-	-	B	
4	D3-34-16	礫石刀	珪質頁岩	5	17.76	5.98	2.60	0.18	1	86	I	-	-	-	H	
50c	D3-34-18	剥片	頁岩	1	46.01	21.26	9.05	7.88	1	128	I+Ⅲ	H	-	-	-	
27	D3-34-19	礫石刀	珪質頁岩	4	5.44	6.06	1.27	0.03	-	-	I	-	-	-	H	
11	D3-34-20	礫石刀	珪質頁岩	2	23.83	7.49	2.42	0.28	1	92	I	-	-	-	M	
9	D3-34-21	礫石刀	珪質頁岩	2	7.30	4.62	1.47	0.04	1	88	I	F	-	-	-	
10	D3-34-22	礫石刀	珪質頁岩	3	12.63	5.22	1.39	0.07	1	94	I+Ⅲ	F	-	-	-	
9	D3-34-23	礫石刀	珪質頁岩	3	10.38	6.09	1.84	0.09	1	106	I+Ⅲ	H	-	-	-	
8	D3-34-24	礫石刀	珪質頁岩	3	17.56	6.30	2.17	0.14	1	82	I+Ⅱ	F	-	-	-	
	D3-34-25	剥片	珪質頁岩	9	23.91	23.14	7.50	2.97	L	-	Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ	S	-	-	-	
	D3-34-26	剥片	珪岩	2	7.36	11.46	2.94	0.19	-	-	I	F	-	-	B	
	D3-34-51	礫片	珪質頁岩	14	5.30	9.41	3.82	0.14	-	-	Ⅲ	H	-	-	-	
28	D3-34-55	礫石刀	珪質頁岩	5	6.44	3.07	0.91	0.02	-	-	I	-	-	-	M	
22	D3-35-02	礫石刀	珪質頁岩	5	10.84	7.06	2.01	0.15	1	88	I	-	-	-	H	
	D3-35-03	礫片	珪岩	3	7.80	8.54	2.27	0.08	1	102	I	F	-	-	-	
13	D3-35-04	礫石刀	珪質頁岩	1	20.69	6.95	2.32	0.30	1	92	I	-	-	-	H	
	D3-35-05	礫片	黒曜石	3	4.82	8.37	1.40	0.03	L	-	I+Ⅲ	H	-	-	-	
49b	D3-35-07	二次加工剥片	珪質頁岩	7	17.03	24.66	9.12	3.14	1	112	I+Ⅲ+Ⅳ	F	64~86	-	-	
	D3-35-08	剥片	珪質頁岩	4	30.23	29.40	11.72	9.21	1	92	I+Ⅲ+Ⅳ	F	-	-	-	
	D3-35-09	礫片	黒曜石	1	6.28	8.82	1.25	0.04	-	-	Ⅲ	-	-	-	-	
	D3-35-10	剥片	珪質頁岩	1	14.54	11.43	2.83	0.32	2	116	I	S	-	-	-	
56	D3-35-12	石核	珪質頁岩	11	26.86	34.58	31.16	24.60	-	78~90	-	-	-	-	-	
	D3-35-13	剥片	黒曜石	2	17.46	9.35	3.06	0.32	L	-	V	S	-	-	-	
	D3-35-14	剥片	珪質頁岩	1	24.36	10.26	6.04	1.10	P	-	I+Ⅲ+Ⅴ	H	-	-	-	
	D3-35-15	礫片	黒曜石	1	6.76	4.49	1.75	0.04	L	-	I+Ⅲ	H	-	-	-	

押印番号	遺物番号	器種	材質・母形番号	最大径 mm	最大幅 mm	最大重 g	重量 g	打面	打角 利削角	背面構成	先端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折欠	欠損
	D0-35-16	銅片	黒曜石	3	23.43	12.38	4.69	0.81	P	-	I+V	F	-	-	-
	D0-35-17	鏝	チャート	19	11.85	9.41	7.27	0.68	-	-	-	F	-	-	-
	D0-35-18	砕片	瑤瑠質頁岩	1	6.11	7.56	1.20	0.04	I	112	I	H	-	-	-
6	D0-35-19	細石刃	瑤瑠質頁岩	1	11.65	7.08	1.22	0.08	I	94	I	H	-	-	H
	D0-35-20	細石刃	瑤瑠質頁岩	1	15.00	7.14	1.42	0.13	I	94	I	H	-	-	H
10	D0-35-21	石核	瑤瑠質頁岩	14	41.13	33.00	21.44	35.37	-	76~86	-	-	-	-	-
	D0-35-22	砕片	黒曜石	3	7.15	11.45	2.80	0.15	-	-	I+II	H	-	-	B
	D0-35-23	砕片	瑪瑙	1	5.50	9.19	3.95	0.18	-	-	I+III	H	-	-	B
	D0-35-24	砕片	黒曜石	4	7.61	3.93	1.79	0.03	P	-	I	H	-	-	L
	D0-35-25	砕片	砂岩	3	4.48	19.36	3.93	0.26	C	92	I	H	-	-	L
	D0-35-26	砕片	瑤瑠質頁岩	13	14.73	15.07	3.11	0.46	-	-	I	H	-	-	B
	D0-35-27	砕片	瑤瑠質頁岩	7	13.86	15.79	5.01	1.20	-	-	I+III+V	O	-	-	B
	D0-35-28	砕片	瑤瑠質頁岩	7	11.94	15.74	8.31	1.01	I	86	III	O	-	-	L
	D0-35-29	砕片	瑤瑠質頁岩	7	13.19	16.36	8.87	1.22	-	-	III	S	-	-	B
	D0-35-30	砕片	瑤瑠質頁岩	5	6.11	7.00	2.10	0.05	I	98	I+III	F	-	-	-
	D0-35-31	細石刃	瑤瑠質頁岩	2	14.59	8.36	2.21	0.16	I	82	I	F	-	-	-
	D0-35-32	砕片	瑤瑠質頁岩	1	38.66	18.80	7.95	5.20	I	122	I+III+IV	O	-	-	-
	D0-35-33	砕片	瑤瑠質頁岩	13	11.48	8.27	3.00	0.23	L	-	I+III	H	-	-	-
	D0-35-34	鏝	チャート	19	15.71	10.26	7.66	1.11	-	-	-	-	-	-	-
21	D0-35-35	細石刃	瑤瑠質頁岩	8	9.15	6.22	2.82	0.11	I	100	I+III	-	-	-	H
	D0-35-37	砕片	黒曜石	1	13.06	15.78	3.95	0.49	-	-	I+III	H	-	-	B
44	D0-35-38	砕片	瑤瑠質頁岩	1	34.93	40.28	15.72	16.80	6(2)	132	I+III	H	-	-	-
	D0-35-39	砕片	瑤瑠質頁岩	8	13.33	16.05	8.49	1.11	I	86	I	H	-	-	-
	D0-35-43	砕片	瑤瑠質頁岩	1	13.75	18.23	4.06	0.79	2	104	I+IV	H	-	-	-
40	D0-35-56A	砕片	瑤瑠質頁岩	12	32.86	11.67	7.64	1.90	2	92	I+III	F	-	-	-
	D0-35-56B	鏝	チャート	18	19.10	13.76	10.58	2.53	-	-	-	-	-	-	-
	D0-35-57	砕片	瑤瑠質頁岩	12	70.60	54.62	20.15	83.29	-	126	I+III+V	S	-	-	-
54b	D0-35-58	砕片	瑤瑠質頁岩	8	20.58	20.87	12.04	3.18	-	-	I+III	O	-	-	B
	D0-35-59	砕片	黒曜石	1	4.67	8.59	2.04	0.07	L	-	I+III	O	-	-	-
	D0-35-60	砕片	瑤瑠質頁岩	7	24.13	16.15	4.10	1.50	-	-	I	H	-	-	-
	D0-35-61A	鏝	チャート	19	14.21	10.78	7.95	1.07	-	-	-	-	-	-	-
	D0-35-61B	砕片	瑪瑙	1	3.27	7.59	3.56	0.08	I	92	III+V	O	-	-	-
53b	D0-35-63	砕片	瑤瑠質頁岩	8	38.73	27.66	7.43	5.56	I	106	I+III	H	-	-	-
49a	D0-36-01	砕片	瑤瑠質頁岩	8	21.49	28.25	6.33	2.96	L	-	I+III	S	-	-	-
51a	D0-36-02	砕片	瑤瑠質頁岩	7	15.01	11.79	3.82	0.51	I	116	I+III+IV	H	-	-	-
51c	D0-36-03	砕片	瑤瑠質頁岩	8	30.92	9.18	6.27	2.33	I	100	I+III	O	-	-	R
	D0-36-04	砕片	瑤瑠質頁岩	18	12.72	10.21	4.12	0.39	I	116	I+III	S	-	-	-
46	D0-36-05	砕片	黒曜石	4	11.39	15.26	7.07	0.77	-	-	I+II+III	O	-	-	-
51b	D0-36-06	砕片	瑤瑠質頁岩	5	55.74	43.70	30.77	46.13	2	130	I+II+III	O	-	-	-
	D0-36-07	砕片	チャート	27	5.72	7.89	3.10	0.09	C	66	III	O	-	-	-
55b	D0-36-08	砕片	瑤瑠質頁岩	16	14.96	19.83	3.53	0.52	-	-	III+V	F	-	-	B
	D0-36-09	砕片	瑤瑠質頁岩	18	7.43	9.14	2.83	0.20	I	92	I+III	H	-	-	-
25	D0-36-10	細石刃	黒曜石	1	22.32	8.12	3.22	0.36	I	84	I+II	-	-	-	H
	D0-36-11	細石刃	瑤瑠質頁岩	4	10.96	6.81	1.81	0.15	I	82	I	-	-	-	-
23	D0-36-12	細石刃	瑤瑠質頁岩	3	11.36	4.58	1.47	0.07	I	88	I	-	-	-	-
31	D0-36-13	細石刃	黒曜石	1	19.98	7.56	2.68	0.24	-	-	I	-	-	-	M
29	D0-36-14	細石刃	黒曜石	1	9.55	7.08	2.63	0.16	-	-	I	-	-	-	M
24	D0-36-15	細石刃	黒曜石	1	21.15	8.81	2.45	0.37	I	88	I	-	-	-	M
	D0-36-16	砕片	瑤瑠質頁岩	7	15.95	19.37	4.79	1.56	-	-	I+III+IV	H	-	-	-
	D0-36-17	砕片	瑤瑠質頁岩	11	17.78	24.77	5.53	2.00	I	96	I+II+III	H	-	-	-
43	D0-36-51	砕片	瑤瑠質頁岩	8	45.92	27.42	19.78	19.01	I	130	I+III	F	-	-	-
47	D0-36-52	砕片	黒曜石	6	7.28	10.00	3.82	0.26	-	-	I+II	H	-	-	B
	D0-37-51	砕片	瑤瑠質頁岩	9	37.55	15.43	8.56	3.89	I	82	I+III	H	-	-	-
	D0-43-04	鏝	チャート	24	21.39	20.71	17.59	9.25	-	-	-	-	-	-	H
	D0-43-10A	鏝	頁岩	7	25.59	24.00	14.77	6.81	-	-	-	-	-	-	H
	D0-43-10B	鏝	チャート	19	9.66	8.87	5.17	0.43	-	-	-	-	-	-	H
	D0-43-11	鏝	頁岩	6	29.82	20.97	9.66	4.70	-	-	-	-	-	-	H
	D0-44-07	鏝	チャート	18	28.82	16.15	10.40	5.30	-	-	-	-	-	-	H
19	D0-44-12	細石刃	瑤瑠質頁岩	3	13.32	6.64	1.33	0.10	I	76	I	-	-	-	H
3	D0-44-14	細石刃	瑤瑠質頁岩	2	22.38	5.51	3.15	0.24	I	88	I	F	-	-	-
	D0-44-15	砕片	安山岩	1	22.80	23.14	3.50	1.66	I	124	I+III	H	-	-	-
	D0-44-17	砕片	チャート	11	9.83	8.10	2.54	0.23	L	-	III+V	-	-	-	H
	D0-44-59	砕片	瑤瑠質頁岩	20	7.59	5.05	3.06	0.11	2	84	I+III	H	-	-	-
	D0-44-60	鏝	チャート	19	9.72	8.43	5.18	0.48	-	-	-	-	-	-	-
	D0-45-02	砕片	黒曜石	3	10.00	10.77	2.30	0.23	-	-	I+V	H	-	-	-
	D0-45-05	砕片	チャート	3	25.68	15.37	4.89	1.78	C	76	III+V	F	-	-	-
35	D0-45-06	細石刃	瑤瑠質頁岩	2	9.55	5.55	1.27	0.05	-	-	I	F	-	-	B
1	D0-45-07	細石刃	瑤瑠質頁岩	2	27.09	7.34	2.44	0.28	I	92	I+III	F	-	-	-
	D0-45-32	砕片	安山岩	3	12.83	7.15	2.24	0.17	L	-	I+III	F	-	-	-
	D0-45-33	砕片	瑤瑠質頁岩	4	28.16	20.75	6.94	2.66	-	-	I+II	-	-	-	M
	D0-45-35	砕片	黒曜石	3	34.80	14.15	10.00	2.82	P	-	I+II+V	-	-	-	-
	D0-45-58	鏝	チャート	25	19.46	18.83	11.72	5.34	-	-	-	-	-	-	-
	D0-46-31	砕片	チャート	3	27.19	9.39	2.38	0.67	-	-	III+V	-	-	-	-
	D0-47-01	鏝	流紋岩	2	65.39	26.96	23.20	53.22	-	-	-	-	-	-	H
39	D0-47-21	二次加工砕片	チャート	7	22.54	32.14	10.41	6.30	C	54	V	S	54~64	-	-

押出番号	遺物番号	種類	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剝離角	背度構成	先端 形状	調整角	使用箇所 被熱度	折れ	欠損
	D0-54-01	剥片	凝灰岩	2	40.42	20.58	8.76	6.35	L	-	I+II+V	F	-	-	-
	D0-54-04	剥片	黒曜石	4	8.88	4.10	2.90	0.07	-	-	I+III	O	-	B	-
	D0-54-13	礫	チャート	21	18.45	14.33	9.48	2.10	-	-	-	-	H	-	-
57	D0-55-01	剥片	黒曜石	6	14.19	17.18	8.63	1.43	-	74~80	-	-	-	-	-
	D0-55-02	礫	砂岩	2	40.03	21.54	17.04	10.76	-	-	-	-	-	-	-
38	D0-55-03	二次加工剥片	黒曜石	4	15.16	10.21	3.04	0.31	-	-	II+III	76~78	-	-	-
	D0-55-05	剥片	黒曜石	4	7.31	6.29	1.49	0.05	L	-	I+III	S	-	-	-
	D0-55-08	剥片	黒曜石	4	13.98	10.53	2.51	0.31	-	-	I+III	S	-	B	-
	D0-55-09	剥片	安山岩	3	14.20	12.28	4.90	0.88	L	-	I+III	F	-	-	-
	D0-55-12	剥片	凝灰岩	3	31.59	27.54	15.92	9.54	3	118	III+V	F	-	-	-
	D0-55-14	剥片	安山岩	3	10.08	14.87	5.90	0.49	3	100	III	F	-	-	-
	D0-55-15	剥片	安山岩	5	27.98	36.48	16.42	18.02	2	134	I+III+V	F	-	-	-
	D0-55-51	剥片	黒曜石	3	6.08	11.10	3.02	0.19	-	-	III	S	-	B	-
	D0-56-04	剥片	瑠璃頁岩	11	25.25	29.46	6.30	2.71	3(1)	102	I+II+III	H	-	-	-
	D0-56-06	剥片	安山岩	3	19.70	17.33	4.40	0.98	2	82	I+III+V	F	-	-	-
	D0-57-04	剥片	黒曜石	8	11.29	14.36	3.93	0.49	2	150	I+II+III	H	-	-	-
	D0-57-05	礫	砂岩	4	44.99	36.67	23.80	46.05	-	-	-	-	H	-	-
	D0-64-04	礫	チャート	20	23.62	16.88	11.84	5.58	-	-	-	-	H	-	-
	D0-67-01	礫	流紋岩	3	33.51	23.79	19.84	14.66	-	-	-	-	H	-	-
	D0-68-01	礫	砂岩	5	43.58	41.30	27.91	69.30	-	-	-	-	H	-	-

は、節理面は暗橙褐色、内部は暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いた石核である。厚手の不定型な剥片を石核の素材とし、上端の平坦面をそのまま打面に用い、表面および右側面で小型の剥片を剝離している。

敲石 (第14図61)

61は、灰白色で軟質の流紋岩を用いた敲石である。上下両端ともに、使用による損傷がある。

接合資料 (第12図48~50、第13図51~55)

珪質頁岩10 48は、剥片2点(48a・b)の接合資料である。拳程度の歪角際に対して、多方向から厚手の不定型な剥片を剝離している。48a・48bともに表面に自然面や節理面が残されており、細石刃核の素材を得るための母岩分割と考えられる。石材は、自然面が赤褐色、内部が暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いている。なお、このほかに接合していないが、自然面に覆われた中型の剥片1点がある。

珪質頁岩7 49は、加工痕ある剥片1点(49b)と剥片1点(49a)の接合資料である。49a→49bの順に小型不定型の剥片を剝離している。なお、第12図59の石核が同一母岩で、このほか小型の剥片類が7点ある。石材は、暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。

頁岩1 50は、剥片3点(50a~c)の接合資料である。平坦な同一の打面を用いて、縦長剥片3点を50a→50b→50cの順に剝離している。表面には円礫面が広く残されており、剥片剝離作業初期段階の資料であることがわかる。なお、接合資料では図示していないが、第11図45の剥片が50cに接合する。石材は、緑がかった黄灰色の頁岩で、原石は拳程度の円礫と推定される。

珪質頁岩8 51は、剥片3点(51a~c)の接合資料で、剥片剝離作業は次のような手順である。①51の表面右側を打面として下端を中心に剥片を剝離する。②51の上端を打面として51a→51bを剝離する。③51下端を打面として剥片剝離作業を行う。④打面を①と同じ位置にもどし、51cを剝離する。なお、51cは剝離時に打面でふたつに割れている。

53は、剝離時に打点で二つに割れた剥片が接合したものである。54は、欠損した剥片同士が接合して1個体になったものであるが、なお打面周辺は欠失している。

なお、接合はしなかったが、第9図42・43は同一母岩である。また、図示していないが中型の剥片1点、小型の剥片1点がある。石材は、暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。自然面を広く残す剥片、石核は見られないことから、剥片剝離作業半ばの資料と考えられる。

第2表 A地点出土石器組成表

母岩名	細石刃	刮削	二次加工製片	槓形石器	製片	銼片	石核	敲石	礫	点数	点数比	重量 g	重量比
瑠璃頁岩 1	5	-	-	-	6	1	-	-	-	12	7.0%	26.99	2.1%
瑠璃頁岩 2	8	-	-	-	-	-	-	-	-	8	4.71%	1.26	0.1%
瑠璃頁岩 3	7	-	-	-	-	-	-	-	-	7	4.12%	0.86	0.07%
瑠璃頁岩 4	3	-	-	-	2	-	-	-	-	5	2.94%	12.16	0.99%
瑠璃頁岩 5	4	-	-	-	-	1	-	-	-	5	2.94%	0.51	0.04%
瑠璃頁岩 6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.59%	0.21	0.02%
瑠璃頁岩 7	-	-	1	-	8	-	1	-	-	10	5.88%	58.81	4.78%
瑠璃頁岩 8	-	-	1	-	10	-	-	-	-	11	6.47%	116.13	9.44%
瑠璃頁岩 9	-	-	-	-	4	-	-	-	-	4	2.35%	92.71	7.53%
瑠璃頁岩 10	1	-	1	-	2	-	-	-	-	4	2.35%	86.20	7.00%
瑠璃頁岩 11	1	-	-	-	2	-	1	-	-	4	2.35%	29.43	2.39%
瑠璃頁岩 12	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	1.18%	85.19	6.92%
瑠璃頁岩 13	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3	1.76%	1.21	0.10%
瑠璃頁岩 14	-	-	-	-	-	1	1	-	-	2	1.18%	35.51	2.89%
瑠璃頁岩 16	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	1.18%	18.62	1.51%
瑠璃頁岩 17	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	5.21	0.42%
瑠璃頁岩 18	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2	1.18%	0.59	0.05%
瑠璃頁岩 20	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	0.59%	0.11	0.01%
頁岩 1	-	-	-	-	4	-	-	-	-	4	2.35%	60.34	4.90%
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	4.70	0.38%
頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	6.81	0.55%
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	10.76	0.87%
砂岩 3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.26	0.02%
砂岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	46.05	3.74%
砂岩 5	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	69.30	5.63%
凝灰岩 2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	6.35	0.52%
凝灰岩 3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	9.64	0.78%
凝灰岩 4	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.34	0.03%
チャート 3	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	1.18%	2.45	0.20%
チャート 7	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	0.59%	6.30	0.51%
チャート 11	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	0.59%	0.23	0.02%
チャート 14	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	0.59%	2.25	0.18%
チャート 18	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	1.18%	8.13	0.66%
チャート 19	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	2.94%	3.77	0.31%
チャート 20	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	5.58	0.45%
チャート 21	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	2.10	0.17%
チャート 22	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.25	0.02%
チャート 24	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	9.25	0.75%
チャート 25	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	5.34	0.43%
チャート 27	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.09	0.01%
黒曜石 1	5	-	-	-	5	4	-	-	-	14	8.24%	3.54	0.29%
黒曜石 2	-	-	-	-	4	-	-	-	-	4	2.35%	1.87	0.15%
黒曜石 3	-	-	-	-	5	1	-	-	-	6	3.53%	4.23	0.34%
黒曜石 4	-	-	1	-	2	3	-	-	-	6	3.53%	1.54	0.12%
黒曜石 5	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3	1.76%	20.83	1.69%
黒曜石 6	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3	1.76%	2.53	0.21%
黒曜石 7	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	1.05	0.09%
黒曜石 8	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.49	0.04%
安山岩 1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	2	1.18%	60.86	4.94%
安山岩 2	-	-	-	-	1	-	1	-	-	2	1.18%	45.30	3.68%
安山岩 3	-	-	-	-	4	-	-	-	-	4	2.35%	2.51	0.20%
安山岩 4	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	11.73	0.95%
安山岩 5	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	18.02	1.46%
流紋岩 1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	0.59%	155.92	12.67%
流紋岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	53.22	4.32%
流紋岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	0.59%	14.66	1.19%
瑪瑙 1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	1.18%	0.26	0.02%
瑪瑙 2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	0.59%	0.19	0.02%
瑪瑙 3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	0.59%	0.08	0.01%
計	35	1	5	1	87	18	4	1	18	170	100.0%	1,230.83	100.0%
点数比	20.59%	0.59%	2.94%	0.59%	51.18%	10.59%	2.35%	0.59%	10.59%	100.0%			

黒曜石 52は、剥片2点(52a・b)の接合資料である。小型の角礫を素材とし、打点を大きく移しながら52a→52bの順に不定型の剥片を剥離している。両剥片の表面には風化した剥離面(角礫形成時の割れ面か)が多数見られる。石質は、淡黒灰色半透明で夾雑物が散在する黒曜石で、信州・麦草峠産と考えられる。

第3節 B地点

1 概要(第15図)

B地点では、ソフトローム層下部(Ⅲ層下部)からハードローム層上部(Ⅳ層)にかけての層準で、焼け礫を主体とするブロックが1か所検出された。ブロックの位置は、調査区中央部のE4-15・16グリッドを中心とする直径4mの範囲で、立地は、周囲を急斜面に囲まれた独立丘陵頂部の小規模な平坦面である。

石器組成は、楔形石器1点、剥片5点、石核2点、敲石1点、礫22点の合計31点である。石器石材は、黒曜石1点、頁岩6点、チャート2点、礫石材は、砂岩が15点のほかは、安山岩、流紋岩、チャート、粘板岩、凝灰岩、ホルンフェルス、石英が各1点ずつである。

14個体の礫は、もともとは円礫であるが、被熱により破損したものが多く、原石の大きさを推定できるものは5個体ほどである。拳程度あるいはそれよりも大型と推定され、A地点の礫よりは大きい。

定型的な石器が出土していないため、石器群の帰属時期は不明である。出土層位、礫群などから、Ⅳ層下部の石器群に相当するかも知れない。

2 母岩別資料(第15図)

A地点出土の石器については、黒曜石1母岩、頁岩5母岩、チャート2母岩に分類した。

黒曜石 黒曜石11は、青みがかった淡黒色半透明で夾雑物をほとんど含まない良質な石質である。剥片1点の単独資料である。

頁岩 頁岩9は、灰白色に風化した軟質の頁岩で、小型の剥片1点と分割礫素材の石核1点で構成される。頁岩10は楔形石器1点、頁岩11は扁平な円礫を分割した大型破片1点、頁岩12・13は小型の剥片1点の単独資料である。

チャート チャート28は縦長剥片の欠損したもの1点、チャート29は小型の円礫を利用した敲石である。

3 出土遺物(第16図)

楔形石器(第16図1)

1は、頁岩による楔形石器である。表裏とも調整剥離に覆われており、素材の主要剥離面は残されていない。上下両端は潰れており、特に下端は線状になっている。

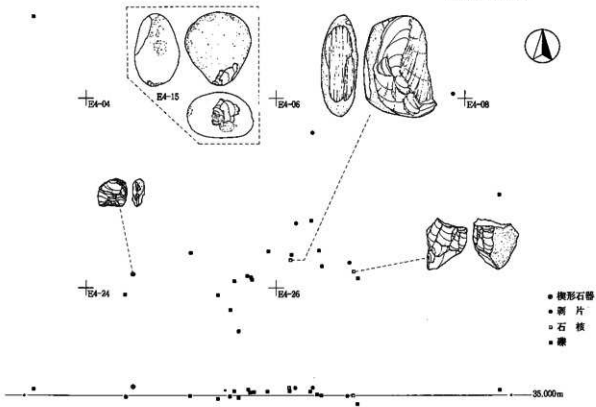
敲石(第16図2)

2は、黄褐色のチャート円礫による敲石である。上下両端に敲打痕があり、部分的に剥離している。

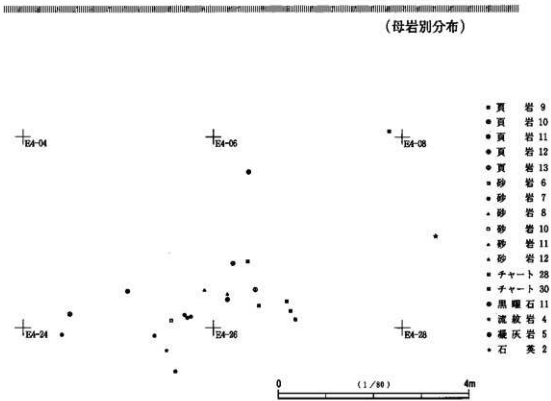
石核(第16図3・4)

3は、青みがかった灰色の頁岩による石核である。扁平な円礫を上端から分割した破片で、石核素材と考えられる。4は、灰白色に風化した頁岩による石核である。分割礫を素材とし、打面と作業面を頻繁に動かしながら、小型の剥片を剥離している。

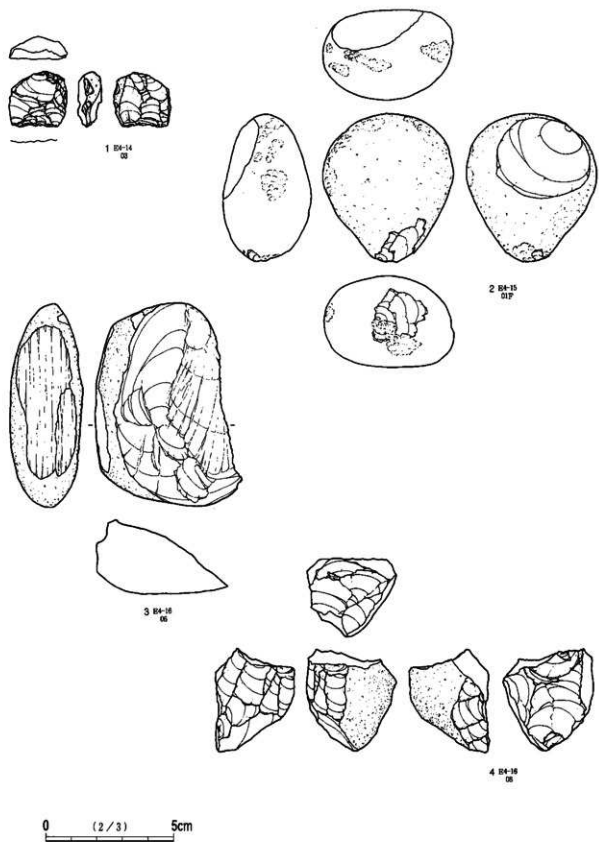
(遺物分布図)



(母岩別分布)



第15図 B地点遺物及び母岩別分布図



第16图 B地点出土遗物

第3表 B地点出土石器属性表

種別 番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大幅			重量 g	打面	打角 削離角	背面構成	先端 形状	調整角	使用面		
				mm	mm	mm							被熱痕	折れ	欠損
1	E3-03-01	鏃	砂岩	12	64.38	32.34	24.30	75.53	-	-	-	-	-	-	-
	E3-07-01	削片	チャート	28	25.74	18.69	9.62	3.36	C	122	I+III+V	-	-	H	-
	E4-06-04	削片	頁岩	12	19.85	19.85	8.49	2.35	C	76	III	H	-	-	-
	E4-14-03	楔形石器	頁岩	10	21.33	22.21	9.38	4.42	-	-	-	-	-	-	-
	E4-15-01A	鏃	粘板岩	1	40.94	30.25	9.11	9.78	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-01B	鏃	砂岩	9	63.26	51.87	35.79	121.97	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-01C	鏃	砂岩	10	84.96	73.11	49.58	116.61	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-01D	鏃	安山岩	10	72.88	41.38	35.84	109.43	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-01E	鏃	ホルンフェルス	4	48.10	46.33	37.75	111.23	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-01F	燧石	チャート	29	58.00	52.16	36.56	132.00	-	-	-	-	-	H	-
2	E4-15-01G	鏃	砂岩	7	44.13	33.92	12.84	27.57	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-02	鏃	砂岩	11	80.86	62.20	36.80	222.88	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-03	鏃	砂岩	7	42.08	41.01	12.79	25.47	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-04	鏃	砂岩	10	42.90	36.98	27.93	37.80	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-05	鏃	凝灰岩	5	41.52	39.14	31.40	56.76	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-06A	鏃	砂岩	7	59.81	53.41	12.65	34.80	-	-	-	-	-	H	-
	E4-15-06B	鏃	砂岩	7	70.74	39.75	17.02	46.82	-	-	-	-	-	H	-
	E4-16-01	鏃	砂岩	6	40.51	25.71	22.32	14.69	-	-	-	-	-	H	-
	E4-16-02	削片	黒曜石	11	7.57	14.62	3.50	0.34	-	-	-	H	-	B	-
	E4-16-03	削片	頁岩	13	14.29	33.37	7.49	2.71	-	-	I+III	-	-	-	-
3	E4-16-04	鏃	砂岩	6	85.58	47.60	36.55	130.16	-	-	I+II	-	-	H	-
	E4-16-05	鏃	砂岩	8	127.06	67.81	45.27	490.00	-	-	-	-	-	H	-
	E4-16-06	石核	頁岩	11	79.71	56.48	28.18	138.46	-	80	-	-	-	-	-
	E4-16-07	削片	頁岩	9	13.30	26.66	4.82	1.72	L	-	I+III	-	-	-	-
	E4-16-08	石核	頁岩	9	37.85	31.30	33.60	45.06	-	68-98	-	-	-	-	-
	E4-16-09	鏃	チャート	30	51.05	41.52	25.62	64.83	-	-	-	-	-	H	-
	E4-18-01	鏃	泥灰岩	4	72.36	55.21	28.51	141.45	-	-	-	-	-	H	-
	E4-24-02	鏃	砂岩	7	70.17	66.39	21.70	106.59	-	-	-	-	-	H	-
	E4-25-01	鏃	砂岩	7	31.60	30.57	7.56	5.89	-	-	-	-	-	H	-
	E4-25-02	鏃	石英	2	48.10	19.02	42.21	34.85	-	-	-	-	-	H	-
E4-25-03	鏃	砂岩	7	29.47	22.21	9.74	6.48	-	-	-	-	-	H	-	

第4表 B地点出土石器組成表

母岩名	楔形石器	削片	石核	燧石	鏃	点数	点数比	重量 g	重量比
頁岩9	-	1	1	-	-	2	6.45%	46.78	2.01%
頁岩10	1	-	-	-	-	1	3.23%	4.42	0.19%
頁岩11	-	-	1	-	-	1	3.23%	138.46	5.96%
頁岩12	-	1	-	-	-	1	3.23%	2.75	0.12%
頁岩13	-	1	-	-	-	1	3.23%	2.71	0.12%
砂岩6	-	-	-	-	2(2)	2	6.45%	144.85	6.23%
砂岩7	-	-	-	-	7(7)	7	22.58%	254.62	10.96%
砂岩8	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	490.00	21.09%
砂岩9	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	121.97	5.25%
砂岩10	-	-	-	-	2(2)	2	6.45%	154.41	6.65%
砂岩11	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	222.88	9.59%
砂岩12	-	-	-	-	1(-)	1	3.23%	75.53	3.25%
粘板岩1	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	9.78	0.42%
凝灰岩5	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	56.76	2.44%
ホルンフェルス4	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	111.23	4.79%
安山岩10	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	109.43	4.71%
泥灰岩4	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	141.45	6.09%
黒曜石11	-	1	-	-	-	1	3.23%	0.34	0.01%
チャート28	-	1	-	-	-	1	3.23%	3.36	0.14%
チャート29	-	-	-	1(1)	-	1	3.23%	132.00	5.68%
チャート30	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	64.83	2.79%
石英2	-	-	-	-	1(1)	1	3.23%	34.86	1.50%
計	1	5	2	1(1)	22(21)	31	100.00%	2,323.41	100.00%
点数比	3.23%	16.13%	6.46%	3.23%	70.97%	100.00%			

注：燧石及び礫の () 内は被熱痕のある点数

第4節 C地点

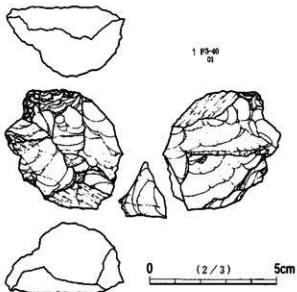
1 概要

調査区中央部やや東寄りのF3-40グリッドで、第2黒色帯上部（Ⅶ層）からチャートによる石核1点が出土した。周囲を拡張して精査したが、ほかに遺物は出土しなかった。

2 出土遺物

石核（第17図1）

1は、青みを帯びた黒色のチャートによる石核である。内部には橙褐色や黒灰色の節理が多方向に入る。原石は円礫と考えられるが、残された自然面（裏面上端）が広くないことから、原石の大きさを推定することは困難である。自然面を打面として表面に剥離面が連続する。特に打面に接する部分は細かな剥離面が多い。表面下端は節理面、裏面には分割面が残る。



第17図 C地点出土遺物

第5表 C地点出土石器属性表

検出 番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	先端 形状	調整角	使用痕 被熟度	折れ	欠損
1	F3-40-01	石核	チャート	31.48.09	46.19	25.16	55.03	-	84~88	-	-	-	-	-	-

第5節 単独出土・遺構内出土・表面採集石器

ナイフ形石器（第18図1）

1は、灰緑色の礫両産珪質頁岩を用いたナイフ形石器である。不定型の剥片を素材とし、左側縁を中心に裏面から調整加工を行っている。ただし、調整加工の剥離角が通常のナイフ形石器に比べて緩やかなことから、周辺調整の槍先形石器の可能性もある。

槍先形石器（第18図2）

2は、1と同一母岩を用いた周辺調整の槍先形石器である。縦長剥片の周囲を裏面から調整し、細身の木葉形に仕上げている。ナイフ形石器終末期にみられる形態である。なお、1と2は、同一の遺構覆土から出土した。

削器（第18図4）

4は、灰色に風化したホルンフェルスによる削器である。表面が円礫面に覆われた不定型の剥片を素材とし、各辺を表裏から粗く調整している。

楔形石器（第18図3・5~10）

3は淡褐色できめの粗い頁岩、5は淡褐色の砂岩、6~9は、青灰色や赤褐色のチャート、10は、青みがかった黒色不透明の地に白色の夾雑物を含む黒曜石を用いた楔形石器である。黒曜石を除くと、部分的に残された自然面の状況から、原石は小型の円礫と考えられる。縄文時代に帰属する可能性もある。

二次加工剥片 (第18図11~14)

11・13・14は、青みがかった黒色不透明の地に白色の夾雑物を含む黒曜石を用いた二次加工剥片である。3点とも同一母岩である。11・13は、いずれも欠損しているが、小型の剥片の一端に細かな調整加工を行ったものである。14は、素材剥片の打面が線状に潰れており、打瘤が発達しないことから、楔形石器かも知れない。13は、青みを帯びた黒色のチャートによる二次加工剥片である。縦長剥片を素材として、裏面右側縁に調整加工を行っている。

剥片 (第18図15)

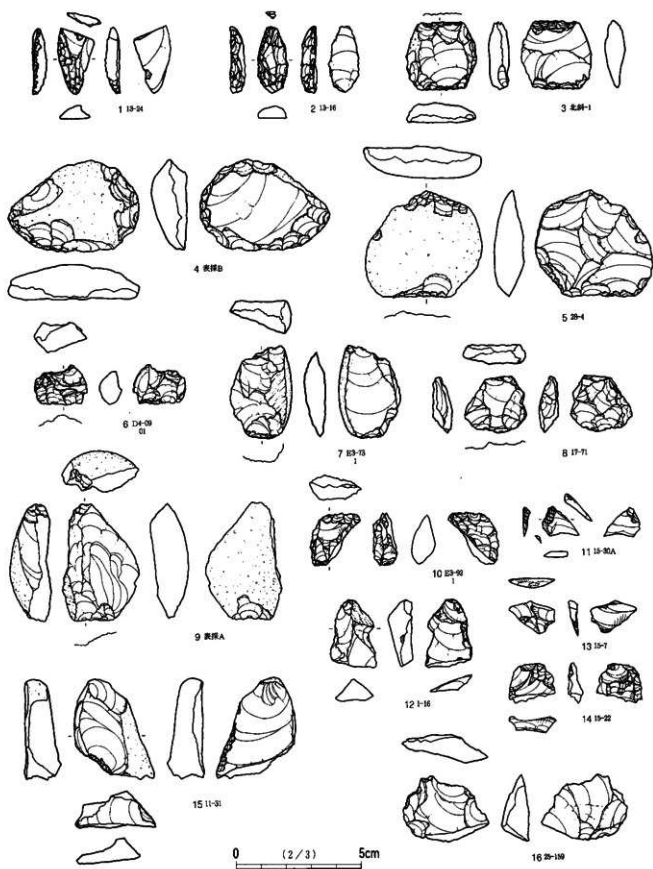
15は、自然面は橙褐色、内部は黄褐色で硬質緻密な凝灰岩を用いた不定型の剥片である。表面は、上下両方向からの剥離面で構成される。裏面の左側縁に刃こぼれがみられる。A地点の剥片に同一母岩が1点ある。

石核 (第18図16)

16は、褐色に風化した安山岩を用いた剥片素材の石核である。表裏両面から小型不定型の剥片を剥離している。

第6表 単独出土・遺構内出土・表面採集石器属性表

標頭番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 制鋭角	背面構成	先端 形状	調整角	使用痕 被擦痕	折れ	欠損
	03-69-01	剥片	安山岩	9	13.32	9.96	3.27	0.49	-	-	Ⅲ+V	F	-	-	B
	03-59-03	剥片	安山岩	7	13.97	23.10	2.61	0.86	-	-	Ⅲ+V	H	-	-	B
	03-79-01A	礫	チャート	23	9.23	9.05	4.44	0.37	-	-	-	-	-	-	-
	03-79-01B	剥片	チャート	2	15.99	12.43	2.52	0.51	1	90	I+Ⅲ	F	-	-	-
	03-88-01	燧石	石英	1	15.46	17.72	13.57	3.72	-	-	-	-	-	-	-
	03-99-01	剥片	黒曜石	9	11.80	20.55	5.45	1.18	L	-	I+Ⅲ	S	-	-	-
6	04-09-01	楔形石器	チャート	8	16.60	20.48	12.03	3.38	-	-	-	-	-	-	-
	E3-61-2	剥片	安山岩	8	19.85	13.82	4.54	0.86	-	-	I+Ⅲ	S	-	-	B
7	E3-72-1	楔形石器	チャート	16	36.00	24.01	11.24	10.80	-	-	-	-	-	-	-
10	E3-92-1	楔形石器	黒曜石	10	21.73	18.49	9.60	2.59	-	-	-	-	-	-	-
	E4-00-1	剥片	黒曜石	9	14.88	15.75	7.66	1.47	-	-	Ⅱ+Ⅲ	S	-	-	B
	E4-13-2	剥片	チャート	13	13.65	11.80	3.11	0.38	L	-	I+Ⅲ	S	-	-	-
12	I-16	二次加工剥片	チャート	6	25.22	18.68	9.41	3.26	-	-	I+Ⅲ+IV	S	-	-	H
	9-2	剥片	硬質頁岩	13	17.96	23.74	4.79	1.59	I	110	I+Ⅲ	S	-	-	-
15	11-31	剥片	凝灰岩	1	39.01	30.30	13.34	11.58	C	116	Ⅲ+V	O	-	-	N
2	13-16	石槍	硬質頁岩	19	26.22	12.03	5.80	1.82	-	-	-	-	64~90	-	-
1	13-24	ナイフ形石器	硬質頁岩	19	25.98	13.62	5.44	1.57	-	-	-	-	66~84	-	-
	14-5	剥片	チャート	4	30.74	13.25	6.56	2.21	L	-	I+V	H	-	-	-
13	15-7	二次加工剥片	黒曜石	9	12.37	18.06	3.52	0.49	-	-	Ⅲ	F	-	-	B
	15-17	剥片	ホルンフェルス	3	35.92	23.44	11.06	9.57	L	-	I+Ⅲ+V	S	-	-	-
	15-18	剥片	チャート	10	14.38	14.61	3.00	0.57	I	102	Ⅲ	S	-	-	-
14	15-22	二次加工剥片	黒曜石	9	15.49	17.95	5.68	1.06	L	-	I+Ⅲ	-	-	-	H
11	15-30A	二次加工剥片	黒曜石	9	9.49	15.33	2.72	0.26	-	-	I	H	-	-	B
	15-30B	剥片	黒曜石	9	13.26	10.62	2.62	0.24	L	-	I+Ⅲ	S	-	-	-
	17-63	剥片	チャート	9	26.69	16.69	4.38	1.84	I	100	I+Ⅲ	-	-	-	H
8	17-71	楔形石器	チャート	1	21.68	24.45	7.64	4.14	-	-	-	-	-	-	-
	19-1	剥片	チャート	17	20.41	16.49	5.09	1.39	L	-	Ⅱ+Ⅲ	F	-	-	-
	20-4	剥片	頁岩	3	17.55	21.49	4.65	1.72	I	94	I	S	-	-	-
	20-5	剥片	凝灰岩	1	18.37	26.11	10.69	2.77	C	84	I+Ⅲ+V	H	-	-	-
	20-6	剥片	チャート	15	16.97	23.52	8.67	2.48	6(4)	122	Ⅲ+IV	F	-	-	-
	22-1A	剥片	ホルンフェルス	2	34.89	33.01	12.93	13.30	2	98	Ⅲ	S	-	-	-
	22-1B	礫	頁岩	5	24.47	19.82	18.21	10.13	-	-	-	-	-	-	-
	22-3	剥片	頁岩	2	35.18	6.23	4.28	0.71	L	-	I+Ⅱ+Ⅲ	H	-	-	-
16	25-159	石核	安山岩	8	26.56	32.13	9.28	6.69	-	54~58	-	-	-	-	-
	25-4	楔形石器	砂岩	1	41.88	45.93	11.68	25.68	-	-	-	-	-	-	-
3	北科-1	楔形石器	頁岩	4	26.89	27.31	8.07	7.31	-	-	-	-	-	-	-
	北科-2	礫	頁岩	8	103.09	48.73	48.61	253.18	-	-	-	-	-	-	-
9	表採A	楔形石器	チャート	5	45.85	30.21	15.40	21.11	-	-	-	-	-	-	-
4	表採B	削器	ホルンフェルス	1	35.42	50.94	13.57	25.85	-	-	V	-	72~96	-	-
	表採C	剥片	チャート	2	25.61	14.03	6.29	2.24	L	-	I+Ⅱ+Ⅲ	S	-	-	L
	表採D	剥片	チャート	1	35.76	13.33	7.81	2.70	L	-	I+Ⅲ	S	-	-	-



第18图 单独出土·遺構内出土·表面採集石器

第3章 縄文・弥生時代

第1節 縄文時代

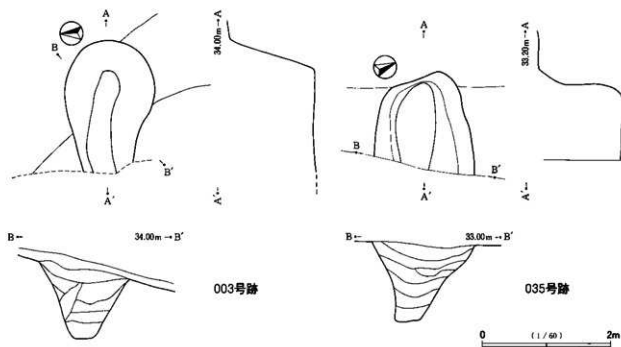
1 概要

縄文時代の遺構と遺物は少なく、遺構としては、山野に棲息する獣を捕獲するための罠として掘られたと考えられる陥穴が、2基検出されたにすぎず、その他に検出された土坑については縄文時代と判断できる例はなかった。遺物については、Ⅱ層中から僅かな量の縄文土器と石器が検出されたにとどまり、縄文時代の痕跡は希薄である。縄文時代の遺物が包含されていた区域は、台地中央から北部にかけての比較的平らな場所に限られている。狭い台地で、しかも比較的急な斜面に囲まれているために、遺物包含層が遺存しにくい地形であるにもかかわらず遺物が残っていたのは、第2章第1節で示したような理由によるものと考えられる。以下遺構と遺物についてふれることにする。

2 陥穴

003号跡（第19図）

D3-71グリッドを主体に検出された。002号の浅い溝によって上部が攪乱されているほか、西側3分の1が大きく攪乱され、失われている。検出面の形態はゆがみのある長楕円形を呈し、底面は細長い楕円形になっている。残存する長軸長2.08m、短軸長1.42m、検出面からの深さは1.31mを測る。底面残存部分の長軸長は1.60m、短軸長0.39mである。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム粒を少量混入している。出土遺物はなかったが、長楕円形を呈することから縄文時代草創期から早期の陥穴であろう。



第19図 陥穴

035号跡（第19図）

E5-40グリッドを主体に検出された。竪穴の021号跡の東壁に本遺構の端がかかっており、東側の約半分が調査区域外のため未調査である。003号跡と同様に長楕円形を呈し、残存する長軸長は1.56m、短軸長は1.54m、検出面からの深さは1.16mを測る。底面残存部分の長軸長は1.34m、短軸長0.64mである。覆土は上層が暗褐色土を主体とし、下層は武蔵野ロームを混入して暗茶褐色を呈する。全体に粘性が強い覆土である。出土遺物はなかったが、長楕円形を呈することから縄文時代草創期から早期の陥穴であろう。

3 遺構外出土遺物

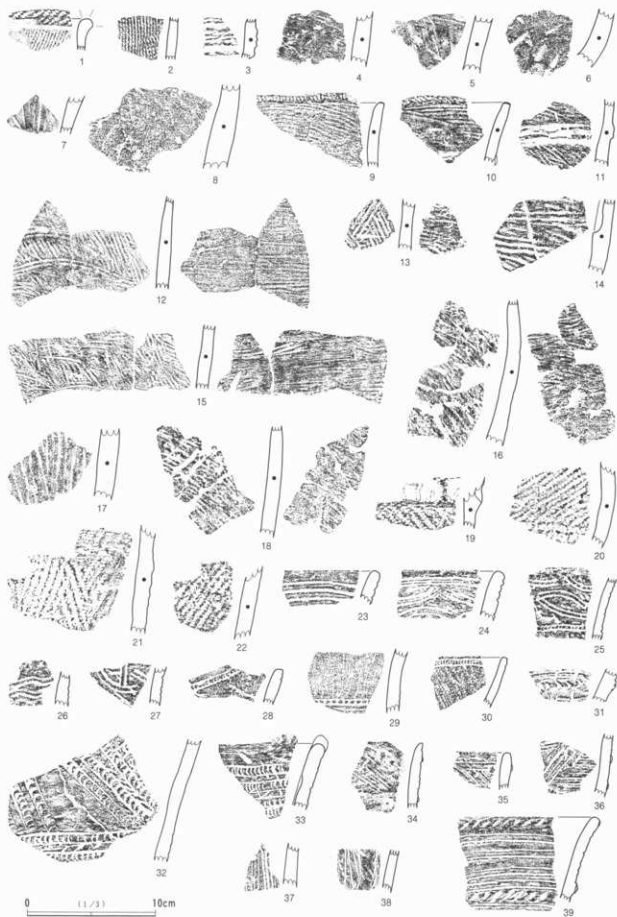
縄文土器（第20・21図、図版9・10）

350点あまりの縄文土器片が出土している。大部分の土器片が、細石刃ブロックの調査を実施した台地中央から細石刃などとともに出土している。型式別の出土量は、第7表に記した。最も出土点数が多かったのが前期後半で、早期がそれに次いでいる。型的には連続性はなく、断片的な内容である。

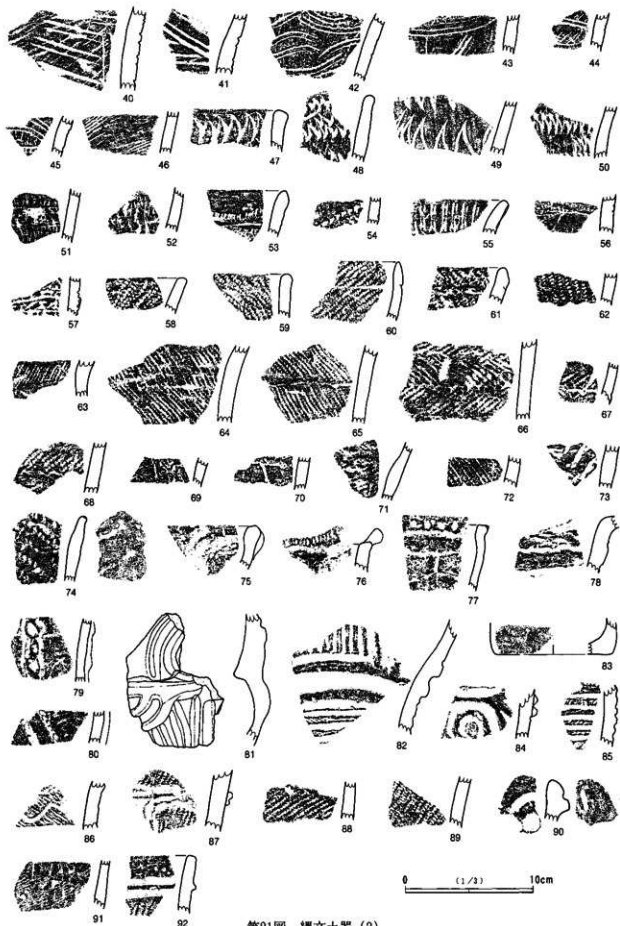
1・2は燃糸文土器である。1は口唇部にLRの単節縄文を2列に施文している。胴部は同一の縄文を施文している。2はRの密な燃糸施文である。2点は井草式である。7は尖底部近くである。胎土に繊維を含まない。外面に浅い沈線が見られる。田戸下層式であろう。3～6・8～18は田戸上層式であろう。3は口縁部近くの破片で、胎土に細かい繊維が混入する。内面調整は丁寧に行われている。外面には先端がやや丸い棒状工具による横位の押し文が施されている。下端はやや括れて縦の刺突が等間隔に施文される。押し文の形状は、先が丸味のあるV字状を呈する。4～6・8は厚みがあり、胎土に繊維を多く混入している。内外面に擦痕状の調整痕が見られるものが大半である。9・10・12・15は同一個体である。口縁部は外反し、口唇部に貝殻の放射筋を押ししたキザミが施される。外面は雑な貝殻条痕、内面は貝殻条痕に一部擦痕状の調整痕が伴っている。焼成は硬い。11は胴部上位の貼付隆帯であろう。隆帯上に浅い押し文を施している。内面は擦痕状の調整痕である。16・18は同一個体である。外面は粗い条痕、内面は擦痕状の調整痕である。17は条痕を伴わず沈線のような調整痕が見られる。胎土に繊維の混入が多い。19～22は前期の黒浜式であろう。胎土に繊維が多量に混入している。みな内面調整は比較的良いが、21は指による粗い調整が行われている。19は貼付隆帯の下から縄文を施し、上には半截竹管による刺突文がある。21はLR縄文の下端にループ状文が付けられている。21はRLの単節縄文の施文方向を変えて擬似羽状としている。23～39は諸磯式である。23～27は半截竹管による木の葉文や木の葉状入り組み文、波状文などが施文される。28～33は半截竹管による爪形文である。34～36は同一個体であろう。集合沈線を地文とし、ボタン状の貼付文を伴う。胎土に雲母を含み硬い焼きである。37は集合沈線のみである。38は沈線と連続する爪形文が施されている。39は口縁と胴部上段の隆帯にキザミを施し、間を半截竹管による単純な並行沈線で埋めている。40～57は浮島式である。燃糸を地文とし半截竹管による弧線文を施している。47～52は貝殻腹縁による波状文である。53は口縁部に沈線を巡らせ、沈線のすぐ上に半截竹管によるキザミを細かく施文している。54は竹管による列点文である。55は口縁部外面に連続した沈線が施されている。56は沈線による帯状の区画文の中に連続刺突文を充填している。57は半截竹管によって深い押し文が密に施されている。58～74は、縄文や

第7表 型式別出土数

型式名	点数	構成比
燃糸文	9	3%
田戸上層	101	29%
黒浜	23	7%
諸磯	45	13%
浮島・興津	51	15%
前期末	52	15%
阿玉台	30	9%
中峠	20	6%
不明	19	5%
土器片総数	350	100%



第20図 縄文土器 (I)

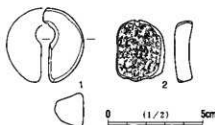


第21図 縄文土器 (2)

結節縄文が施文されている。焼成はよく、少量だが雲母を混入しているものもある。前期末葉の土器であろう。73は太い結節縄文である。72は撚糸で46などと同一時期かもしれない。75～80は阿玉台 Ia～Ib 式である。胎土に少量の雲母を混入する。81～92は中時式である。胎土には雲母や石英砂が目立つ。81～86は同一個体である。橋状の把手が付く、キャリバー形の深鉢であろう。太い隆帯で文様を描出している。胴部下半には縄文が地文として施文される。92は口縁部に隆帯で区画した無文帯があり、隆帯下からはRL単節縄文が施文されている。

土製品（第22図、図版10）

球状耳飾1点と土器片鏢1点が出土している。1が球状耳飾である。半分が欠損している。表面の調整は粗い。外縁部の厚さが17.5mmあり、厚ぼったい感じである。2の土器片鏢は小さく、紐かけ用の溝が両端に見られる。外面に貝殻の波状文を伴っており浮島式から興津式の土器片を加工している。



第22図 縄文時代土製品

第8表 耳飾・土鏢計測値表

器種名	押図番号	出土地点	遺物番号	縦径 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	欠損有無	焼成
球状耳飾	第22図1	D3-35	A地点036	38.0	41.0	17.5	12.76	有	良好

器種名	押図番号	出土地点	遺物番号	長径 (mm)	短径 (mm)	重量 (g)	欠損有無	時期	備考
土器片鏢	第22図2	025	161	32.0	25.0	8.39	有	興津	

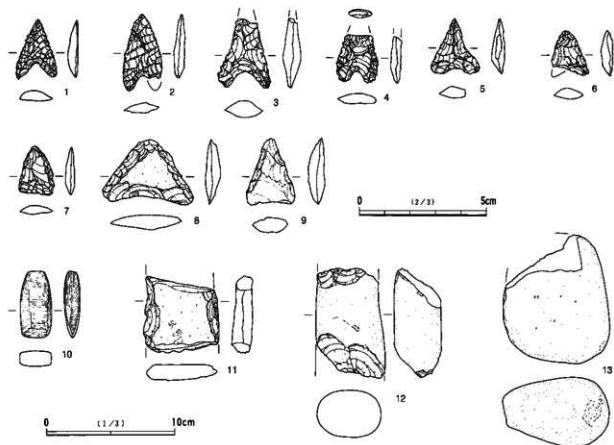
石器（第23図、図版10）

縄文土器と共にⅡ層の包含層中から石器が出土している。石鏢9点、磨製石斧1点、打製石斧1点、礮器1点、敲石1点である。石器の時期は、出土土器から早期から中期にかけてのものであろう。石鏢などは大きく形の整っているものについては早期ないしは前期であろう。1～9は石鏢である。凹基式と平基式の2種が出土している。形態の類似した例は少なく、7～9は調整剥離が少ないことから未成品かもしれない。石材はチャート3点、黒曜石2点、安山岩2点、頁岩1点、ホルンフェルス1点である。10は小型の磨製石斧である。全面よく研磨されている。石材は頁岩である。11は短冊形の打製石斧であろう。両端を折損している。片面に自然面を残している。12は棒状の自然礮の両端に粗い剥離を伴う礮器である。両

第9表 縄文時代石器計測値表

() は残存長

押図番号	器種	出土地点	遺物番号	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	欠損の有無	分類	備考
第23図1	石鏢	D3-54	003	チャート	22.0	16.0	4.0	0.9	有	凹基	
第23図2	石鏢	D3-34	001	チャート	31.0	15.0	4.0	1.6	有	凹基	
第23図3	石鏢	009	002	黒曜石	(28.0)	21.0	7.0	2.4	有	凹基	
第23図4	石鏢	025	034	黒曜石	(18.0)	17.0	4.0	1.3	有	凹基	
第23図5	石鏢	017	008	安山岩	22.0	19.0	5.0	1.3	有	凹基	
第23図6	石鏢	D3-56	007	頁岩	18.0	14.0	5.0	0.9	有	凹基	
第23図7	石鏢	E3-52	001	チャート	19.0	14.0	3.5	0.9	有	平基	
第23図8	石鏢	020	001	ホルンフェルス	25.0	35.0	6.0	4.3	有	凹基	未成品か
第23図9	石鏢	E3-73	002	安山岩	26.0	19.0	7.0	2.6	有	凹基	未成品か
第23図10	磨製石斧	30	16	頁岩	52.0	24.0	13.0	28.9	有	定角形	
第23図11	打製石斧	北斜面	8	ホルンフェルス	(60.0)	(55.0)	(13.0)	76.1	有	短冊形	
第23図12	礮器	E4-03	4	礮岩	(86.0)	(55.0)	37.0	259.1	有		
第23図13	敲石	21	20	砂岩	(100.0)	84.0	55.0	580.0	有		



第23図 縄文時代石器

端に加工を施した石斧であったのかもしれない。石材は礫岩である。13は敲石である。円礫の一端に敲打痕を伴う。石材は砂岩である。各石器の計測値は、第9表に掲載した。

第2節 弥生時代

弥生時代の遺構は検出されておらず、遺物についても僅かに1点の弥生後期の土器片が出土しているだけである。周辺の遺跡について第1章第1節で既に記したように、東南部地区内の弥生時代の遺跡は極端に少なく、弥生時代後期の竪穴住居跡については、バクチ穴遺跡のわずか1棟のみである。

遺構外出土遺物（第24図、図版10）

壺の口縁部と思われる。口端がシャープに面取りされ肥厚しており、口唇部に縄文が施されているが擦れているため不明瞭である。おそらくRLの単節縄文であろう。外面の角には刻みが連続して施されている。時期は、弥生時代後期末葉と思われる。



第24図 弥生土器

第4章 古墳時代以降

第1節 竪穴住居跡

概要

竪穴住居跡は14棟検出された。台地中央に若干の平地が認められる他は、斜面となっている部分のものが多く、1棟を除くその他の竪穴住居跡は、南東側斜面に沿って検出されている。地形が急な斜面に変わる位置に竪穴住居跡が構築されていることから、南東側の壁の遺存があまりよくない。古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡からなることから、カマドを伴うのが一般的であるが、一部の竪穴ではカマドを伴わずに炉跡が検出された特殊な竪穴も含まれている。カマドは北西ないしは北側壁に設置されている。竪穴のプランは方形を呈するものがほとんどだが、炉跡を伴う竪穴については、長方形を呈している。

南西斜面に沿った溝から土師器が出土しており、南西斜面側にも数件の竪穴が存在していたのかもしれない。出土遺物は、竪穴の遺存状態が悪いものの比較的多かった。須恵器杯・短頸壺、土師器杯・高杯・甕などが出土している。古墳が1基検出されたが、年代は出土土器から5世紀後半と考えられる。古墳の構築が終わると遺構が見られなくなり、6世紀中葉以降になってようやく竪穴住居が作られ始める。011号跡、012号跡、036号跡などが最初に構築され、以後継続して竪穴が営まれようである。6世紀末葉から7世紀前葉になると026号跡や025号跡、014号跡、015号跡、018号跡などが営まれる。その後7世紀前半までに013号跡、017号跡、021号跡などがつづくと考えられる。7世紀後半から8世紀中葉にかけては竪穴が構築されず、辛うじて8世紀後半に030号跡が構築されたにとどまる。2基検出された有天井土壌は8世紀代と思われ、8世紀前葉から中葉にかけての無住の時期に一時的に墓域として機能した事を示していると考えられる。017号跡や018号跡は、カマドを伴わず、地床炉を使用していることから住居跡と言うよりも何らかの工房跡と考えられ、鍛冶関連の遺物が出土していないもののその関連施設などの可能性が高いかもしれない。東南部地域においては6世紀から8世紀にかけて大規模な集落が継続的に営まれる時期であり、春日作遺跡の様なせ尾根状の不変な台地に作られた竪穴は、広く安定した台地に営まれた「居住」を目的とする竪穴などとは、その機能が異なるのではないかと推測される。近隣の椎名神社遺跡においても、やせ尾根状の台地に竪穴住居が営まれており、大集落と小集落の関係を探る上で興味深い調査例である。

第10表 竪穴住居跡一覧表

()は推定値

遺構番号	方位	規模 (m)		深さ (m)	床面積 (㎡)	施設	時期	グリッド	備考
		主軸	対向軸						
011	N-34°-W	4.4	4.4	0.70	12.65	カマド	6世紀第2～3	F4-50	
012	N-45°-W	5.5	(5.2)	0.92	(25.60)	カマド・貯蔵穴	6世紀第3～4	F3-86	
013	N-31°-W	4.2	3.9	0.58	11.92	カマド	7世紀第1～2	E5-02	
014	N-64°-W	(5.5)	(5.5)	0.80	(26.80)	炉?	6世紀第4～7世紀第1	E5-02	特殊な竪穴か
015	N-5°-W	6.6	6.3	0.73	34.34	カマド	6世紀第4～7世紀第1	D4-77	
016	-	-	-	0.49	-	?	6世紀代?	D4-97	
017	N-42°-W	(5.2)	3.8	0.71	(17.40)	炉	7世紀第1～2	E4-84	特殊な竪穴か
018	N-58°-W	(7.3)	5.9	0.50	(39.80)	炉?	6世紀第4～7世紀第1	E4-84	特殊な竪穴か
021	N-69°-W	6.1	5.9	0.82	28.85	カマド	7世紀第1～2	D5-39	
025	N-25°-E	7.8	7.2	0.84	49.49	カマド	6世紀第4	F4-33	
026	N-43°-W	(6.3)	(6.3)	0.73	-	カマド	6世紀第4	F4-11	
027	-	-	-	0.16	-	?	6世紀代?	F4-14	
030	N-36°-W	4.4	4.6	0.60	(16.50)	カマド	8世紀第3～4	G3-33	
036	N-21°-W	5.5	6.0	0.61	27.95	カマド	6世紀第3～4	H2-23	

* 住居跡の床面積は、整溝を含まない面積である。

011号跡（第25図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、F4-50グリッドを主体に位置する。南東壁を除き竪穴の遺存状態はよい。平面の形態は、隅丸の正方形を呈し、規模は一辺4.4mを測る。主軸方位はN-34°-Wで、カマドは北西壁中央に位置する。竪穴の深さは、検出面から最も深い壁で0.70mである。床面積は12.65㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームの混入が多く粘性が強い。カマド周辺では構築材の砂質粘土が混入する。ピットは5か所で検出され、P1~P4が主柱穴で、P5は出入口施設に関係したピットであろう。P4の部分に土坑を伴うが、後世の攪乱と考えられる。壁溝は全周している。カマドの遺存状態はよく、3・4の臺がほぼ完形のまま、カマドの芯として使われている。火床部に堆積する焼土は比較的多かった。

出土遺物は、カマドの芯材となった臺の他には点数が少なく、床面乃至は床面の近くから出土している。図示できたのは、土師器の杯1点、鉢1点、甕4点、土玉1点である。

012号跡（第26図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、F3-86グリッドを主体に位置する。南東壁のほか壁溝も失われている。平面の形態は、南東側がやや開き気味の方角を呈し、規模は5.5m×約5.2mを測る。主軸方位はN-45°-Wで、カマドは北西壁中央に位置する。カマドの煙道部周囲に深さ18cm程度の浅い掘り込みが半円状に検出された。竪穴の深さは、検出面から床面までの最も深い壁で0.92mである。床面積は約25.60㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム粒と焼土粒が少量含まれる。カマド周辺では構築材の砂質粘土が混入する。ピットは5か所で検出され、P1~P3が主柱穴であろうが、西側コーナーでは床面に主柱穴と考えられるピットは検出されなかった。P4は床面から34cmの深さがある。規模は小さいが貯蔵穴であろう。P5は床面から30cmの深さがある。壁溝は全周していたと思われる。カマドの遺存状態はよい。火床面はあまり焼けていないが、堆積する焼土は比較的多かった。

出土遺物は、カマド周辺部に限られる。図示できたのは、土師器の杯5点、高杯1点、小型甕1点、支脚1点などである。1はいわゆる有段口縁杯である。2の外反ぎみに内傾する杯とともに出土している例としては東南部事業内の高沢遺跡159号住居跡があり、有段口縁杯の例では他に椎名崎遺跡からの出土例がある。

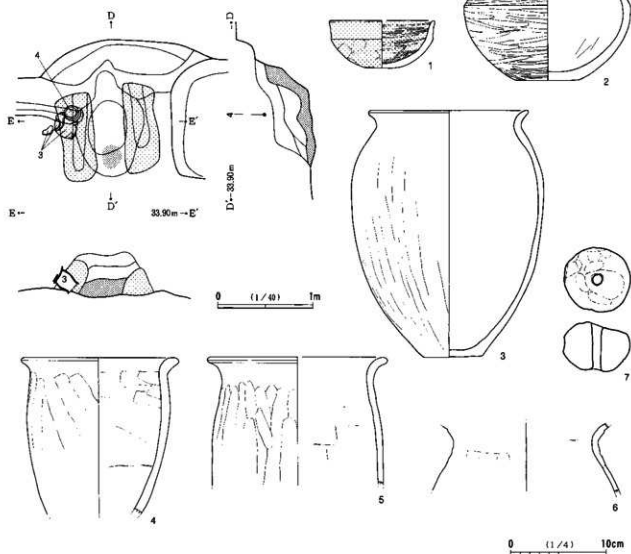
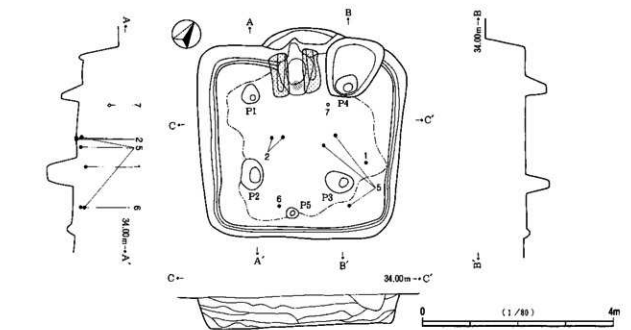
013号跡（第27・28図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、E5-02グリッドを主体に位置する。015・016号などと近接し、014号跡を壊している。北西コーナーの部分には019号溝があり、若干竪穴を壊しているが遺存状態はよい。平面の形態は、隅丸の正方形を呈し、規模は4.2m×3.9mを測る。主軸方位はN-31°-Wで、カマドは北壁中央に位置する。カマド構築材の粘土が左右の壁にまで及んで貼り付けられていた。検出面から床面までの深さは最も深い壁で0.58mである。床面積は11.92㎡を測る。覆土は褐色土を主体とし、若干の焼土粒を含んでいる。ピットは4か所で検出され、P1~P4は主柱穴と考えられる。壁溝は全周している。床面は四隅を除き広い面積で硬化していた。

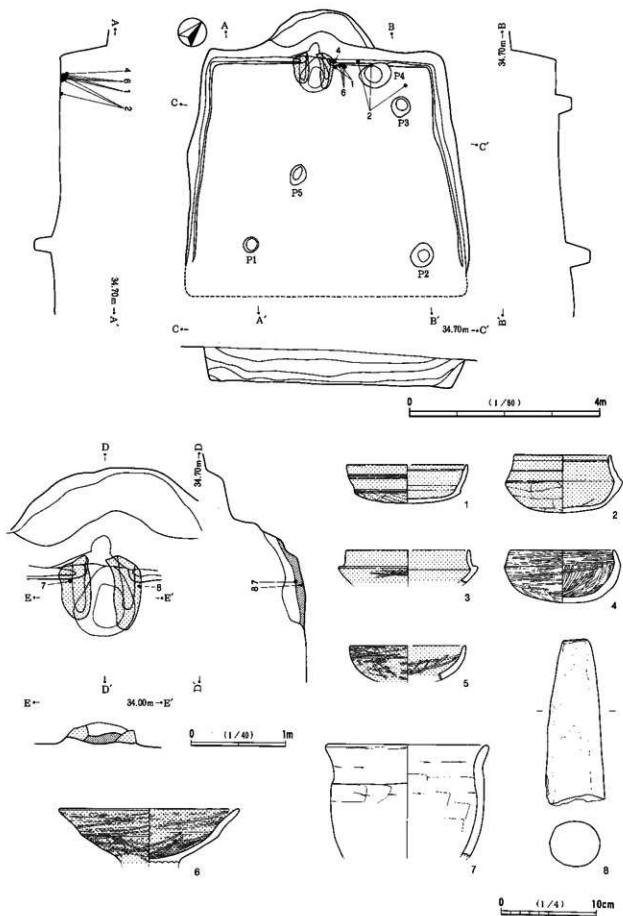
出土遺物は、床面近くから散漫に出土している。図示できたのは、土師器の鉢1点、高杯1点、甕3点、土玉3点、土製支脚1点である。支脚はカマド前方の床面から出土している。

014号跡（第27・28図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、E5-02グリッドを主体に位置する。013号跡に壊されているほか、018号跡とも切り合っている。018号跡との境は壁の確認ができていないため新旧は確認しにくい、018



第25図 011号跡及び出土遺物 (7 1/2)



第26図 012号跡及び出土遺物

の西側コーナーの壁溝の状態は014号跡の床面に掘り込まれていると判断できることから、本遺構の方が古いと考えられる。竪穴の南東側は掘り込みが浅かったために壁が失われている。平面の形態は、隅丸の正方形を呈し、規模は一辺約5.5m程度と推測される。主軸方位はN-54°-Wで、カマドは検出されておらず痕跡もないことから、017・018号跡と同様に炉を伴っていたと推測される。残存する北壁の深さは、0.80mである。床面積は約26.80㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とする。ピットは3か所で検出され、P5~P7は本竪穴に伴う主柱穴であろう。壁溝は検出されなかった。本来カマドが伴う時期であると考えられることから炉を伴っていたとすれば、一般的な竪穴住居跡ではなく何らかの工房跡と推測される。

出土遺物は、竪穴のほとんどが013号跡に壊されていることから微量である。図示できたのは、土師器の杯1点であるが帰属は微妙な位置にある。本遺構のものとして判断しておきたい。

017号跡（第27～30図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、E4-84グリッドを主体に位置する。018号跡を明らかに壊し、018号跡の竪穴内に構築されている。南壁は斜面のため壁溝とともに失われている。平面の形態は、長方形を呈し、規模は長軸長約5.2m、短軸長3.8mを測る。長軸方位はN-42°-Wで、検出面からの深さは最も深い北壁で0.71mである。床面積は約17.40㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、粘性が強い。床面の中央で炉跡が検出された。不整形円形を呈し、長軸長1.15m、短軸長0.90mを測る。深さは約5cmと浅く焼土が堆積していた。ピットは検出されなかった。壁溝は全周していたであろう。床面はほぼ全面硬化していた。本来カマドが伴う時期であると考えられることから炉を伴っていたとすれば、一般的な竪穴住居跡ではなく何らかの工房跡と推測される。

出土遺物は、覆土の残りがよい北側床面で多く出土している。図示できたのは、須恵器の杯1点、土師器の杯9点、鉢2点、高杯5点、甕15点、手捏土器4点、土玉5点、石製紡錘車1点である。30の甕の底部は内面からの敲打による焼成後の穿孔である。

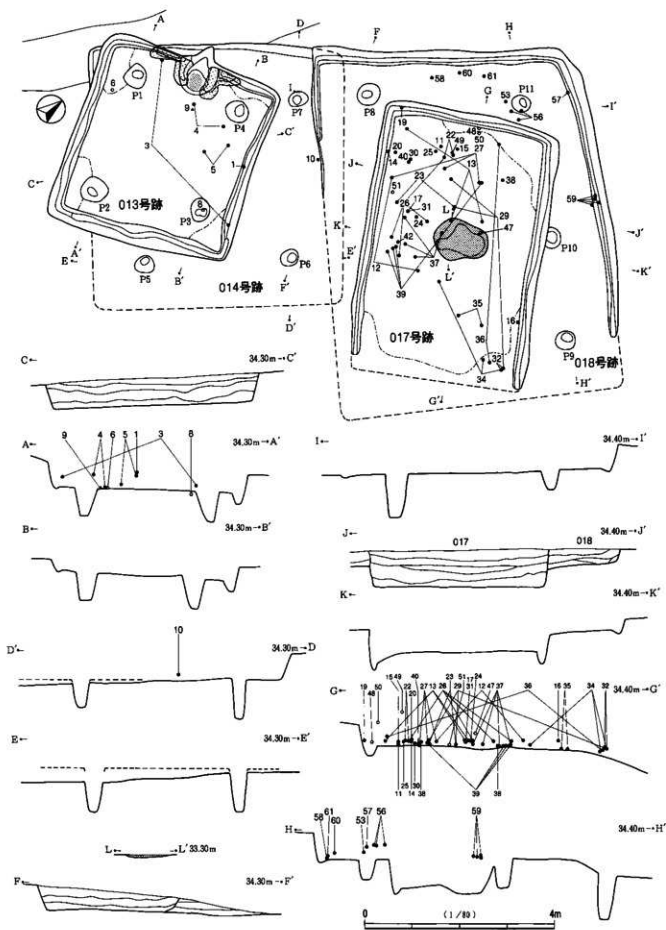
018号跡（第27・30図、図版11）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、E4-84グリッドを主体に位置する。017号跡に壊されているほか014号跡とも切り合っている。土層断面では観察できなかったが、018号跡が014号跡を壊していると考えられる。017号跡と同じく西壁及び南壁を斜面のため失っている。平面の形態は、長方形を呈し、規模は長軸長約7.3m、短軸長5.9mを測る。長軸方位はN-58°-Wで、カマドの痕跡が4つの壁面に観察できなかったことから、017号跡と同様に床面に炉を伴っていたものと推測される。検出面からの深さは最も深い壁で0.50mである。床面積は約39.80㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土粒の混入がある。ピットは4か所で検出され、P8~P11は皆深いことから主柱穴と考えられる。壁溝は全周すると思われる。本来カマドが伴う時期であると考えられることから炉を伴うとするならば、一般的な竪穴住居跡ではなく何らかの工房跡と推測される。

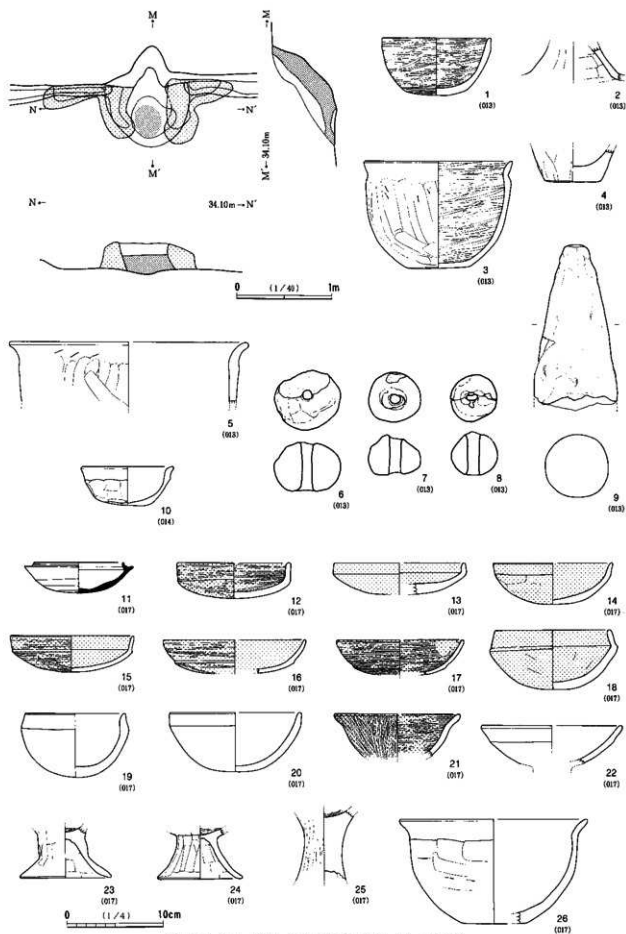
出土遺物は、覆土の大半は017号跡が占めるため少なかったが、北側の床面乃至は床面の近くから出土している。図示できたのは、須恵器の杯1点、土師器の杯2点、甕3点、甌3点である。

015号跡（第31図、図版11・12）

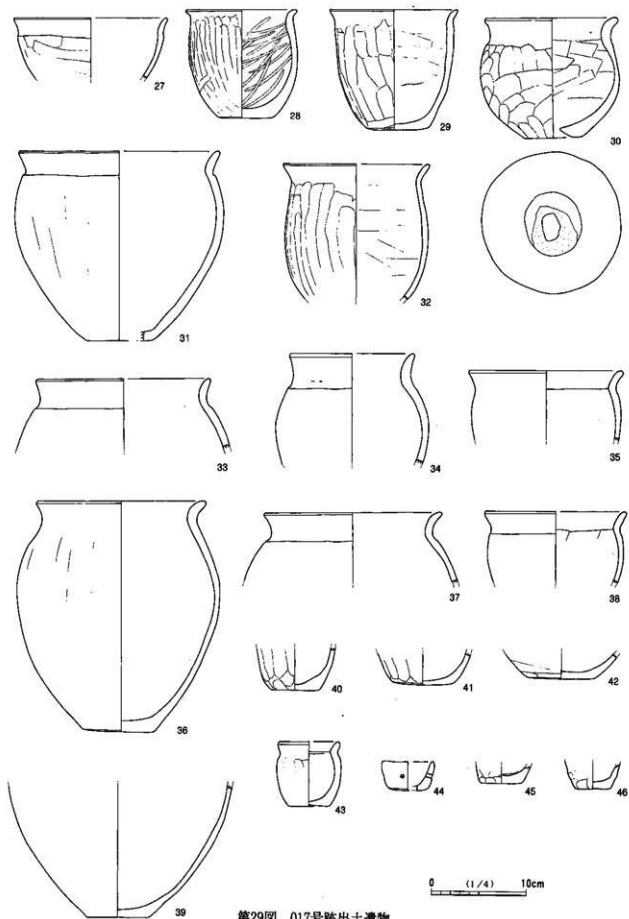
台地南部の平坦面で検出され、D4-77グリッドを主体に位置する。遺存状態はよく竪穴が深い。平面の形態は、正方形を呈し、規模は6.6m×6.3mを測る。主軸方位はN-5°-Wで、カマドは北壁中央に位置する。検出面からの深さは0.73mである。床面積は34.34㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム



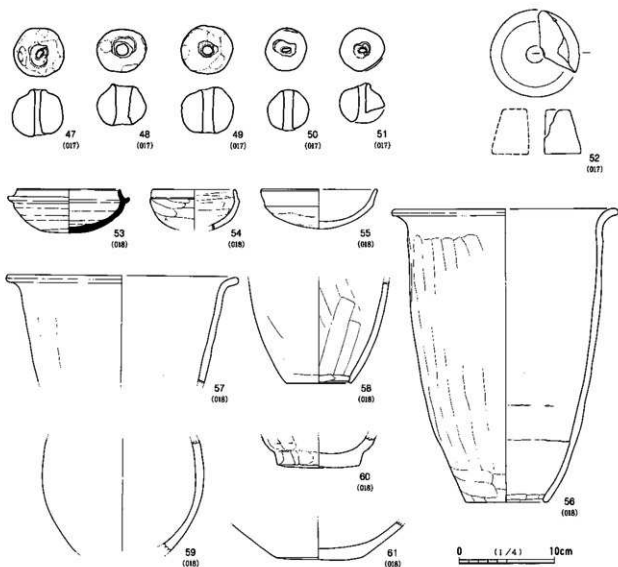
第27图 013·014·017·018号迹



第28图 013·014·017号跡出土遺物 (6~8 1/2)



第29图 017号跡出土遺物



第30図 017・018号跡出土遺物 (47~52 1/2)

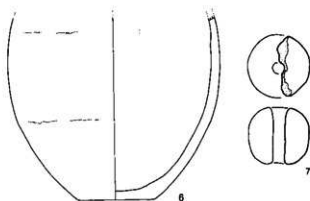
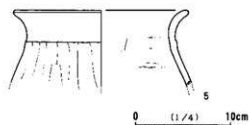
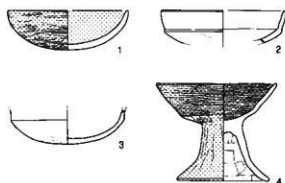
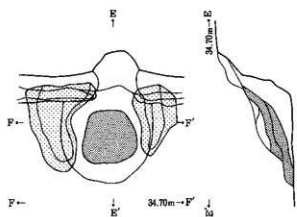
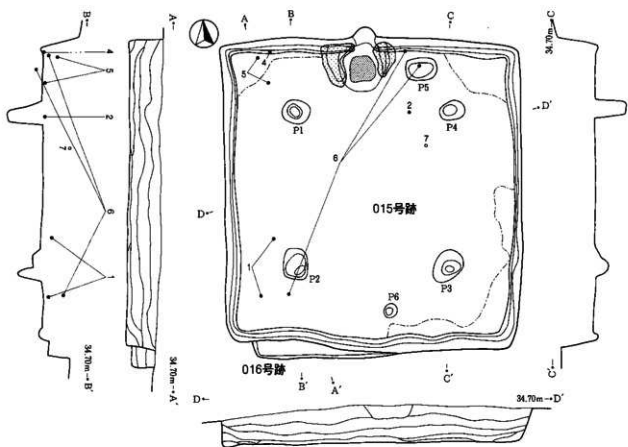
粒と焼土粒を混入している。床面直上に薄い焼土層が壁に近い場所で部分的に観察されたが、火災に遭ったことによるのかどうかは断定しがたい。ピットは6か所で検出され、P1~P4が主柱穴で、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設に関係したピットであろう。壁溝は細いが全周している。コーナーを除いて床面は広い範囲で硬化していた。

出土遺物は、カマド周辺で若干まとまってはいるものの、量的には少ない。床面の近くから出土しているものが主体である。図示できたのは、土師器の杯3点、高杯1点、甕2点、土玉1点である。

016号跡 (第31図、図版11・12)

台地南部の平坦面で検出され、D4-97グリッドを主体に位置する。015号跡の検出の段階で2棟の堅穴が重複していることが予想された。堅穴の大半が015号跡と重複しており、南東コーナー部分のみが残存し土層観察で015号跡によって壊されていることが判明した。規模は015号よりも一回り小規模の堅穴であつたろう。検出面からの深さは0.49mである。覆土は暗褐色土を主体としている。

出土遺物は皆無で、時期は不明であるが、015号跡よりも大きく時期が離れてはいないと推測される。



第31図 015・016号跡及び出土遺物 (7 1/2)

021号跡（第32・33図、図版12）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、D5-39グリッドを主体に位置する。斜面のため南東壁がほとんど失われているが若干の立ち上がりを残している。北東壁の部分にある土坑の023号跡を壊している。平面の形態は、正方形を呈し、規模は6.1m×5.9mを測る。主軸方位はN-69°-Wで、カマドは北西壁中央に位置する。検出面からの深さは最も深い壁で0.82mである。床面積は28.85㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームの混入が多い。カマド周辺では構築材の砂質粘土が混入する。ピットは8か所で検出され、P1～P6が主柱穴で、P7は出入口施設に関係したピットであろう。P8は40cmの深さがあり、P7と同じく出入口に関連したピットかもしれない。壁溝は部分的に途切れている。カマドの遺存状態はよく、両袖がよく残っている。床面の広い範囲が硬化していた。

出土遺物は、西側コーナー周辺でまとまって出土している。カマドの芯材となった甕の他には出土点数が少なく、床面乃至は床面の近くから出土している。図示できたのは、土師器の杯7点、鉢1点、高杯1点、甕7点、瓶1点、土製支脚1点、碧玉製管玉1点である。

025号跡（第34～36図、図版12）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、F4-33グリッドを主体に位置する。斜面のため南東壁がほとんど失われているが若干の立ち上がりを残している。南東壁を除けば比較的遺存状態はよい。026号跡と027号跡を壊して構築されている。平面の形態は、やや歪みのある正方形を呈し、規模は7.8m×7.2mを測る。主軸方位はN-25°-Eで、カマドは北東壁中央に位置し、唯一カマド位置を他の堅穴と異にしている。検出面からの深さは最も深い壁で0.84mである。床面積は49.49㎡を測る。覆土は明褐色土を主体とし、ロームの混入が多い。カマド周辺では構築材の砂質粘土が覆土に混入する。ピットは7か所で検出されたが、P1・P3・P4・P6が本堅穴の主柱穴であろう。P7は貯蔵穴と考えられる。P2・P5は026号跡の柱穴と考えられる。壁溝は東側コーナーでわずかに確認された。北西壁側の床面に焼土を伴う落ち込みが確認された。焼けた状況がカマドの火床面と考えられ、底面から小型の甕などが検出された。このカマド跡は、北西壁側で辛うじて存在が確認された026号跡のカマドと考えられ、025号跡の床面に検出されたP2とP5も026号跡に関連したピット考えられる。

出土遺物は、北西壁側を主体として床面近くからの出土が多い。図示できたのは、土師器の杯9点、高杯1点、甕12点、瓶1点、土製支脚1点、土玉2点、埋木玉1点である。この内12・17・20の土器は026号跡の遺物と考えられる。それ以外の土器とは、時期的な差がほとんどないと考えられることから、同一の堅穴成員によってカマド方位を変更し、住居が建て替えられた可能性が高い。

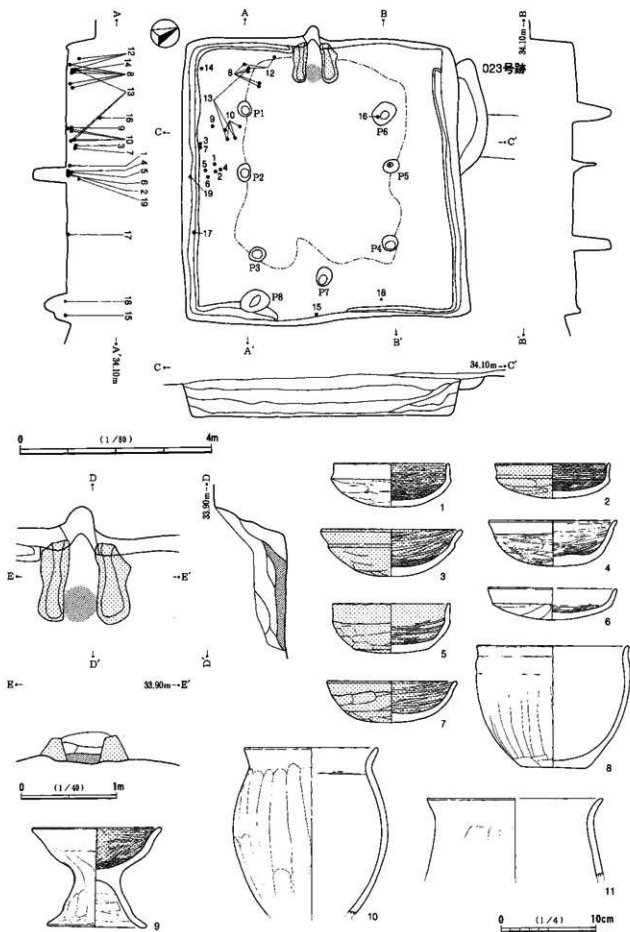
026号跡（第34図、図版12）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、F4-11グリッドを主体に位置する。025号跡の北西壁に辛うじて確認され、025号跡の床面で確認されたカマドの痕跡が本跡のもとと推測される。平面の形態は、本堅穴の柱穴と考えられるP2・P5の配置から正方形を呈すると考えられ、規模は一辺約6.3m程度と推測される。主軸方位はN-43°-Wである。検出面からの深さは0.73mである。覆土は黄褐色土を主体とし、ロームの混入が多い。壁溝は検出されなかった。

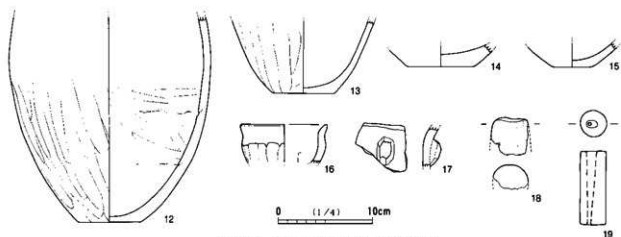
出土遺物としては、025号跡でふれたようにカマド跡から出土した12・17・20の土器に限られる。

027号跡（第34図、図版12）

台地南東斜面側の縁辺で検出され、F4-14グリッドを主体に位置する。025号跡の北東壁に辛うじて確



第32図 021号跡及び出土遺物



第33図 021号跡出土遺物 (19 2/3)

認められた。北側コーナーと壁の一部に限られる。平面の形態は、正方形を呈すると考えられ、規模は025号跡などに比べかなり小規模であろうと考えられる。カマドやピットは検出されなかった。検出面からの深さは0.16mと浅い。覆土は黄褐色土を主体とし、ロームブロックが若干混入する。出土遺物は皆無であるが、025号跡などと大きな時期差はないと推測される。

030号跡 (第37図、図版13)

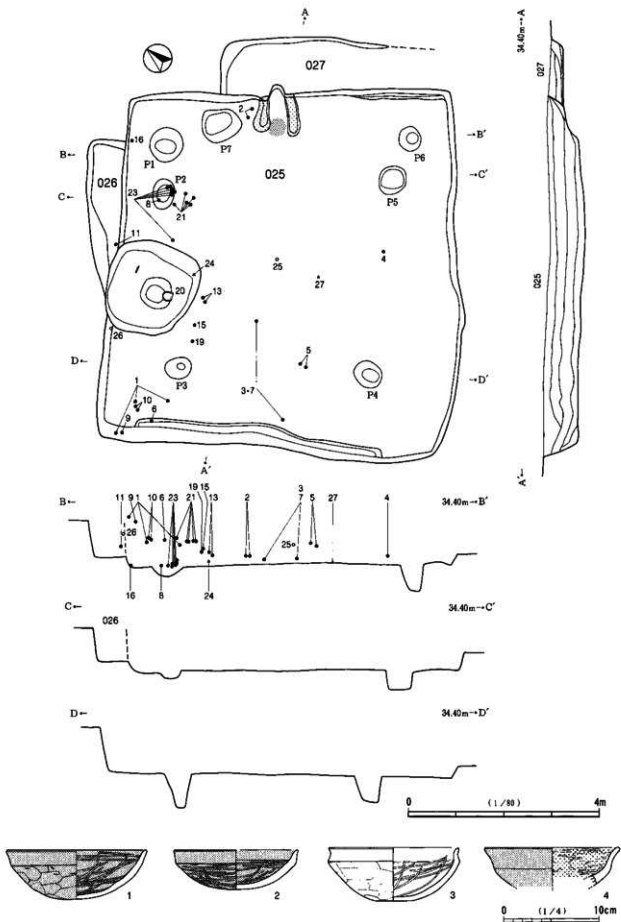
台地南東斜面側の縁辺で検出され、G3-33グリッドを主体に位置する。一部を確認調査グリッドで壊しているほか、南側コーナーは斜面のためほとんど遺存していなかった。平面の形態は、正方形を呈し、規模は4.4m×4.6mを測る。主軸方位はN-36°-Wで、カマドは北西壁のややコーナーに寄った位置にある。検出面からの深さは最も深い壁で0.60mである。床面積は約16.50㎡を測る。覆土は褐色土を主体とし、ロームの混入が多い。ピットは5か所で検出され、配置からP1・P3~P5が主柱穴と考えられるが、P2も42cmの深さがあるため、柱穴とすべきかもしれない。壁溝は全周していたものと推測される。カマド周辺の床面のみが硬化していた。

出土遺物は、散漫に出土している。床面からの出土が多い。図示できたのは、須恵器杯2点、須恵器小型短頸壺1点、土師器杯2点、甕1点、土製支脚1点、手捏土器1点である。1の須恵器内面には明瞭な墨の痕跡が残っている。また4の杯底面には浅い線刻が施されている。

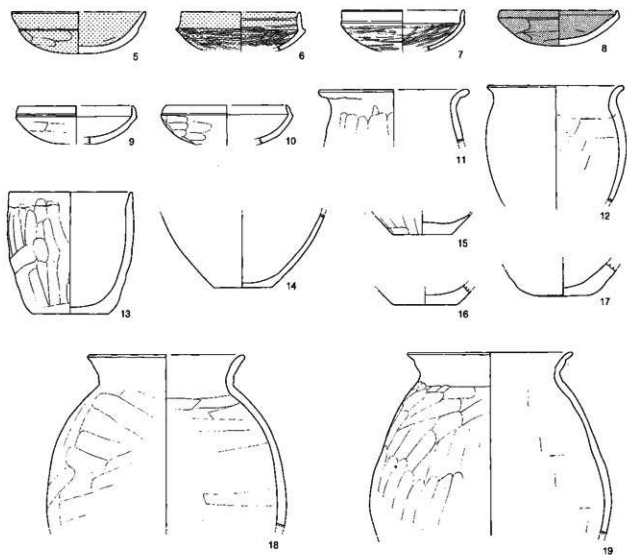
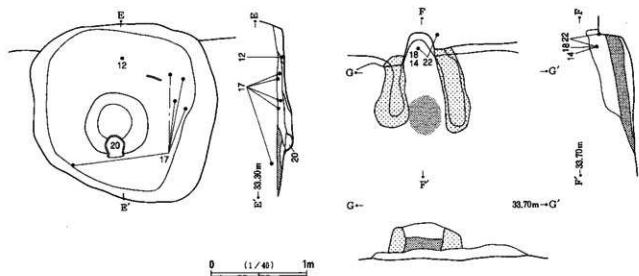
036号跡 (第38図、図版13)

台地北東部で検出され、H2-23グリッドを主体に位置する。南壁が斜面にかかり周溝のみが確認され、溝033号跡が一部分を壊している。平面の形態は、正方形を呈し、規模は5.5m×6.0mを測る。主軸方位はN-21°-Wで、カマドは北西壁中央に位置する。検出面からの深さは最も深い壁で0.61mである。床面積は27.95㎡を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームブロックが少量混入し粘性が強い。カマド周辺では構築材の砂質粘土が混入する。ピットは4か所で検出され、P1~P4は主柱穴と考えられる。壁溝は全周している。壁際を除き床面の広い範囲が硬化していた。

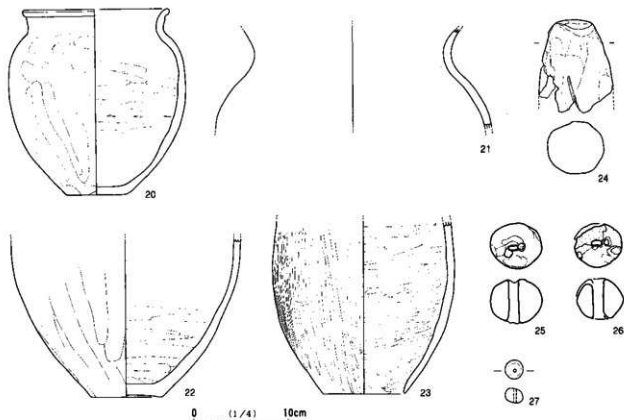
出土遺物は、カマド内とカマド右脇にまとまって出土している。図示できたのは、土師器の高杯2点、甕3点である。高杯がカマド内から出土しているのは、意図的な廃棄と考えられる。



第34図 025・026・027号跡及び出土遺物



第35図 025号跡及び出土遺物



第36図 025号跡出土遺物 (25・26 1/2、27 2/3)

第2節 小堅穴跡

概要

一般的な堅穴住居跡に見られる諸施設を伴わない小堅穴が検出されている。形態は円形ないしは隅丸方形を呈するがみな不安定で、遺物を伴わないため時期は不明である。

019号跡 (第39図、図版11)

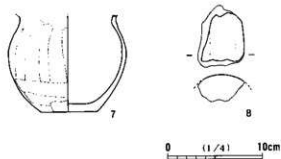
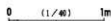
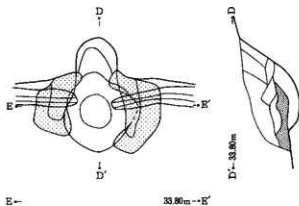
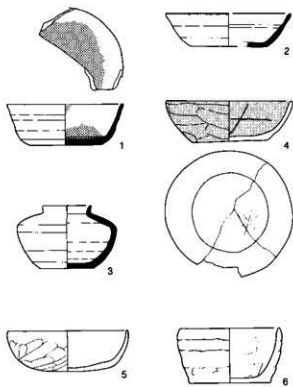
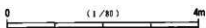
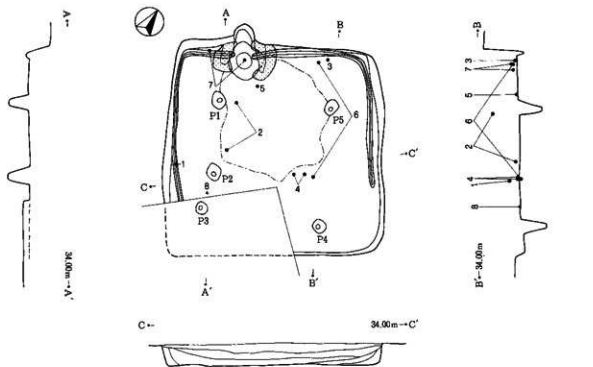
E4-80グリッドを主体に検出された。堅穴015号跡の調査中に検出され、切り合いの前後関係は不明である。不整形を呈し、壁の立ち上がりはゆるい。検出面径3.3m、底径3.0m、検出面からの深さは0.28mを測る。暗褐色土を主体とし、中層には焼土粒を少量混入する。出土遺物はなかった。

024号跡 (第39図、図版12)

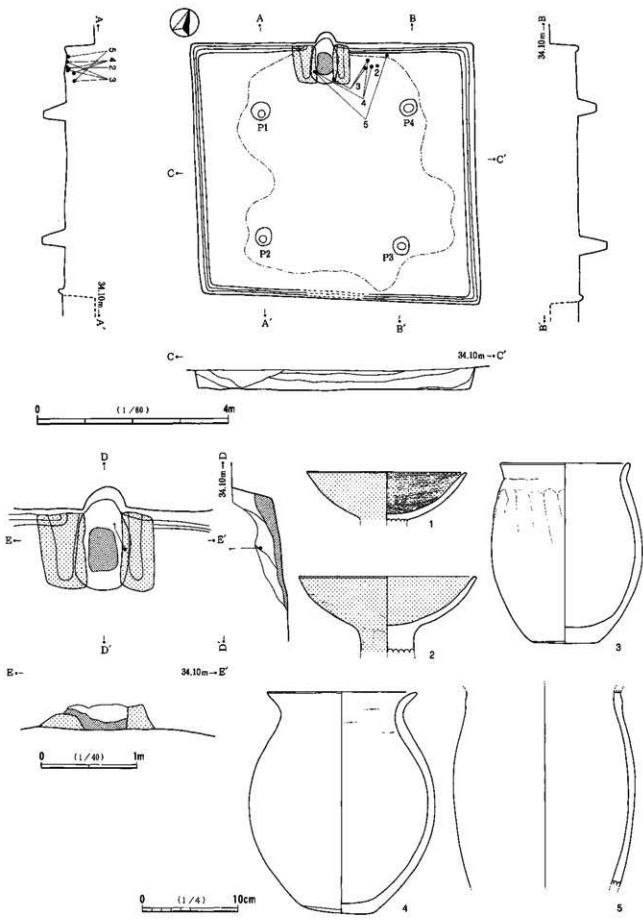
G3-71グリッドを主体に検出された。台地の南東側斜面の縁辺に位置し、南東側が調査区域外となっており未調査である。たぶん南東側は斜面のため失われていると推測される。丸味のある方形を呈し、北西辺は4.3m、検出面からの深さは1.2mを測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム及びロームブロックを多く混入する。出土遺物がなかったため時期は不明だが、壁の状況や覆土の堆積状態も一般的な堅穴住居跡と変わらないことから、017号跡のような工房跡的な施設であった可能性もあるだろう。

029号跡 (第39図、図版12)

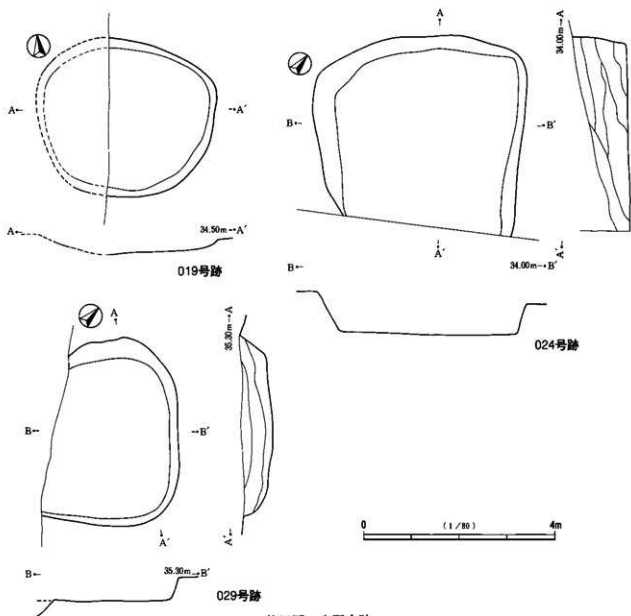
D3-86グリッドを主体に検出された。円墳028号跡の中央から検出され、遺跡を縦断する溝001号跡によって1/3が壊されている。丸味のある方形を呈する。北東辺は3.8mを測り、検出面からの深さは0.5mを



第37図 030号跡及び出土遺物



第38図 036号跡及び出土遺物



第39図 小堅穴跡

測る。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム及びロームブロックを多く混入する。出土遺物はなかった。円墳の周溝内に位置するため何らかの古墳関連施設の可能性も考えられるが、木棺直葬などの埋葬施設と考えられる状況が土層断面等に観察されていないことから、時期が異なる遺構と判断される。時期については遺物が出土しないため不明である。

第3節 古墳

概要

本調査区内で検出された古墳は、わずか1基である。春日作遺跡が位置する台地は、富岡古墳群を構成する円墳が点在するやせ尾根状の台地につながっており、古墳群本体の北西端にあたっている。富岡古墳群は、古墳時代前期から中期の古墳群からなり、20m～30m規模の台地整形を伴う円墳が点在している。平成8年度から平成10年度にかけて財団法人千葉県文化財センターによって、円墳7基の発掘調査が実施された。その成果は、平成13年度に『千葉東南部ニュータウン24』として報告されている。本遺跡から検出された古墳の時期は、出土した土器から5世紀後半と考えられることから、富岡古墳群を構成する古墳のひとつと考えられる。検出された古墳は、台地のわずかにある平坦部から西側にやや寄っていることから、面的にはこの他にも古墳数基が築造された可能性がある。ただ本遺跡で旧石器時代末の細石刃石器群のブロックが検出されていることなどを考えると大きな土地の改変がなかったと判断されることから、検出された古墳しか本台地上には築造されなかった可能性の方が高いかもしれない。

028号跡（第40図）

台地の北東部に位置し、台地中央の平坦面からはややはずれた場所に築造されている。調査前に墳丘は確認されておらず、本調査によって辛うじて周溝の約半分が検出されたにとどまる。墳丘が失われた原因は、当然の事ながら人為的なものと考えられるが、細石刃石器のブロックがⅡ層中から検出されていることを考えれば、墳丘の削平のみで大きな土地の改変が行われなかったと判断できる。周溝の中央を溝001号跡が壊しているほか、本古墳に伴わないと判断される小竪穴の029号跡が中央に位置している。029号跡との新旧関係は不明である。

周溝の形態から円墳と判断され、周溝外径は約11.0mと推測される。周溝の幅は1.4m前後で、遺存の良い部分での検出面から底面までの深さは0.55mを測る。旧表土は確認できなかった。周溝の覆土は、上層は黒褐色土を主体とロームの混入が少なく、下部は暗茶褐色を呈しロームの混入が多かった。埋葬施設は検出されなかった。029号跡は竪穴状を呈する掘り込みで、木棺等を埋設した痕跡を土層中には観察できなかった。出土遺物は、周溝底面近くから内外面赤彩された土師器杯が4点出土している。この他に甕の底部破片が出土しているが、古墳に伴う甕ではなからう。

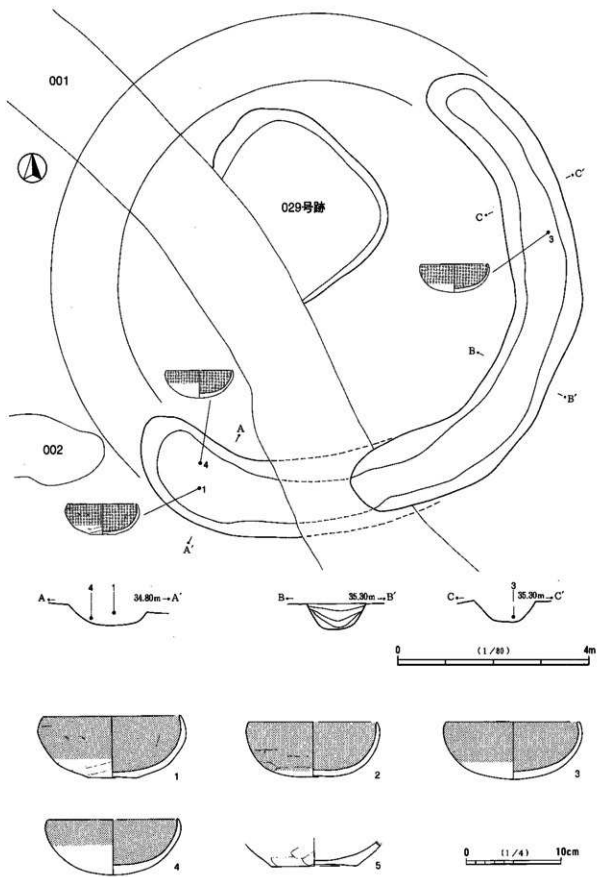
第4節 有天井土壌

概要

周溝等を伴わない有天井土壌が2基検出されている。2基離れて位置し、時期を特定する遺物が出土していないことから2基の関連性は不明だが、千葉東南部地区事業地内の諸遺跡から検出された例から8世紀代のものと推測される。台地上で検出された竪穴住居跡の時期に重なる可能性があるが、竪穴が営まれたのも断続的であると考えられることから一時的に墓域として使用されたのではないかと思われる。

020号跡（第41図、図版13）

E4-17グリッドを主体に検出された。台地中央に位置し、溝001号跡以外には周囲に遺構がない。検出面の形態は楕円形を呈する。長軸長2.9m、短軸長2.1mを測る。階段状に深くなり、北壁側に一段深い掘り込みを行い玄室としている。玄室はやや角張った楕円形を呈し、底面は長軸長2.2m、短軸長0.7mを測る。検出面から底面までの深さは1.1mである。底面には3条の短く浅い溝が、短軸方向に等間隔に並ん

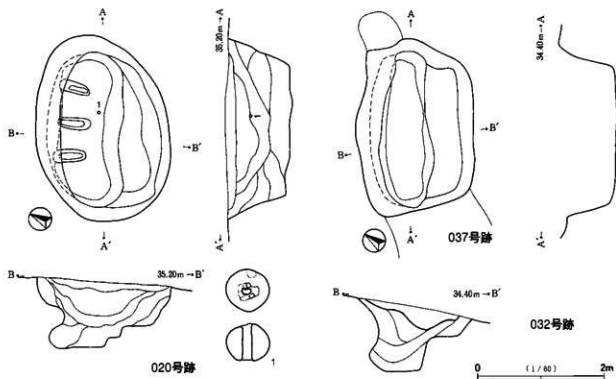


第40图 028号跡及び出土遺物

でいる。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームの混入は壁面近くを除き少ない。出土遺物は、覆土中位から土玉が1点出土している。

032号跡 (第41図、図版13)

F3-49グリッドを主体に検出された。台地南東側斜面に位置し、溝001号跡や竪穴住居跡012号跡や030号跡に挟まれ、溝037号跡によっても上面を削られている。検出面の形態は台形を呈し、長軸長2.7m、短軸長1.9mを測る。長軸の北側約半分が深くなり玄室となっている。玄室はやや角張った楕円形を呈し、底面は長軸長2.2m、短軸長0.6mを測る。検出面から底面までの深さは1.1mである。底面はほぼ平らである。覆土は暗褐色土を主体とし、下部層は武蔵野ロームの混入があり粘質性がある。出土遺物は、皆無である。



第41図 有天井土坑 (1 1/2)

第5節 その他の土坑

概要

検出された土坑は少なくわずか3基である。この他に近世以降の新しい時期と判断される炭窯が検出されているが、詳細については省略する。

022号跡 (第42図、図版13)

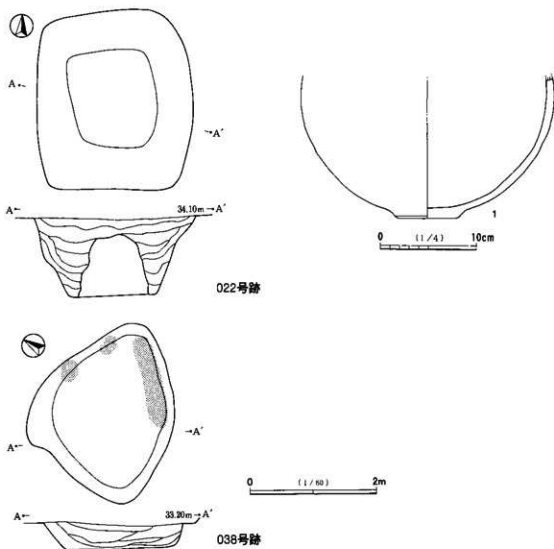
E3-60グリッドを主体に検出された。台地中央に位置し、古墳028号跡に隣接している。隅丸の長方形を呈する。長軸長2.8m、短軸長2.5m、検出面からの深さは1.7mである。中央に大きなロームの固まりが検出された。掘り残したものが、一旦掘りきってからロームを積んだのか定かでない。覆土は暗褐色土を主体とし、ロームの混入は少なく全体に粘質が強い。中央のローム塊と壁の間から甕の胴部が出土している。胴部の丸味が強く、底部径が小さい。外面は全面ナデによる調整が施されている。時期は、古墳時代前期から中期であろう。

023号跡 (第32図、図版12)

D5-19グリッドを主体に検出された。竪穴住居跡の021号跡の調査中に検出したが、新旧関係は不明である。楕円形を呈すると考えられ、長軸長2.5mで、検出面からの深さは0.4mである。遺物の出土はなく時期は不明である。土層断面による確認はできなかったが、本土坑の方が新しいと思われる。

038号跡 (第42図、図版13)

F4-33グリッドを主体に検出された。竪穴住居の025号跡の床面下で検出されている。不整楕円形を呈し、検出面の規模は、長径2.6m、短径2.3mで025号跡の床面から底面までの深さは0.4mを測る。覆土は褐色土を主体とし、ロームの混入は少ない。東側底面には焼土が薄く散布していた。025号跡の貼床を除去した後に本土坑が検出されており、025号跡に関連した施設の可能性があるほか、026号跡にも関連があるかもしれない。土坑の性格は不明である。



第42図 その他の土坑

第6節 溝

概要

溝は8条検出された。台地を縦断する溝が1条ある他は、距離と幅ともに小規模である。土師器などの遺物が出土しているが、溝に本来伴っていたと考えられる遺物はなく、多くは竪穴住居跡を壊した際の遺物が混入していると考えられる。溝の時期は不明だが、近世以降のものが多いのではないかと考えられる。区画整理事業が計画されるまで使われた道路に関連する溝も確認されたが、やせ尾根状の台地であり土地利用もしくにくい場所であることから、竪穴住居跡が営まれた時期の道路の位置とさほど変わらない様相を呈しているのかもしれない。

001号跡（第18・43図）

C2グリッドからH2グリッドにかけて、台地を縦断する唯一の溝である。約150mにわたる。途中で分岐して2条に分かれている。溝幅は一定せず、東側では斜面にかかるため、斜面側の壁を失っている。最低2条の溝からなるようで、底面は不安定である。調査が実施された頃には、木々が繁茂した台地となっていたが、昭和45年当時の地形図には、台地を縦断する細い道路が通っており、001号跡がそれにあたる様である。溝の検出面は、覆土が硬く踏み締められた状態で、道路として使用されていたためと考えられる。覆土から縄文土器や土師器などが出土しているほか、C2-83グリッドにあたる溝底面から歯を伴う馬の下顎骨が出土している。下顎のみでその他の部位は出土していない。道路面の下から出土しており、単なる埋葬ではないのかもしれない。

002号跡（第18・43図）

C3グリッドからD4グリッドにかけて検出された溝である。溝の001号跡に沿って約24mの距離があり、検出面が001号跡と同様に硬く締まっており道路として使われた溝と考えられる。近世以降の炭窯が2基溝と重複して検出されている。時期的には001号跡よりも古いと思われる。

007号跡（第18図）

D3グリッドで検出された溝である。台地の背にあたる若干の平坦部に位置している。緩くカーブしており底面はほぼ平らである。検出面からの深さは、深いところで0.3mである。覆土は黒褐色を主体として、若干の焼土粒が混入する。覆土の状況から028号跡のような古墳の周溝ではないと判断される。出土遺物はなく、時期は不明である。

008号跡（第18図）

E3グリッドで検出された溝である。北側斜面に位置している。L字状に途中で曲がり001号跡にぶつかる。約17mの距離があり、検出面の幅は広い所で1.6mである。緩いU字状の掘り込みである。溝の検出面は覆土が硬く締まっており、001号跡と同様に道路として使われた溝と考えられる。縄文土器や土師器の破片が出土しているが、直接の関連性はないと考えられる。

009号跡（第18図）

C2からE3グリッドにかけて検出された溝である。北側斜面に沿って約36mの距離がある。検出面が001号跡と同様に硬く締まっており道路として使われた溝と考えられる。最大幅は2.5mもあり、何度か掘り返されているのかもしれない。縄文土器や土師器の破片が出土しているが、直接の関連性はないと考えられる。

010号跡（第18図）

C3からD3グリッドで検出された溝である。南西斜面に位置している。溝の001号跡に壊されているほか攪乱もあり不明瞭である。斜面に向かって約5m程しか残っていない。検出面の覆土は硬く締まっており、001号跡と同様に道路として使われた溝と考えられる。出土遺物はなかった。

031号跡（第18図）

D5グリッドからE4グリッドにかけて検出された短い溝である。竪穴住居跡の013号跡や021号跡を一部壊している。距離は約12mである。検出面からの深さは、10cmに満たない浅さである。出土遺物はなく、時期は不明である。

033号跡（第18図）

F3グリッドからI2グリッドにかけて検出された溝である。途中で検出されていないが、溝の001号跡に沿って約44mの距離がある。検出面が001号跡と同様に硬く締まっており、道路として使われた溝と考えられる。時期的には001号跡よりも古いと思われる。出土遺物はなかった。

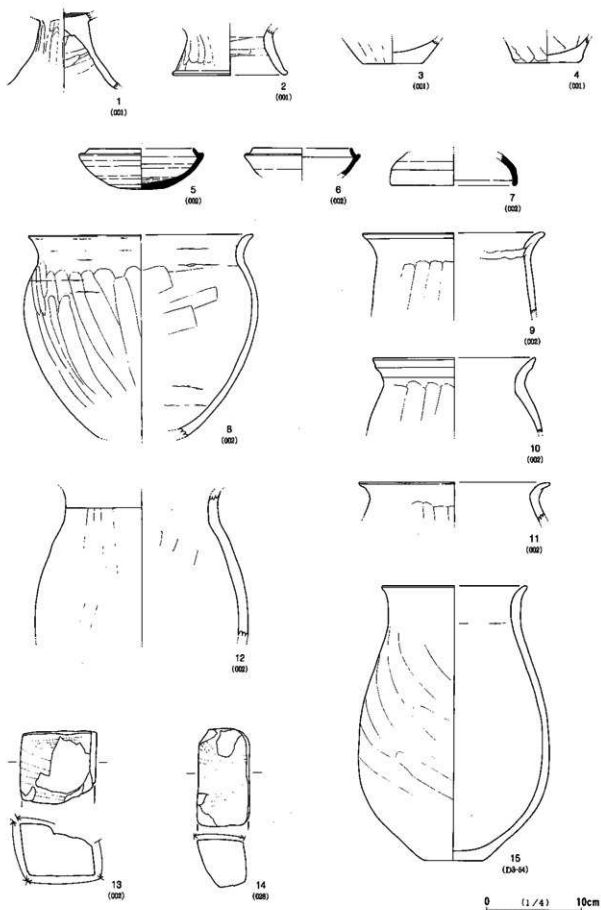
037号跡（第18図）

F3グリッドからF4グリッドにかけて検出された溝である。台地南東側斜面に沿って検出され、有天井土壇の032号跡や竪穴住居跡の012号・027号跡の一部を壊している。約19mの距離がある。検出面からの深さは、深いところで0.5mである。他の溝のように検出面に硬く締まった面が検出されなかったが、道路として使われた溝と考えられる。

第7節 遺構外出土遺物（第43図）

溝などや遺構外の包含層から出土した古墳時代以降の遺物をまとめた。台地上の遺構数が少ないこともあり、遺構外から出土した遺物は少量である。溝から出土した遺物は、溝に直接関連した遺物ではなく、周辺の竪穴住居跡に関連した遺物と推測される。

1～4は001号跡の覆土から出土している。5～13は002号跡の覆土から出土している。002号跡周辺には、竪穴住居跡が検出されていないが、7世紀代の須恵器杯などが出土しており、付近に竪穴住居跡が存在した可能性があろう。13の砥石の石材は凝灰岩である。近世以降のものであろう。14の砥石は028号跡の周溝覆土上層から出土しているが、石材が凝灰岩であることから近世以降のものであろう。15はグリッド出土である。胴部下半に最大径があり、やや特異である。



第43図 溝及び遺構外出土遺物 (13・14 1/2)

第11表 土器觀察表

() は復元係 () は残存高

遺構番号	挿図番号	器種	器形	遺存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考	
001	第43図1	土師器	高杯	30%	口径 底径 器高 (8.0)	内面 △?? 外面 △??	内面 橙褐色 外面 #	密		
	第43図2	土師器	高杯	15%	口径 底径 器高 (5.0)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 橙褐色 外面 #	密		
	第43図3	土師器	甕	5%	口径 底径 器高 (2.5)	内面 △?? 外面 △??	内面 褐色 外面 #	密		
	第43図4	土師器	甕	10%	口径 底径 器高 (2.7)	内面 △?? 外面 △??	内面 黒褐色 外面 #	密		
002	第43図5	須恵器	杯	55%	口径 底径 器高 4.3	内面 ?? 外面 ?? + 回転△??	内面 灰色 外面 #	密		
	第43図6	須恵器	杯	5%	口径 (10.4) 底径 器高 (2.7)	内面 ?? 外面 ??	内面 灰色 外面 #	密		
	第43図7	須恵器	蓋	5%	口径 (13.0) 底径 器高 (3.2)	内面 ?? 外面 ??	内面 灰色 外面 #	密		
	第43図8	土師器	甕	25%	口径 (23.4) 底径 器高 (21.2)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 赤褐色 外面 黒褐色	密	二次焼成 内外面に黒斑 外面に煤	
	第43図9	土師器	甕	10%	口径 (19.0) 底径 器高 (8.5)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 褐色 外面 #	密		
	第43図10	土師器	甕	10%	口径 (17.0) 底径 器高 (7.7)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 赤褐色	密		
	第43図11	土師器	甕	10%	口径 (20.0) 底径 器高 (4.1)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密		
	第43図12	土師器	甕	15%	口径 底径 器高 (15.2)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 橙褐色 外面 #	密		
	011	第25図1	土師器	杯	25%	口径 (11.0) 底径 器高 4.9	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
		第25図2	土師器	鉢	50%	口径 (16.0) 底径 (6.6) 器高 9.2	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △?? + △??	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
		第25図3	土師器	甕	85%	口径 16.4 底径 5.5 器高 25.8	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黄褐色 外面 赤褐色	密	外面に煤・黒斑 二次焼成
		第25図4	土師器	甕	70%	口径 15.7 底径 器高 (16.3)	内面 ?? + △?? 外面 ??	内面 褐色 外面 #	密	外面に黒斑
第25図5		土師器	甕	15%	口径 (8.4) 底径 器高 (13.3)	内面 ?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤	
第25図6		土師器	甕	5%	口径 底径 器高 (6.7)	内面 ?? + △?? 外面 △?? + △??	内面 黄褐色 外面 #	密		
012	第26図1	土師器	杯	55%	口径 (12.6) 底径 器高 4.1	内面 ?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理	
	第26図2	土師器	杯	60%	口径 10.2 底径 器高 6.1	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 褐色 外面 #	密	内外面黒色処理	
	第26図3	土師器	杯	5%	口径 (13.0) 底径 器高 (3.4)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理	
	第26図4	土師器	杯	70%	口径 11.0 底径 器高 5.5	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △?? + △??	内面 橙褐色 外面 #	密		
	第26図5	土師器	杯	15%	口径 (12.2) 底径 器高 (3.6)	内面 ?? + △?? + △?? 外面 ?? + △?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理	
	第26図6	土師器	高杯	45%	口径 18.8 底径 器高 (5.6)	内面 ?? + △?? + △?? 外面 ?? + △?? + △?? + △??	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理	
	第26図7	土師器	甕	55%	口径 16.8 底径 器高 (11.7)	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △??	内面 黒褐色 外面 赤褐色	密	二次焼成 外面に煤・黒斑	
013	第28図1	土師器	鉢	95%	口径 11.2 底径 器高 6.0	内面 ?? + △?? 外面 ?? + △?? + △??	内面 黒色 外面 黄褐色	密		

() は復元径 [] は残存高

遺構番号	博図番号	器種	器形	遺存度	法量 (cm)	調 整	色 調	胎土	備 考
013	第28図2	土師器	高杯	10%	口径 — 底径 — 器高 [3.5]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 #	密	内面に黒斑
	第28図3	土師器	甕	60%	口径 11.4 底径 6.4 器高 11.2	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 黄褐色 外面 黒褐色	密	外面に黒斑
	第28図4	土師器	甕	10%	口径 — 底径 (8.8) 器高 [3.2]	内面 ㄱ'ㄱ' 外面 ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第28図5	土師器	甕	10%	口径 — 底径 (20.6) 器高 [6.4]	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 赤褐色 外面 #	粗	石灰・長石等多量
014	第28図10	土師器	杯	100%	口径 9.4 底径 — 器高 4.0	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第31図1	土師器	杯	55%	口径 (12.6) 底径 — 器高 4.1	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
015	第31図2	土師器	杯	15%	口径 (13.0) 底径 — 器高 [3.4]	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 #	密	
	第31図3	土師器	杯	35%	口径 — 底径 — 器高 [3.5]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 赤褐色 外面 #	密	
	第31図4	土師器	高杯	85%	口径 12.5 底径 9.6 器高 10.0	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 黄褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第31図5	土師器	甕	10%	口径 (17.8) 底径 — 器高 [8.0]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 黒褐色 外面 褐色	密	
	第31図6	土師器	甕	20%	口径 — 底径 (8.0) 器高 [19.0]	内面 ㄱ'ㄱ' 外面 ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 赤褐色	密	外面に煤 二次焼成
	第28図11	須恵器	杯	55%	口径 9.4 底径 — 器高 3.2	内面 ㄉ' 外面 ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 灰白色 外面 #	密	長石・珪石若干目立つ 底群細粒・刷り
017	第28図12	土師器	杯	60%	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.2	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第28図13	土師器	杯	50%	口径 (13.0) 底径 — 器高 3.3	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 橙褐色	密	内外面黒色処理
	第28図14	土師器	杯	50%	口径 (12.4) 底径 — 器高 4.3	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 #	密	内外面黒色処理 外面に黒斑
	第28図15	土師器	杯	95%	口径 12.8 底径 — 器高 3.8	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第28図16	土師器	杯	30%	口径 (14.8) 底径 — 器高 3.5	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第28図17	土師器	杯	20%	口径 (13.0) 底径 — 器高 [3.6]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 黒褐色 外面 褐色	密	内外面黒色処理 ㄱ'ㄱ'目立つ
	第28図18	土師器	杯	65%	口径 12.0 底径 — 器高 6.2	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第28図19	土師器	杯	70%	口径 10.3 底径 — 器高 6.6	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤
	第28図20	土師器	杯	30%	口径 (13.7) 底径 — 器高 6.1	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	内面に黒斑
	第28図21	土師器	高杯	20%	口径 (13.0) 底径 — 器高 [4.4]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ'	内面 褐色 外面 黒褐色	密	内外面黒色処理
	第28図22	土師器	高杯	45%	口径 (14.6) 底径 — 器高 [3.9]	内面 ㄉ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	ㄱ'ㄱ'目立つ
	第28図23	土師器	高杯	40%	口径 — 底径 9.4 器高 [5.3]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'ㄱ'	内面 黄褐色 外面 #	密	
	第28図24	土師器	高杯	40%	口径 — 底径 8.6 器高 [5.3]	内面 ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'	内面 黄褐色 外面 #	密	
	第28図25	土師器	高杯	30%	口径 — 底径 — 器高 [7.3]	内面 ㄉ'・ㄱ'ㄱ'・ㄱ'ㄱ' 外面 ㄱ'ㄱ'	内面 橙褐色 外面 #	密	

() は復元係 () は残存高

遺構番号	挿図番号	器種	器形	遺存度	法量 (cm)	調 整	色 調	胎土	備 考
017	第28図26	土師器	鉢	30%	口径(19.4) 底径(7.0) 器高 10.9	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	二次焼成 内面に黒斑 外面に煤
	第29図27	土師器	鉢	15%	口径(16.0) 底径— 器高(6.4)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 #	密	
	第29図28	土師器	甕	95%	口径 11.4 底径 5.7 器高 11.6	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に煤 二次焼成
	第29図29	土師器	甕	85%	口径 13.4 底径 6.6 器高 12.9	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 赤褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤
	第29図30	土師器	甕	95%	口径 13.8 底径 6.0 器高 12.9	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黄褐色 外面 #	密	内面に黒色・灰褐色の 付着物あり
	第29図31	土師器	甕	25%	口径(21.0) 底径(6.8) 器高 19.3	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	お打目立つ
	第29図32	土師器	甕	20%	口径(16.4) 底径— 器高(14.2)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 赤褐色	密	二次焼成 外面に煤
	第29図33	土師器	甕	10%	口径(18.0) 底径— 器高(7.5)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第29図34	土師器	甕	20%	口径(13.0) 底径— 器高(11.6)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	お打目立つ
	第29図35	土師器	甕	15%	口径 16.0 底径 [7.4] 器高 [7.4]	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 橙褐色	密	内面に黒斑
	第29図36	土師器	甕	75%	口径 17.4 底径 7.5 器高 24.2	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黄褐色 外面 橙褐色	密	二次焼成 外面に煤 お打目立つ
	第29図37	土師器	甕	10%	口径 18.6 底径— 器高 [7.2]	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第29図38	土師器	甕	15%	口径(14.8) 底径— 器高(7.5)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 橙褐色	密	二次焼成 外面に煤・黒斑
	第29図39	土師器	甕	30%	口径— 底径 6.4 器高(13.9)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤・黒斑
	第29図40	土師器	甕	50%	口径— 底径 5.0 器高(4.4)	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑 お打目立つ
	第29図41	土師器	甕	10%	口径— 底径 6.4 器高(3.3)	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 黒褐色	密	外面に黒斑
	第29図42	土師器	甕	10%	口径— 底径 7.2 器高(2.5)	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤
	第29図43	土師器	手捏土器	50%	口径(6.2) 底径 4.4 器高 6.7	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第29図44	土師器	手捏土器	25%	口径(6.2) 底径(4.0) 器高 3.0	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第29図45	土師器	手捏土器	50%	口径— 底径 4.4 器高(1.8)	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	
第29図46	土師器	手捏土器	60%	口径— 底径 3.8 器高(2.7)	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密		
018	第30図53	須恵器	杯	95%	口径 10.8 底径— 器高 4.6	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 灰白色 外面 #	密	底部回転すり
	第30図54	土師器	杯	35%	口径 8.6 底径— 器高(4.2)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 #	密	
	第30図55	土師器	杯	60%	口径(12.2) 底径— 器高 4.2	内面 ㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 黒褐色 外面 褐色	密	
	第30図56	土師器	甗	65%	口径(23.3) 底径 8.6 器高 30.5	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 黄褐色	密	外面に黒斑
	第30図57	土師器	甗	10%	口径(24.0) 底径— 器高(11.2)	内面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ 外面 ㊦ ⁺ ・㊦ ⁺ ・㊦ ⁺	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面に黒斑

() は復元径 () は残存高

遺構番号	埴田番号	器種	器形	遺存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考
018	第30図58	土師器	甔	15%	口径 底径 (6.8) 器高 (10.6)	内面 へ??? 外面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	
	第30図59	土師器	甔	5%	口径 底径 器高 (12.7)	内面 へ??? 外面 へ???	内面 褐色 外面 #	密	
	第30図60	土師器	甔	5%	口径 (12.1) 底径 (4.3) 器高 (3.1)	内面 不明 外面 へ???	内面 褐色 外面 赤褐色	密	
	第30図61	土師器	甔	5%	口径 底径 4.5 器高 (3.8)	内面 不明 外面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 黄褐色 外面 赤褐色	密	二次焼成 外面に煤
021	第32図1	土師器	杯	95%	口径 6.0 底径 器高 4.6	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 褐色 外面 #	密	内面黒色処理
	第32図2	土師器	杯	85%	口径 12.0 底径 器高 3.6	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第32図3	土師器	杯	55%	口径 7.3 底径 器高 5.0	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 橙褐色 外面 褐色	密	内外面黒色処理
	第32図4	土師器	杯	95%	口径 13.4 底径 器高 4.8	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 赤褐色 外面 褐色	密	
	第32図5	土師器	杯	45%	口径 12.2 底径 (7.0) 器高 5.2	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第32図6	土師器	杯	55%	口径 (6.7) 底径 器高 4.3	内面 ㇿ'・へㇿ'・ㇿ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	
	第32図7	土師器	杯	75%	口径 6.8 底径 器高 4.3	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第32図8	土師器	鉢	60%	口径 14.8 底径 6.9 器高 12.7	内面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 黒褐色 外面 ㇿ'・へㇿ'?	密	二次焼成 外面に煤
	第32図9	土師器	高杯	90%	口径 13.6 底径 10.2 器高 10.4	内面 ㇿ'・へㇿ'・ㇿ'?	内面 黄褐色 外面 #	密	内面黒色処理
	第32図10	土師器	甔	70%	口径 14.0 底径 器高 (17.6)	内面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第32図11	土師器	甔	30%	口径 18.4 底径 (18.2) 器高 (8.0)	内面 ㇿ'・へㇿ'・へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	内面に黒斑
	第33図12	土師器	甔	50%	口径 底径 6.6 器高 (21.8)	内面 へ??? 外面 へㇿ'・へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 黒褐色	密	二次焼成 内外面に煤・黒斑
	第33図13	土師器	甔	10%	口径 (15.1) 底径 (6.4) 器高 (7.2)	内面 へ??? 外面 へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第33図14	土師器	甔	10%	口径 底径 (7.0) 器高 (2.3)	内面 へㇿ'・へㇿ'?	内面 褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第33図15	土師器	甔	10%	口径 底径 (4.0) 器高 (3.5)	内面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 褐色 外面 #	密	不復元
	第33図16	土師器	小型甔	5%	口径 (9.0) 底径 器高 (4.0)	内面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第33図17	土師器	甔	-	口径 底径 器高	内面 へ??? 外面 へ???	内面 橙褐色 外面 赤褐色	密	
022	第42図1	土師器	甔	15%	口径 底径 6.0 器高 (14.8)	内面 へ??? 外面 ㇿ'・へㇿ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
025	第34図1	土師器	杯	60%	口径 14.6 底径 器高 5.2	内面 ㇿ'・へㇿ'・ㇿ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	内外面赤彩
	第34図2	土師器	杯	45%	口径 (13.0) 底径 器高 4.1	内面 ㇿ'・へㇿ'・ㇿ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	内外面赤彩
	第34図3	土師器	杯	75%	口径 13.6 底径 4.1 器高 5.6	内面 ㇿ'・へㇿ'・ㇿ'?	内面 橙褐色 外面 赤褐色	密	
	第34図4	土師器	高杯	5%	口径 (14.0) 底径 器高 (4.0)	内面 ㇿ'・ㇿ'?	内面 黒色 外面 橙褐色	密	内面黒色処理 外面に赤彩

() は復元係 [] は残存高

遺構番号	押回番号	器種	器形	遺存度	法 量 (cm)	調 整	色 調	胎 土	備 考
025	第35図5	土師器	杯	45%	口径(14.0) — 底径 器高 4.4	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第35図6	土師器	杯	15%	口径(12.4) — 底径 器高 (4.0)	内面 ㄐ'・ㄏㄗ'・ㄗ'・ 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'・ㄗ'・ (4.2)	内面 黒褐色 外面 #	密	内外面黒色処理
	第35図7	土師器	杯	15%	口径(12.0) — 底径 器高 (4.2)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'・ㄗ'・ 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第35図8	土師器	杯	80%	口径 底径 器高 12.4 3.8	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	内外面に赤影
	第35図9	土師器	杯	25%	口径(12.0) — 底径 器高 (4.0)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第35図10	土師器	杯	30%	口径(12.6) — 底径 器高 (4.1)	内面 ㄐ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 黄褐色 外面 #	密	
	第35図11	土師器	甕	5%	口径(15.4) — 底径 器高 (5.4)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤
	第35図12	土師器	甕	40%	口径 底径 器高 14.2 — (12.3)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 褐色 外面 #	密	二次焼成 外面に煤
	第35図13	土師器	甕	30%	口径(12.8) — 底径 器高 8.0 12.8	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'・ 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 黒褐色 外面 赤褐色	密	
	第35図14	土師器	甕	10%	口径 底径 器高 6.0 (7.5)	内面 ㄏㄗㄗ' 外面 不明	内面 黒褐色 外面 #	密	二次焼成
	第35図15	土師器	甕	5%	口径 底径 器高 6.2 (2.0)	内面 ㄏㄗㄗ' 外面 ㄏㄗㄗ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	
	第35図16	土師器	甕	5%	口径 底径 器高 (6.4) (1.6)	内面 不明 外面 ㄏㄗㄗ'?	内面 黄褐色 外面 赤褐色	密	二次焼成
	第35図17	土師器	甕	10%	口径 底径 器高 6.2 (3.5)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 赤褐色	密	二次焼成
	第35図18	土師器	甕	20%	口径(16.0) — 底径 器高 (18.0)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄏㄗㄗ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	
	第35図19	土師器	甕	40%	口径(17.0) — 底径 器高 (19.0)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 褐色	密	外面に煤・黒斑 二次焼成
	第36図20	土師器	甕	55%	口径(18.1) — 底径 器高 6.2 19.6	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	外面に黒斑
	第36図21	土師器	甕	15%	口径(22.5) — 底径 器高 (11.0)	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・不明	内面 橙褐色 外面 黄褐色	密	
	第36図22	土師器	甕	40%	口径 底径 器高 7.4 (16.4)	内面 ㄏㄗㄗ' 外面 ㄏㄗㄗ'?	内面 褐色 外面 黒褐色	密	
	第36図23	土師器	甕	55%	口径 底径 器高 8.7 (18.1)	内面 ㄏㄗㄗ'・ㄗ'・ 外面 ㄏㄗㄗ'・ㄗ'・ (18.1)	内面 橙褐色 外面 #	密	
	028	第40図1	土師器	杯	55%	口径 底径 器高 14.4 5.3 6.4	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密
第40図2		土師器	杯	30%	口径(13.6) — 底径 器高 5.6	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'・ 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 赤褐色 外面 褐色	密	内外面赤影
第40図3		土師器	杯	100%	口径 底径 器高 7.0 — 6.0	内面 ㄐ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 赤褐色 外面 #	密	内外面赤影
第40図4		土師器	杯	30%	口径(6.8) — 底径 器高 5.8	内面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 橙褐色 外面 #	密	内外面赤影
第40図5		土師器	甕	30%	口径 底径 器高 4.5 (2.2)	内面 ㄏㄗㄗ' 外面 ㄏㄗㄗ'?	内面 黄褐色 外面 黒褐色	密	
030	第37図1	須恵器	杯	40%	口径 底径 器高 12.2 7.4 4.3	内面 ㄐ' 外面 ㄐ'・ㄏㄗㄗ'?	内面 灰色 外面 #	密	内面に黒 底部凹陥へり
	第37図2	須恵器	杯	20%	口径 底径 器高 (13.0) (7.8) 3.5	内面 ㄐ' 外面 ㄐ'	内面 緑灰色 外面 #	密	底部凹陥へり 口縁～体部に黒色火だす

遺構番号	押図番号	器種	器形	遺存度	法量 (cm)	調整		色調	胎土	備考
						()	()			
030	第37図3	須恵器	小型短頸蓋	100%	口径 6.1 底径 5.6 器高 6.6	内面 卍*	外面 卍*・ハツク*	内面 灰色 外面 黒灰色	密	内外面に灰輪 底部回転へり削り
	第37図4	土師器	杯	80%	口径 13.1 底径 7.9 器高 4.2	内面 卍*・ハツク*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 赤褐色 外面 *	密	内外面赤彩 内外面に黒彩
	第37図5	土師器	杯	90%	口径 12.6 底径 — 器高 4.3	内面 卍*	外面 卍*・ハツク*	内面 橙褐色 外面 *	密	
	第37図6	土師器	手握土師	85%	口径 10.5 底径 8.5 器高 8.8	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*	内面 黄褐色 外面 *	密	二次焼成 外面に煤 木炭痕
	第37図7	土師器	甕	50%	口径 — 底径 5.8 器高 (10.1)	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*・ハツク*	内面 赤褐色 外面 黒褐色	密	二次焼成 外面に煤
036	第38図1	土師器	高杯	45%	口径 16.2 底径 — 器高 (5.1)	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 橙褐色 外面 *	密	内外面黒色処理
	第38図2	土師器	高杯	60%	口径 18.8 底径 — 器高 8.0	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 橙褐色 外面 *	密	内外面黒色処理
	第38図3	土師器	甕	45%	口径 13.4 底径 7.2 器高 18.9	内面 ハツク*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 黄褐色 外面 橙褐色	密	二次焼成 外面に煤
	第38図4	土師器	甕	50%	口径 15.8 底径 7.7 器高 23.1	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 橙褐色 外面 *	密	二次焼成
	第38図5	土師器	甕	40%	口径 — 底径 — 器高 (21.0)	内面 ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 橙褐色 外面 黄褐色	密	二次焼成
D3-54	第43図15	土師器	甕	40%	口径 (7.6) 底径 6.0 器高 (18.6)	内面 卍*・ハツク*	外面 卍*・ハツク*	内面 褐色 外面 *	密	二次焼成 外面に黒斑

第12表 土玉計測値表

[] は推定径

押図番号	出土遺構	遺物番号	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	欠損 有無	穿孔孔の 動き	指環圧 痕	色調	備考
第25図7	011	003	35	26	5	28.80			有	灰褐色	黒斑あり
第28図6	013	008	26	22	5	11.91		刺し戻し		黄褐色	黒斑あり
第28図7	013	019	35	25	5	23.10	有	刺し戻し	有	黄褐色	
第28図8	013	021	27	21	5	13.07	有	抜き通し		黒色	黒斑あり、表面光沢あり
第31図7	015	023	[33]	30	6	12.76	有			黄褐色	
第30図47	017	002	26	25	5	16.36		刺し戻し	有	黒色	黒斑あり
第30図48	017	042	23	22	4	8.17	有	抜き通し		黒色	黒斑あり
第30図49	017	058	25	22	6	11.31		刺し戻し	有	褐色	
第30図50	017	059	22	21	5	9.31		抜き通し		赤褐色	黒斑あり
第30図51	017	062	27	24	5	16.00		刺し戻し	有	黒色	黒斑あり
第41図1	020	002	23	19	5	8.97		刺し戻し	有	黒色	黒斑あり
第36図25	025	037	25	21	5	9.58	有	刺し戻し		黒色	黒斑あり、表面光沢あり
第36図26	025	069	27	22	5	13.71		刺し戻し	有	赤褐色	

第13表 玉類計測値表

押図番号	遺構番号	遺物番号	器種	材質	外径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	欠損 有無	備考
第33図19	021	067	管玉	碧玉	10.0	29.0	4.0	5.99	淡緑色		
第36図27	025	072	埋木玉	化石木	7.0	5.0	1.0	0.30	黒色		表面に光沢あり

第14表 紡錘車計測値表

() は推定径

押図番号	遺構番号	遺物番号	器種	材質	上面径 (mm)	下面径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	欠損 有無	備考
第30図52	017	086	紡錘車	ホルンフェルス	(35.0)	(47.0)	13.0	(9.0)	13.23	有	

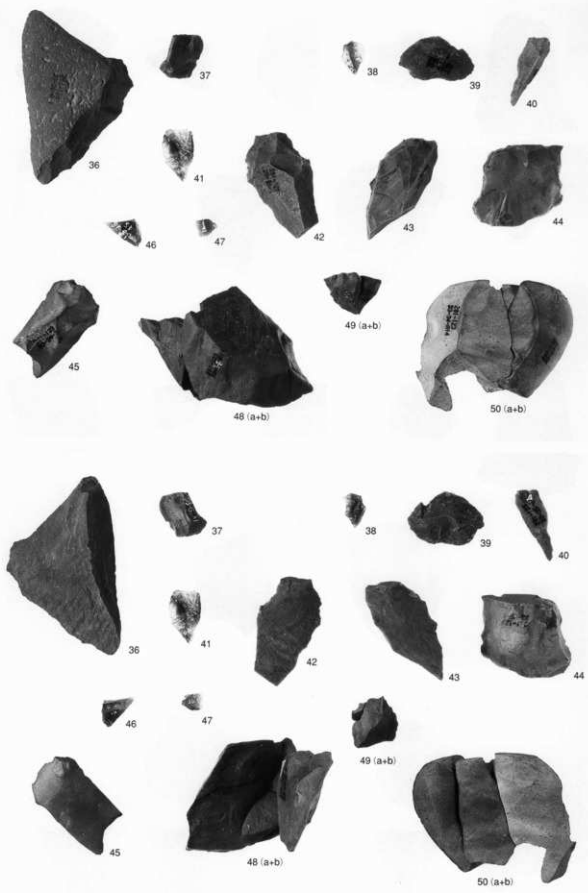




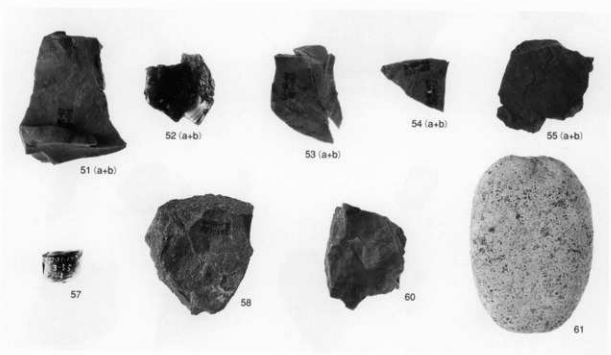
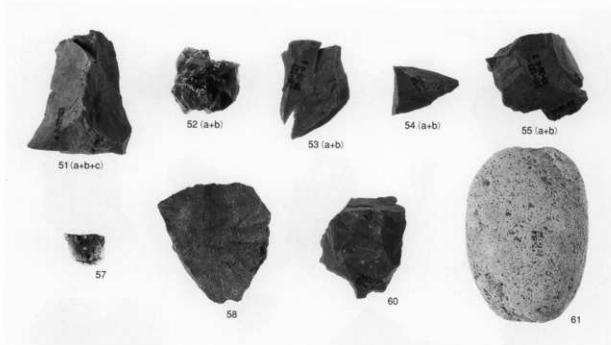




A地点 出土石器(1)



A地点 出土石器(2)

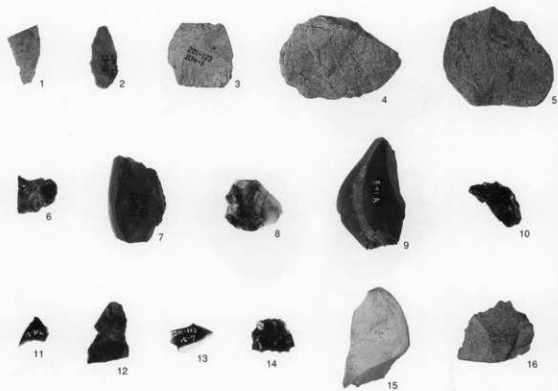
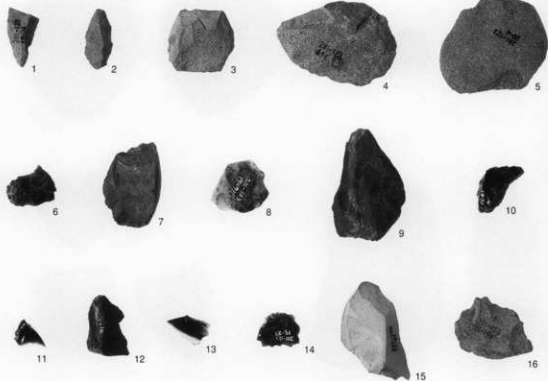


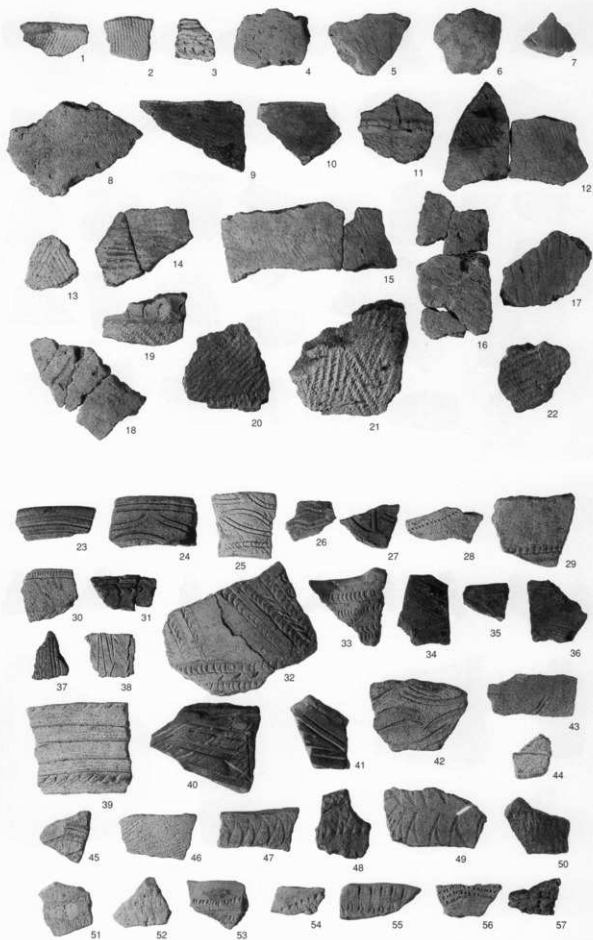


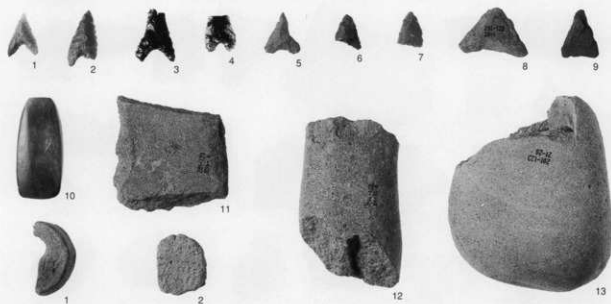
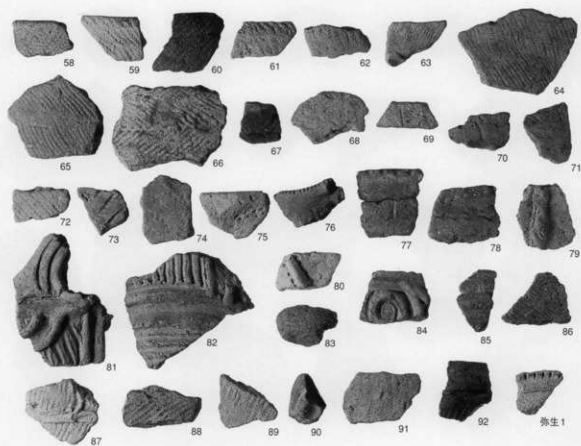
B地点 出土石器



C地点 出土石器









011号跡全景



011号跡カマド



011号跡内部出土状況



012号跡カマド



013号跡全景



013号跡カマド



014・017・018号跡全景



015・018・019号跡全景



015号跡カマド



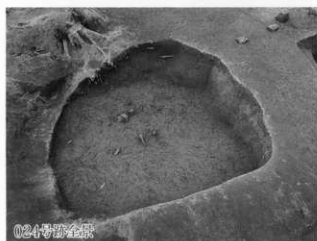
016号跡全景



021号跡全景



021号跡カマド



024号跡全景



025・026・027号跡全景



025号跡カマド



029号跡全景







017-17



017-18



017-19



017-20



017-22



017-26



017-23



017-24



017-28



017-29



017-30



017-30
底部穿孔



017-35



017-36



017-37



017-39



017-43



017-46



018-53



018-55



018-56



021-1



021-2



021-3



021-4



021-5



021-6



021-7



021-8



021-9



021-10



021-11



021-12



025-1



025-2



025-3



025-5



025-7



025-8



025-9



025-10



025 - 12



025 - 13



025 - 14



025 - 22



025 - 23



025 - 20



030 - 3



030 - 1



030 - 4



030 - 5



030 - 6



030 - 2



030 - 7



036 - 2



036 - 1



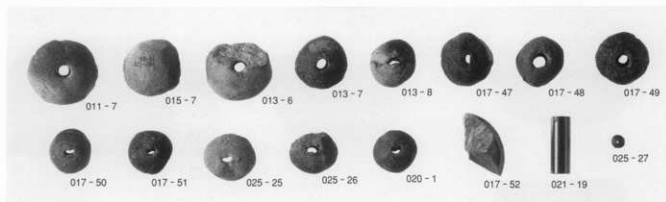
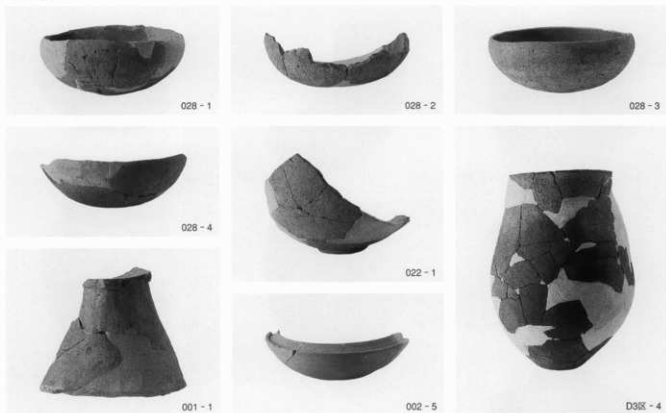
036 - 3



036 - 4



036 - 5



報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん							
書名	千葉東南部ニュータウン27							
副書名	千葉市春日作遺跡							
巻次	27							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第458集							
編著者名	島立桂、蜂屋孝之							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2							
発行年月日	平成15年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
春日作遺跡	千葉県千葉市緑区おゆみ野南4丁目4番地他	201	123	35度32分29秒	140度10分05秒	19971001～19971128	3,700㎡	千葉県東南部土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
春日作遺跡	包蔵地	旧石器時代	遺物集中地点2か所	細石刃、細石刃核、敲石		細石刃石器のブロックを検出		
	包蔵地	縄文時代	陥穴2基	縄文土器（早期、前期、中期）、珠状耳飾、石鏝、磨製石斧、打製石斧				
		弥生時代		弥生土器				
	墓・集落跡	古墳時代	円墳1基	土師器				
			竪穴住居跡13棟	土師器、須恵器、管玉、埋木玉、土玉、支脚、紡錘車				
	奈良時代	竪穴住居跡1棟、有天井土壇2基	土師器、須恵器、支脚、手捏土器、線刻土師器					

千葉県文化財センター調査報告第458集

千葉東南部ニュータウン27

- 千葉市春日作遺跡 -

平成15年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 都 市 基 盤 整 備 公 団
千 葉 地 域 支 社
千葉市美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印 刷 大 和 美 術 印 刷 株 式 会 社
千葉県水更津市潮浜2-1-10